

鹿児島高専だより

第 67 号

平成25年 3 月

〈特集〉 インターンシップ



独立行政法人 国立高等専門学校機構

鹿児島工業高等専門学校

目 次

校長室から

アジアとの交流の推進	1
------------	---

特 集

インターンシップにおける支援体制について	2
インターンシップ受入企業について	3
インターンシップに参加して	4
インターンシップに参加して	4
三菱重工長崎造船所におけるインターンシップ報告	5
インターンシップに参加して	6
インターンシップに参加して	6
海外インターンシップに参加して	7
日本原子力開発機構の研修講座に参加して	8
NSプラント設計(株)におけるインターンシップ	8
(株)セイコーエプソンにおけるインターンシップ	9
富士通株式会社インターンシップを終えて	10
株式会社A・R・Pのインターンシップについて	10
インターンシップを経験して	11

教務だより

創立50周年を迎えて	12
平成24年度一日体験入学	13
平成24年度1年生集団研修報告	14
平成24年度きりしまチャレンジャー実施報告	16
開校記念講演感想文	17
開校記念講演感想文	17
「夢のちから」	17
「夢のちから」を聴いて	18
シンガポールにおける工場見学旅行報告	19
工場見学旅行の感想	20
工場見学旅行	20
工場見学旅行 in シンガポール	21
工場見学旅行について	22
工場見学旅行を終えて	23

学生だより

この2年を振り返って	24
学生会長をして	24
会計局長として	25
文化祭を終えて	25
第50回体育祭を終えて	26
都城・鹿児島高専親善試合結果	27
第49回(平成24年度)九州沖縄地区国立 高等専門学校体育大会等 結果一覧	29
学生表彰者リスト	31

志学寮だより

志学寮での2年間を振り返る	33
---------------	----

専攻科だより

今後の専攻科の課題について	35
専攻科の特別研究について	36
専攻科の特別研究について	36
特別研究を終えて	37
ISTS2011に参加して	37
ISTS2012 in Bangkokに参加して	38
修了生へ贈る言葉	38

地域共同テクノセンターだより

地域共同テクノセンター報告	40
ソフトプラザがごしま「鹿児島高専産学官 連携推進室」	40
KTC会員企業の合同企業説明会	41
共同研究について	41
地域交流について	41
平成24年度人材育成事業について	42
科研費錬成塾について	43

学生何でも相談室だより

統合失調症という病気	44
------------	----

教職員研究活動

ソフトウェア無線の研究	46
アーバンデザインにおける隙間と境界の可能性	46

卒 業

贈る言葉	48
卒業を迎えて	48
鹿児島高専で得たもの	49
鹿児島高専での2年間を振り返って	49
5年間を振り返って	50
5年間を振り返って	50
専攻科修了にあたって	51
専攻科修了にあたって	52
専攻科修了にあたって	52
卒業研究テーマ一覧	53
特別研究テーマ一覧	58
卒業生の就職・進学一覧及び修了生の就職進学一覧	61

教職員の動向

新任のご挨拶	64
着任のご挨拶	64
着任挨拶	65
鹿児島高専での一年を振り返って	65
新任挨拶	67
新任挨拶	67
新任挨拶	68

新任挨拶	68
新任挨拶	69
鹿児島大学での2年間	69
退職のご挨拶	70
退職に当たって	70
退職にあたり	71
社長と従業員はどちらが長生きするでしょうか?	71
退職のご挨拶	72
退職のご挨拶	73
平成23年度永年勤続表彰(退職時)について	74
平成24年度教育功労者表彰について	74

国際交流だより

国際交流事業	75
パース語学研修を振り返って	75
オーストラリア・パース語学研修	76
Memory of the Trip	76
語学研修を終えて	78
1st Intenational Joint Seminar on Engineering Education in Asiaに参加して	80

広報委員会だより

平成24年度の広報委員会の活動について	83
---------------------	----

同窓生だより

在校生のみなさんへ	84
在校生のみなさんへ	84
在校生のみなさんへ	85
大学というところ	85
在校生の皆様	86
鹿児島高専から海外へ	87
大学院に進学し感じた事	87

後援会だより

ご挨拶	89
自立心をもってこそ	89
5年間の思い出	90
長いようで短い5年間	90
未来をきりひらく技術者へ	91

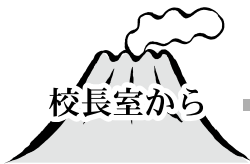
行事予定

平成25年度行事予定表	92
-------------	----

【表紙の説明】

- 写真上左：カセサート大学との交流協定継続調印式
- 写真上右：鹿児島高専創立50周年記念モニュメントデザイン表彰式
- 写真中央：全国高専体育大会サッカー競技優勝の集合写真
- 写真下左：本校開催の九州沖縄地区高専英語弁論大会の集合写真
- 写真下右：平成24年度日本工学教育協会賞の業績賞授賞式





アジアとの交流の推進

校長 赤坂 裕

高専は、実験・実習・演習等を重んじる実践教育を通じて主体性や創造性を育成してきた。不況下においても就職率ほぼ100%を維持する等、高専教育は産業界から高く評価されている。近年ではOECDレポート（2009年）、ワシントンポストの記事（2011年）、マッキンゼー&カンパニーのレポート（2012年）に紹介され、国際的にも高い評価を受けている。

しかし、多くの企業は高専卒業生の技術力や実践力を高く評価する一方で、その英語力やコミュニケーション能力に関しては物足りないとみている。高専学生のグローバル化対応能力を高めることは、高専教育にとって急務である。

本校は、アセアン諸国を中心とするアジアとの連携を深め、学生、教員の交流・研修、海外インターンシップ等によりグローバル化教育を推進する方針である。アセアン諸国を中心とするアジアとの連携を深める根拠としては以下の諸点が挙げられる。

1. 高専機構がアジアの多くの高等教育機関と包括交流協定を結んでいること、
2. 政治的に安定しており比較的治安がよいこと、
3. 教育水準が高いこと、
4. 母国語に加えて英語を公用語としたり、公式の場では英語を使用したりする等、国の平均レベルでは日本に勝る英語力を有していること、
5. 九州・鹿児島に近く地の利があること
6. 安定的な経済成長を続けており、日本に比べ物価が安く、国や市民に活気があること、
7. 多くの日系企業が進出しており、これらの企業を中心に、高専学生をインターンとして受け入れることに積極的な企業が多いこと、
8. 第2次世界大戦で日本の攻撃を受けた国が多いにも関わらず、終戦後の経済、インフラ整備、教育等へ

の日本の協力を正当に評価しており、親日的になっている国が多いこと。

まず必要なのは国際交流を推進する財源の確保である。平成24年度の大学間連携共同教育推進事業に、本校が代表となり、九州沖縄地区国立9高専で応募した『高専・企業・アジア連携による実践的・創造的技術者の養成』が採択された。平成28年度までの5年間にわたり、本事業を推進する経費として毎年約6千万円の予算申請が可能である。

この事業の一環として、2012年11月にタイを訪問した。訪問の目的は3つで、本校と交流協定を結んでいるカセサート大学との協定継続にサインすること、ISTS (International Symposium on Technology for Sustainability) の学生発表を視察すること、キングモンクット工科大学ラカバン校 (KMUTL) の高専サテライトオフィスの開所式に出席することであった。カセサート大学は学生数約6万人のタイを代表する大学である。本校からの出席は3名で、カセサート大学からは、学長、工学部長、国際交流担当副学長はじめ10名程度の教職員が出席された。学長には、学生や教員交流を積極的に行いたいという本校の要望に丁寧に答え、賛同していただいた。

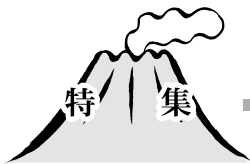
アセアン諸国、香港、台湾等を訪れると日本の高度成長期を髣髴とさせる活気を肌で感じる。学生には、海外研修を通じ、異文化を体験し、英語力を高め、技術を磨き、たくましい技術者に育ってもらいたい。



交流協定継続調印式（カセサート大学 2012年11月22日）



第2回 ISTSで発表する本校学生（バンコク市内のホテル）



インターンシップにおける 支援体制について

教務主事 植村 眞一郎

1年生の入学時におけるアンケートからわかることは、本校を受験する中学生本人の志望動機の一つは、就職が良いからというものです。大学等に比べると高専の就職率はほぼ100%であり、また採用する側の企業からの評価も非常に高く、高専における大きな特徴の一つです。

しかしながら、昨今の経済状況が芳しくない中、就職戦線も高専と言えども例年になく厳しいものがあり、1回目の入社試験で落ちる学生の割合が増えてきています。学生にとって就職先を決めることは人生における一大事であり、希望する企業へ就職することが出来るようそれぞれが努力しています。

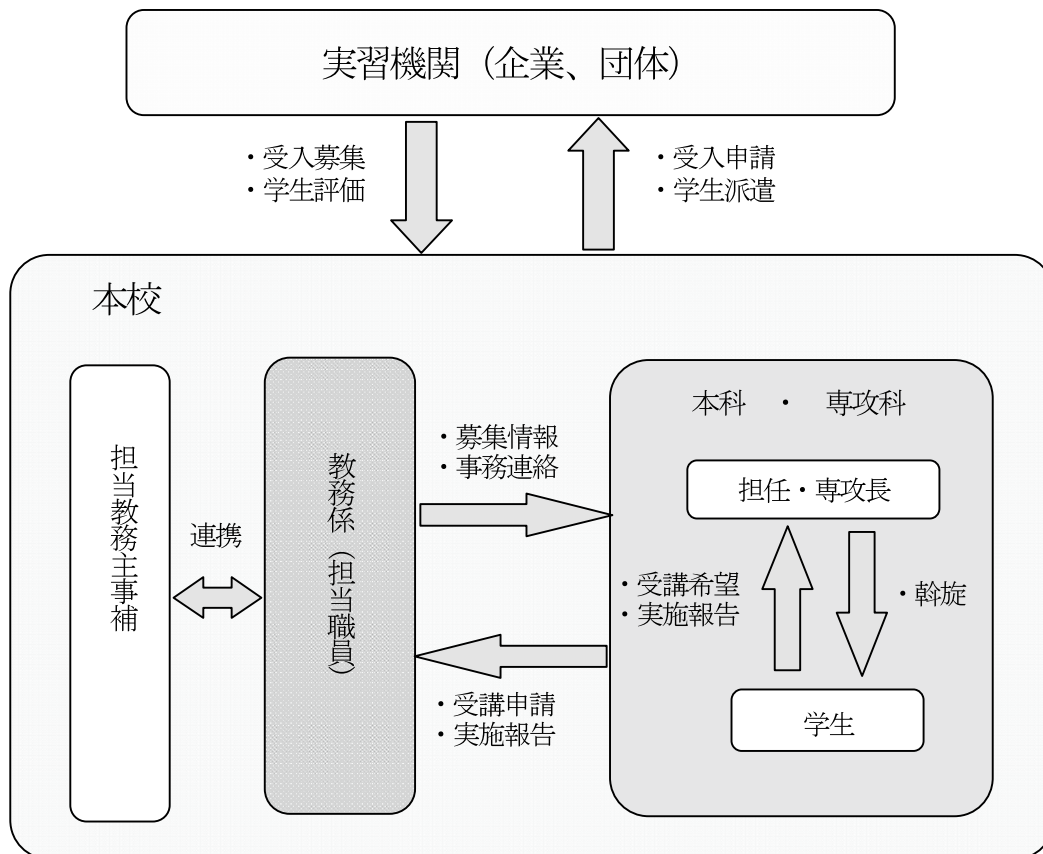
高専は言うまでもなく中学校からの卒業生が入学しますが、入学時点では恐らく就職や進学などに対してははっきりした目標を持っている学生は多くないように思います。そのため学校として進路指導を低学年から行う

必要があり、一昨年度から1年次からのキャリア教育に力を入れて来ました。本校のOBや技術士の方に来てもらって、実社会における実務的な話をして頂き、技術者としての仕事や、どのような分野で活躍しているか体験談を話してもらっていますが、自分の進路について早い段階から意識し考えさせることが、その後の自分の学習に対するモチベーションを高めることに繋がります。

さらに、進路について真剣に検討を始める4年生でインターンシップをカリキュラムに組み込み、昨年度より単位として認めました。残念ながら、本校ではインターンシップに参加する学生数は他高専に比べ低いものがあります。それには、鹿児島県というもの作り企業が他県に比べ少ないといった地域性の問題など色々な原因が考えられますが、これまで本校内部のインターンシップ支援体制も非効率的な部分も多少なりとも有り、昨年度から改善して来しました。

具体的には、教務係にインターンシップ専任の職員1名を配置し、その支援業務は、担任・専攻長・学生へのインターンシップに関する情報提供とインターンシップ先の企業との事務的な連絡、担当教務主事補が行う事前研修の資料準備などにあたってもらっています。支援内容は、下図にも示していますが、以下の通りです。

インターンシップ実施体制図



- 1) インターンシップ関係企業との文書の授受
- 2) インターンシップ関係企業との電話やメールによる連絡調整
- 3) インターンシップ関係企業に関するデータベース構築
 - ・インターンシップ受入れに関する情報を、学生がホームページから閲覧できるよう、インターンシップ情報をデータベースへ入力
- 4) インターンシップ推進のための学内関係者との連絡調整
- 5) その他
 - ・インターンシップの事前研修の資料準備（事前研修は担当教務主事補が行う）、
 - ・インターンシップ事前研修時に行うマナー講習の講師依頼、
 - ・インターンシップ後の参加者の実施状況等のデータ資料作成、

本科におけるインターンシップ参加者の数は一昨年、昨年と増加の傾向にありますが、まだまだ多いとは言えません。インターンシップの支援体制は整いましたが、併せてインターンシップ受入企業の開拓も行なっていく必要があります、地域共同テクノセンターを中心として、専門学科の先生方の努力も必要となります。

冒頭で鹿児島県内にはもの作り企業が多くないと書きましたが、それでも素晴らしい技術を持つ企業がいくつかあります。霧島市内だけを見ても車の車体を設計する企業、精密加工技術を持った企業、或いは住宅やオフィスなどの照明器具を開発する企業等があり、全国的にも高い評価を受けています。これらの地元企業もインターンシップを受け入れています。これらのインターンシップを通して、企業で行なっているもの作り活動を実際に見ることで、技術者としての生き方を学んで欲しいと思います。併せて、地元に残り鹿児島の産業振興に貢献する学生が増えてくれることを望んでいます。

インターンシップ受入企業について

地域共同テクノセンター長 前野 祐二

地域共同テクノセンターは、インターンシップを推進し、受入企業を増やすために企業訪問や文書での依頼を実施してきた。特に本校の産学官交流組織である「錦江湾テクノパーククラブ（通称KTC）」は積極的にインターンシップを受入れて頂いた。

その結果、以下の表のような受入企業数となった。企業毎に複数の学生が受入可能であり、対象となる4学年の学生を上回る企業となった。これからも、インターンシップの推進を図るため、地域共同テクノセンターは、企業開拓に貢献する予定である。

インターンシップ受入企業数（学科別）

本科	機械工学科	83
	電気電子工学科	83
	電子制御工学科	81
	情報工学科	73
	土木工学科	72
専攻科	機械・電子システム工学専攻	55
	電気情報システム工学専攻	56
	土木工学専攻	49



インターンシップに参加して

機械工学科 4 年 野本 黎

私は今年の夏にインターンシップに参加しました。期間は8月27日から9月6日まででした。参加した理由はもちろん就職活動のためです。参加することによりなにかプラスになることがあればと思い参加しました。

研修先は株式会社花王です。花王といえば洗剤や化粧品、スキンケア用品を製造している一般的にもよく知られている大きい会社です。だれしもが一度は花王の製品を手にしたことがあるのではないのでしょうか。私が所属したのは、愛知県の豊橋市にある花王の豊橋工場でした。

所属した工場では、普段よく使われる洗剤や化粧品の製造・研究していました。しかし、それは化学系の分野です。機械科の私はユーティリティー部署と呼ばれる部署で研修を行いました。この部署で最も大事なのがユーティリティー設備です。ユーティリティー設備とは工場の基礎となるものです。工場内の電気を供給する設備だったり、製造する際に出てくる排水を処理する設備だったり、加熱殺菌などに用いられる蒸気を供給する設備だったり全部ひっくるめてユーティリティー設備と言います。これらの設備や工場内の不備を点検、修復するのが主な仕事です。機械科で工場といえばモノづくりをするものだと思っていた私は目から鱗が落ちた気持ちでした。私はこの部署の方とともに工場内の設備を点検したり、排水のきれいさを実験したりしました。

今回の研修によって、就職ということにあまり現実味をおびていなかったのですが、実際に仕事をしてみて就職についてははっきりとしたイメージをつかむことができました。もうすぐ私たちは就職活動に入っていくわけですが、インターンシップに参加しているかいらないかです。すでに差が付いていると思います。工場見学旅行にも行きましたが、やはり実際に仕事を体験するのと見学だけでは全然違います。今回研修に行って本当によかったと思います。もしこれから先インターンシップに行くことを考えている人がいるのなら絶対に行った方がいいです。夏休みを無駄にしたくないという人もいるかもしれませんが、確かに、行ってもいい経験にならなかったという人もいます。しかし、実際に体験すること以上に理解を深められることがあるのでしょうか。私としては、是非とも参加することを勧めます。

最後に、インターンシップを受け入れてくださった株式会社花王の皆様、協力してくださった先生方にこの場を借りてご御礼申し上げます。

インターンシップに参加して

電気電子工学科 4 年 川影 一希

私は、平成24年8月27日から9月7日の期間（10実習日、土日を除く）に、株式会社メタウォーターのインターンシップに参加しました。メタウォーターは、上下水処理や海水の淡水化処理プラント等の製造販売を行っている会社です。私自身、今高専で学んでいる電気電子の知識や技術を、将来は環境分野で活かしていきたいと思っていたので、インターンシップの募集を知った時には迷わず応募しました。運よくインターンシップに受け入れて頂いたので、その内容について簡単に報告します。

初日（8/27）は、午前中にオリエンテーションと事業所内の見学があり、職場での仕事風景を間近に見学できて良かったです。午後からは安全教育がありました。現場では甘い考えを持たないこと、ヒヤリハットの状況になった場合は二度と同じことを繰り返さないようにすることなど、日常生活でも役立つことが多かったです。

2日目（8/28）は、まず自己紹介がありました。他の実習生も高専生であることを知り、この実習期間中にぜひ交流したいと思いました。その後、講義や問題を解いたりして、上下水処理プラントの仕組みを学びました。

3日目から4日目（8/29～8/30）は、浄水システムの制御技術についての講義、試験場見学、設計体験でした。講義は専門的な内容で難しかったのですが、その後の見学で装置を見て納得できたので良かったです。設計体験でもわからないことだらけでしたが、先輩の指導で少しずつ理解でき、完成させることができました。また、先輩から聞くいろいろな話は、非常に参考になりました。

5日目（8/31）は、配電盤試験を題材にした社内試験業務を体験しました。この業務はグループでの作業で、メンバーと連携しながら回路を組み立てて試験をするものでした。チームワークの大切さとチームの中で果たす自分の役割や責任の重大さを改めて感じました。

6日目（9/3）は現地試験業務の体験でした。製品を製造して送り出すまで、多くの試験をして品質や信頼性を保っていることがわかりました。また、一部の試験業務を体験させて頂いて、自分の勉強不足を痛感しました。

7日目から8日目（9/4～9/5）は、実際に稼働している上下水プラントの見学とそのサービス業務を体験しました。稼働中のプラントの大きさとそれを24時間体制で管理するサービス業務の内容には、たいへん驚かされました。たまたま停止中の下水処理プラントではその内部に入ることもでき、実際の点検業務に近い状態で装置を見ることができたのは良い経験でした。臭いや暑さなど苛酷な環境の中での作業はたいへんそうでした。

が、その作業によって私たちが日頃何気なく使用している上下水道が維持されていることがわかり、非常にやりがいのある仕事であることを実感しました。

9日目（9/6）は化学系のサービス業務体験で、実習で行った溶液希釈などは初めてで戸惑いましたが、専門外の知識や技術に触れたのは良かったです。また、実際に社会に出てからは、自分の専門分野でない知識や技術を、自分自身で学んでいかなければならないことも良くわかりました。

最終日（9/7）は、グループに分かれて実習内容をまとめてプレゼンテーションをしました。プレゼンテーション自体が初めてで、満足できる内容ではありませんでした。人に伝えることの難しさを痛感し、自分に足りないものをまた1つ見つけることができました。

以上のように、2週間（実質10日間）という短い期間でしたが、企業の業務内容を幅広く体験でき、また足りないものを改めて認識できたインターンシップは、私にとってたいへん有意義でした。この経験を、今後の勉強や進路決定に活かしていきたいです。最後に、株式会社メタウォーター様にはたいへんお世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。



写真1 グループでの回路組み立て試験（5日目）



写真2 上下水道施設のサービス業務見学（8日目）

三菱重工長崎造船所における インターンシップ報告

電子制御工学科4年 川添 健徒

今年の夏、私は三菱重工業株式会社長崎造船所の、8日間のインターンシップに参加しました。参加した理由は、将来就職するにあたって、企業の活動を実際に体験できる事は貴重な機会であり、私のスキルアップに繋がると思ったからです。

インターンシップ初日はオリエンテーションを行い、安全教育を受けて作業現場での危険について学びました。その後、各部署への引渡しをしました。2日目から、現場での作業が始まりました。まず、客船客室のMOCK UP工事という作業を行いました。客室の工作検討を行うために事前に製作することをMOCK UPといい、施工方法や不具合について実際に工事をしてみて検討する重要な工事です。

3～7日目は船の甲板、内部での作業となりました。船の甲板に引いてある電線回路を日光にさらされて劣化しないようにするため、また外部からの損傷を防ぐため、安全面・品質面・性能面を良くするためにカバーを取り付ける作業、船員が実際に居住する部屋に、卓上スタンド・電話を設置する作業、機関区内にある蛍光灯を施工中の汚れや破損から保護するためのビニールカバーを剥がす作業と、品質や性能を良くするための作業が心掛けられていました。そして、完成度upパトロールという、海上試運転を控えた船の仕上がり具合、不具合的改善すべき点を確認する作業に同行しました。この点検を受けて合格した船は試運転が始まり、不具合を改善していき、完成に近づきます。

どの業務においても、ご指導頂いた企業の方々が丁寧に教えてくださり、実習期間中に問題なく業務を行うことができました。また、授業で習ったことが役に立った場面、逆に初めて知るとような現場の知識があり、新鮮な体験となりました。今回のインターンシップを通して、私は様々なこと、知識を学ぶことができました。作業の正確さ速さは勿論のこと、現場での作業は安全第一なので、まず安全を考慮した現場作りがされていることが分かりました。そして、周りの作業者との声の掛け合い、作業に集中して取り組む姿勢で災害防止につながっている事、次に品質や性能を良くする作業を心掛けられている事を知りました。与えられた作業をこなすことで仕事に対する充実感を得られ、自分にとってとても良い経験になりました。このインターンシップで学んだことを自分の就職活動や就職した時に活かしていきたいと思いました。

最後にインターンシップを受け入れてくださった三菱重工業の皆様、お忙しい中、貴重な機会を設けて頂き本当にありがとうございました。この場を借りてご礼申し上げます。

インターンシップに参加して

情報工学科 4年 佐藤 彩花

私は今年の夏休みに、鹿児島県工業技術センターのインターンシップに参加しました。鹿児島県工業技術センターとは、県内中小企業などの技術開発・技術力向上を支援する中核的な組織です。私は工業デザインに興味があったので、企画支援部という部署に配属されました。企画支援部では、研究・支援業務の企画・調整、情報提供、産学官連携、および工業デザイン・工業技術に関することが業務として取り組まれていました。

インターンシップ期間は一週間で、プロダクトデザイン、レーザ加工体験、DMの作製（グラフィック業務）を体験しました。シミュレーションソフトを使ったり、レーザ加工機で自分のデザインしたものを木版から切り抜いたり、一眼レフを使って写真を撮り、一から自分でDMを作ったりと、情報工学科ではできないことをたくさん体験でき、非常に楽しかったです。

特に印象に残ったのは地域との関係でした。プロダクトデザインでは大島紬や伝統の柄の利用の可能性を奄美の人と一緒に考え、レーザ加工体験では実際に川辺仏壇を作る方々がレーザ加工機を使いに来てくれるというお話を聞かせていただきました。グラフィック業務の時には、タイミングよく鹿児島で右に出るものはいないと言われる経師さんが来てくださり、たくさんお話をさせていただきました。私を担当してくださったセンターの方とその経師さんが仲が良さそうに会話をしていたのが印象的でした。

インターンシップに参加するまで、鹿児島工業技術センターのことは全く知りませんでしたし、地域との連携や中小企業などの技術開発、技術力向上ってどんなことをしてるんだろう？と知識が皆無でしたが、実際に目を見ると地域と密着していて、鹿児島県の伝統工芸品や鹿児島県ならではの製品、原材料を扱う企業にとっては欠かせない施設でした。堅そうな名前からは想像できないほど施設の方々もフレンドリーで、大変楽しいインターンシップでした。

インターンシップはとにかく興味のあるところに行っ

てみるのが大切だと感じました。就職の人はもちろん、進学・まだ決まっていなかった人も将来自分がやりたいことの切っ掛けになったり、その仕事に就くにはどれだけの勉強が必要かなど、自分の進む方向性がはっきりすると思います。

貴重な体験をさせていただいた鹿児島県工業技術センターの方々、本当にありがとうございました。

インターンシップに参加して

土木工学科 4年

岡崎汰師・桑木野玲奈・前原翔太

私たちは、今年の夏季休業中に約2週間のインターンシップに参加しました。実習先は国土交通省鹿児島国道事務所です。各々、調査課、工務課、管理課に配属されました。鹿児島国道事務所では、一般国道3号、10号、58号、220号、225号、226号の6路線（延長289.9km）の改築、維持、修繕、交通安全施設事業、及び道路管理業務を担当しています。

実習期間は2週間と短かったのですが、3人で各課がどのようなことをしているのかそれぞれの情報を共有することができました。

まず調査課では、工事、事業が行われる前の現場の調査、また、事業が行われた際にどのような効果が得られ、どのような影響があり、その事業が本当に必要かどうかの評価、また交通渋滞の原因の調査などを任されています。この課では、渋滞が問題になっている現場に同行し、交通量の測定や信号機の時間が適切であるかなどを検討しました。

次に工務課では、調査課が調査し、実際に事業が行われると決定した際の設計、積算、施工、予算の管理を任されています。ここでは、積算について座学をして頂きました。また、実際に現場に行き、工期に間に合うように施工が進んでいるかなど確認作業や、安全パトロールに同行し、社員の安全が確保されているか、また、設計図通りに配筋が行われているかなどの確認をしました。

最後に管理課（管理二課）では、主に道路の修繕、維持、電線類の地中化に関する事業、及び、建設機械、機械設備、防災対策などに関する管理、業務を担当しています。普段、管理といえば、道路をただ管理しているとイメージしがちですが、橋梁や道路の巡回、防災点検のために遠いところでは、山の奥の現場まで実際に行き、安全が確保されているか確認する姿勢を見て、普段利用

している道路が安全に保たれているのは、このような現場に関わっている方々のおかげなのだと強く思いました。

私たちはこの2週間で、座学だけではなく実際の現場に行くことでしか分からないことを発見し、確認し、国民の生活がより便利で安全になるために職員の方々は働いていると感じました。この経験を後の就職活動や、学校生活に生かしていきたいと思います。

この場をお借りして今回インターンシップを受け入れて下さった国土交通省鹿児島国道事務所の所長様をはじめ、職員の皆様と実習先の手配等、尽力して下さいました先生、職員の方々に感謝致します。ありがとうございました。



写真1 トンネル施工現場



写真2 国道監視管理システム



写真3 護岸工事施工現場

海外インターンシップに参加して

機械・電子システム工学専攻1年 川田 健司

私は夏季休業を使って、1ヵ月間、タイ・バンコクにある日系の企業で研修をしてきました。初めての海外ということもあり、出発の日まで期待と不安でいっぱいでした。

なぜ海外のインターンシップを選んだかという、日本の経済の悪化中、日本の企業に就職しても不安しか残りません。今や大企業でも一寸先は闇と言えると思います。そこで、学生のうちから海外も視野に入れたいといけなそう、海外インターンシップを選択しました。また、会社の方が、宿泊費と交通費、飲食費など負担してもらえとのことで、渡航費と保険代の約10万円-高専機構からの補助金1万5000円=約8万円でタイに1ヵ月実習できるということも大きかったです。

いざ出発の日を迎えました。タイの他の会社と同じ専攻の2人も参加し、タイまではタイのインターンシップを紹介してくださった西留先生と学生3人で福岡空港を出発しました。タイ・スワンナプーム国際空港に到着後、私の方に数日引率してくださった植村先生と合流し、事務所のある首都バンコクに向かいました。西留先生と残りの2人は事務所のあるチェンマイに向かいました。期待と不安でいっぱいのタイ生活が始まりました。

会社での研修は日本と違って決められた日程はなく、日本人スタッフに付いていき、実際の仕事現場に近い形で研修を行いました。営業面では、お取引様との打ち合わせやお食事会などに同席させていただきました。技術面では実際に図面の手直しをさせていただきました。経理・事務面では売上一覧表や見積もり仕様書を作らせてもらいました。とても実際の現場に近く、また、いろんな会社の人とお話をさせていただき、とてもやりがいがありました。

タイでの1ヵ月間、タイ料理は辛くて大変でしたが、日本食やイタリアンなどの飲食店がバンコクには多くあり不便なく、会話は6割日本語、2割タイ語、2割英語でした。休日は遊びに出かけたり、宮殿などの観光やお土産を買いに行ったりタイを満喫しました。また、出かけている最中に日本人と知り合いになったり、中国人と仲良くなったりいろんな経験ができました。いつかまたタイに行きたいと思います。

日本原子力開発機構の 研修講座に参加して

機械・電子システム工学専攻1年 下野 勇希

私は、夏季休業中のインターンシップ活動の一環として、(独)日本原子力開発機構が開催する原子力研修講座に参加させて頂きました。私がこの研修講座に参加した理由は、現在専攻科で学んでいる内容とは全く異なる分野について触れることで、自分の持つ科学技術に対する視野を広げたいと思ったからです。また、他校の学生との交流を深め、普段と少し異なる環境で生活を行いたいということも目的の一つでした。

研修講座は、茨城県大洗町の大洗研究開発センターで行われました。ここでは材料試験炉といわれる、材料に放射線を照射してその材料の特性の変化を調べるための原子炉や、高温ガス炉、高速増殖炉といった種類の原子炉についての研究が行われており、今回行われた研修は材料試験炉をメインとした内容でした。研修内容は、大きく分けて講義と実習、施設見学の3つでした。原子力について学んだことのない私にとっては、複雑で難しい内容でしたが、非常に新鮮で、意欲的に研修に参加することができました。また、私のような高専の専攻科の学生や本科の学生の方だけでなく、大学・大学院で原子力を専攻している方や原子力関係の会社に勤めている社会人の方も数名参加していました。そのため、講義でわからなかった箇所を高専生同士で共有しあい、原子力に詳しい大学生や社会人の方に質問することで理解を深め合うことができました。

講義では、原子力・放射線とはどういったものなのかということや原子炉の構造など、基礎から丁寧に教えていただくことができ、理解がしやすかったです。実習では、実際に実験が行われている研究所に行き、そこで材料試験片が入ったカプセルの解体や破断試験などの実習を行いました。また、コンピュータを用いて原子炉内部の温度や圧力、中性子等の粒子の動きなどの状態がどのようなになっているかのシミュレーションも行いました。そこでは自分たちでプログラムを作成しなければならず、今まで扱ったことのないプログラム言語だったため苦労しましたが、プログラミングの基礎は高専で学んでいたため理解にあまり時間がかからず、学校で学んだ知識が活かした場面だと思いました。施設見学では、点検により現在停止中の材料試験炉の見学を行いました。冷却水タンクや電源装置、制御盤など、すべての規模の大きさに驚きました。このほかにも、材料試験炉の安全性に関する講義や、汚染現場で用いられる防護服の着用体験などをさせていただき、研修の最終日には参加者全員

で、原子力の未来に関するテーマで総合討論を行いました。私も自分なりに色々考えて発言をしましたが、大学院生や社会人の方々の専門的立場からの発言は非常に参考になり、今後このような問題を考えるうえで大きなヒントになったと思います。また、異なる分野を学んでいる様々な人たちと交流して、意見を述べ合うということは滅多にない機会なので、自分にとって大きな刺激となりました。

はじめに述べたように、私の専攻は原子力とはほとんど関係のない分野ではありましたが、2週間にわたって原子力に関して学び、その知識が少しでも身についたと実感したとき、私の将来の選択肢が少し広まったと思いました。そういった意味でも、今回の研修講座は有意義なものだったと思います。

最後に、研修生として受け入れてくださり、また研修中手厚いサポートをしてくださった日本原子力開発機構大洗研修センターの皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

NSプラント設計（株）における インターンシップ

機械・電子システム工学専攻1年 東 悠樹

1. 実習先

1.1 会社概要

会社名：NSプラント設計株式会社

(10月1日より、日鐵プラント設計株式会社からNSプラント設計株式会社に商号変更)

所在地：福岡県北九州市戸畑区大字中原46番地の59

社員数：390人（平成24年7月1日現在）

事業内容：

- ・製鉄プラント分野
- ・環境プラント分野
- ・エネルギープラント分野
- ・数値解析・シミュレーション分野

1.2 実習配属先

製鉄プラントエンジニアリング部 製鉄プラント第一グループ 原料処理チーム

業務内容：原料処理設備

2. 実習概要

実習先で課題を作成して頂き、その課題を通じて業務の内容を学んだ。以下に課題の項目を示す。

- ・駆動系スケルトン作図
- ・CDQと石炭焚きボイラとのCO₂排出量比較

- ・バケット/トラニオンリングの構造理解、トラニオンリング強度計算モデル作成
- ・台車フレーム強度計算
- ・装入クレーンサイクルタイム検討
- ・流動層式乾燥機熱収支検討

3. 実習内容

実習内容についていくつか簡単に示す。

3.1 実習内容1 (駆動系スケルトン作図)

今回は、DAPSの中の塊成機という設備についてのスケルトンを作図した。スケルトンとは、図面から必要な要素を抜き出し簡潔に示した図のことである。これを作成することで、図面ではすぐに把握することができない設備の構成や、仕組み等を簡単に理解できるようにする。

3.2 実習内容2 (CDQと石炭焼きボイラとのCO₂排出量比較)

この項目では、排熱回収を行い、発電を行うCDQ (Coke Dry Quenching) と、それと同等な熱量を発生させる石炭焼きボイラとで発電させた場合のCO₂の排出量を比較した。

CDQとは、コークス炉から出てきた約1000℃のコークスを200℃以下まで冷却するための設備である。さらに、冷却する過程で排熱を回収している。回収された熱エネルギーは蒸気として発電に利用され、現在では、製鉄所で使用される電気エネルギーの約40%を供給している。

4. 感想

私が、インターンシップを通じて実感したことは、学校で学んだことの重要性である。実習で行った課題の大部分は、今まで習ったことを活用することができた。しかし、授業とは異なり自分で問題点や条件を考え、物性値や状態などを調べなければならない。さらに、求めた結果だけではなく、そこからどのように評価するのか、ということの重要性を教えていただき、とても勉強になった。また、インターンシップでは、製鉄プラントエンジニアリング部の原料処理チームで実習を行うことができた。今までコークスを作る過程についてあまり学ぶことがなかったので、今回その過程について様々なことを学ぶことができた。特に、コークスを作る過程で出てくる排熱を有効活用しているということがわかり、貴重な体験ができた。

私は、今回のインターンシップを通じて様々なことを学び、経験することができた。今後は、これらのことを生かして「何事に対しても、どのような目的で行うのか」や「結果に対してどのように評価するか」、「検討の際には、どこを見直せばより良くなるか」等様々なことを意識していき、今後の学業や就職活動に役立てていきたい。

(株) セイコーエプソンにおける インターンシップ

機械・電子システム工学専攻1年 吉岡 慧太

実施場所：株式会社セイコーエプソン 広岡事業所
プリンター企画設計部
メカ設計グループ (制御設計)

実習期間：平成24年8月20日～平成24年9月14日

1. 実習先

1.1 会社概要

会社名：株式会社セイコーエプソン

社員数：77,936名

1.2 配属先

プリンター企画設計部 メカ設計グループ

業務内容：

- ・BIJプリンターのメカ設計
- ・BIJプリンターの制御設計

2. 実習概要

プリンターのメカ設計における制御設計について実習を行った。インターンシップ前半は、主にプリンターの機能や性能評価方法についての学習を行い、後半では実際に新製品の性能評価の補助を行った。

3. 実習内容

3.1 スループット測定の体験

ストップウォッチやオシロスコープを用いて、スループット速度を測定した。スループット速度とは、時間あたりの印刷枚数のことで、プリンターの印刷速度を表す指標となる。

3.2 CRモーターのトルク定数測定

トルク定数と逆起電圧定数が等しくなることを利用して、簡単な装置でCRモーターのトルク定数を測定した。CRとは、キャレッジの略称で、キャレッジとは印字ヘッドとインクカートリッジが搭載されたモーターの動力によって左右に動く部分のことである。

3.3 CR/PFモーターの動負荷測定

先の実習で測定したCRモーターのトルク定数を用いて、印刷の際にCR及びPFモーターに加わる負荷を算出した。

3.4 SC/ADFの性能試験

スキャナーとADFの機能において、ジャギーや測定長さ精度、再起動ズレ等の各性能が許容値内に収まっているか確認した。ADFとはAuto Document Feedの略で自動給紙機構の名称である。

4. 感想

今回のインターンシップでは、主に制御設計に関する業務を体験することができた。私は機械工学を専攻して

いたので、初めのうちは制御設計に関する業務体験を満足に行えるか不安を感じていたが、基礎から丁寧に教えて頂いたので、特に問題を起こすこともなくインターンシップを終えることができた。

また、業務内容に慣れてきた後半では、実際の試験モデルの測定試験にも参加させて頂き、とても充実した就業体験を行うことができた。



写真 1 広岡事業所

富士通株式会社 インターンシップを終えて

電気情報システム工学専攻 1 年 伴 裕輝

私は平成24年9月10日から9月28日の3週間（実働日数14日間）、富士通株式会社のインターンシップに参加させていただきました。今回は研究内容とは関係のない分野ですが、通信工学の講義を受講して興味を持ったので、テーマ「無線通信基地局装置の実装設計」を選択し、携帯電話の基地局を開発している部署に行きました。実際の職場で働くことによって、通信に関する様々な知識を学び、社会人として必要な能力を見極めることができました。ここからは、自分に不足している社会人として必要な能力に焦点を当てて話をしていきたいと思っています。

富士通のような大企業では、一つの製品にいくつもの部署が関わっています。電話会議で進捗状況などの確認を行うため、お客様と接する機会が少ない開発職においてもコミュニケーション能力を必要とします。今回、実際の電話会議に参加させていただく機会があり、意思疎通がうまくいかない場面がありました。この経験から、相手の伝えたいことを理解できる“傾聴力”と自分の考

えを相手に分かりやすく伝える“発信力”が重要であることを学びました。自分は学校の授業などでプレゼンテーションをする機会がありますが、自分の考えをうまく伝えることに苦手意識があるので、残りの学生生活で意識して改善していきたいと思います。

そして、開発行程の一連の流れを通して富士通の「ものづくり」に触れた事から、開発の仕事には、自分から知識や経験を常に追い求める“主体性”と、品質・コスト・納期を厳守するといった“計画力”、“実行力”が必要不可欠であることも学ぶことができました。

また、仕事をしていく中で痛感したことは仕事を一人でやり遂げることはできないということです。一人の力では不可能なことで協力することによってそれを実現することができる“組織力”が大切であることを肌で感じることができました。

これから、就職活動を経て企業に入り働くことになりますが、自分が会社に入って何がしたいのかという明確なビジョンを持ち、それに向かって努力していくことが大切であると感じました。そのためにも残りの学生生活で、社会人として自分に不足している能力を伸ばしつつ、様々なことにチャレンジし吸収することで、更に自身の幅を広げていきたいと思っています。

最後に、ご多忙の中実習を受け入れてくださった富士通株式会社の皆様、ならびにインターンシップに参加するきっかけを作ってくくださった専攻科の先生方に深く感謝いたします。

株式会社A・R・Pの インターンシップについて

電気情報システム工学専攻 1 年 増山 翔

私は平成24年8月27日から9月7日までの2週間、株式会社A・R・P鹿児島事業所のインターンシップに参加しました。参加者は私を含めて2名でした。株式会社A・R・Pの事業内容はメカトロニクス及びエレクトロニクス製品の設計や開発サービス事業、専門技術者の派遣事業です。勤務形態は8時30分から17時30分で、休憩が1時間ありました。

今回のインターンシップは現在、特別研究で「固体高分子形燃料電池発電システムの動作特性に関する研究」をテーマとしていることから、燃料電池を最大電力で動作するように制御するMPPT（Maximum Power Point Tracking）制御の確立を実習目標としました。イン

ターンシップは、仕様決定、設計・製作、プログラムの作成、動作確認・実験、成果発表という流れで行われました。仕様決定では、会社の技術者の方に自分が実現したいと考えていることを説明しました。このとき注意しなければいけないことは、相手が制御の専門家ではありませんが、燃料電池の専門ではないということです。そこで相手に分かりやすく説明するために、専門用語を別の言葉に置き換えたり、図を使って説明する必要がありました。この作業をおろそかにすると、後の作業に影響が出て最悪の場合、完成したものが仕様を満たさないことも起こり得ます。

次に、仕様を実現するための回路を設計・製作しました。部品のデータシートに記載されている特性から、適切な部品を選定しました。授業で学習した知識が部品の選定に役立ちました。ある動作をさせる場合、複数の基本回路から最も適した制御回路を設計することが重要ということを学びました。

プログラムの作成では、H8マイコンで制御を行うため、C言語でプログラミングをしました。H8は小型ながら様々な機能を持っているため、応用しだいで何でもできると感じました。4年の創造実習でH8を使った実習がありましたが、これは大切だと思います。

動作確認と実験では、電気電子工学実験で測定器やオシロスコープの使い方を習得していたため、測定および評価をすることができました。

A・R・Pの社内での成果発表会ではインターンシップで達成できたことやできなかったこと、問題を解決した方法をまとめ、プレゼンテーションを行いました。

インターンシップ先で準備できない機器を模擬的に製作することや、手持ちの部品で問題の解決を図ること、計画通りに進まない場合は作業の順番を入れ替え作業が止まらないようにすることなど、高専では経験できないことをこのインターンシップで体験することができました。

最後に、インターンシップにおけるプログラム作成、実験、回路製作を遂行するにあたり、株式会社A・R・Pの皆様の御指導や協力を頂きありがとうございました。今後はこの体験を生かし、さらに特別研究に励みたいと考えています。

インターンシップを経験して

土木工学専攻1年 杉元 良成

私は夏季休暇期間中、鹿児島県鹿児島市鴨池に在る株式会社三純建設にて、合計20日間のインターンシップに

参加しました。

三純建設は、総合建設・一般貨物自動車運送・リサイクル・廃棄物収集運搬処分の事業に従事する企業です。私はその中のリサイクル事業部で経験をさせて頂きました。リサイクル事業部では、建築汚泥の処理および再生利用を主として取り扱っています。特に、再生処理システムは三純建設独自のシステムで、無機性の汚泥を再利用できる状態にする素晴らしいシステムでした。インターンシップの当初はそれらを見学し、システムの特徴を学び、大変貴重な経験をする事が出来ました。

その後のインターンシップは三純建設との共同研究でした。私が所属する研究室には多くの種類の実験装置があるため、セメントや灰等の物理的特性や化学的特性を詳細に調べることが出来ます。共同研究の内容はそれらの装置を使い、三純建設で使用している汚泥の特性、その他試料についての特性を明らかにするというものでした。

これまでも本科5年次での卒業研究、3・4年次での実習・実験を経て、様々なことを学んできましたが、今回の共同研究ではその時には得られなかった経験をする事が出来ました。また、自分の実験・研究したデータと考察が企業や社会の役に立つということは、大変名誉なことであります。さらに、それと同時に一つ一つの研究に大きな責任を伴います。これらは、決して普通の学校生活では得られない経験ではないのでしょうか？

最初インターンシップの話聞いた時は、自由な時間が潰れることもあり前向きな気持ちとして捉えることは出来ませんでした。しかし、今ではインターンシップを経験して良かったと心から思います。まだ経験していない学生には是非経験して貰いたいです。

最後に、今回インターンシップを受け入れて下さった株式会社三純建設様、貴社のご協力により無事インターンシップを終えることが出来ました。また、指導教員の前野先生には、お忙しい中で指導・助言を頂き、充実した実習を行うことが出来ました。関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。本当にありがとうございました。



写真 三純建設の再生利用システム



創立50周年を迎えて

教務主事 植村眞一郎

鹿児島高専は、東京オリンピックが開催される前の年の昭和38年に「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする」学校として創立されました。そして、創立から数えて平成25年4月20日に50周年を迎えることとなりますが、その創立50周年を記念し記念式典および祝賀会を平成25年11月1日に開催する運びになっています。鹿児島高専のほか創立50周年を迎える高専は、八戸・宮城・鶴岡・長野・岐阜・豊田・津山・阿南・高知、そして九州では有明・大分の各高専が同じ年に産声をあげています。



高専制度は、戦後の教育改革によって生まれたいわゆる6・3・3・4制の単線型に対し、その後の我が国の科学技術の進歩と産業経済の高度成長に対処する質的に優れた多数の技術者育成の強い要望に応じて、中学校卒業を入学資格とする修業年限5年の新しい高等教育機関として発足することになった、と10年史に記されています。さらに、鹿児島県と当時の隼人町の誠意ある支援もあって、仮校舎は隼人工業高校内に木造2階建てを新築し、仮寄宿舎は旧隼人町日当山支所の建物を改修ならびに増築しています。また、とても興味深いものとして、当時の学生達は日当山温泉に入浴税3円だけで入浴できたそうで、このあたりの様子は、本校の1期生として難関を突破して機械工学科および電気工学科に入学された河野良弘教授や加治屋徹実教授が折りに触れてよく話してくださったもので、今とは全く異なる当時の学生の気骨あふれる学生生活の様子がまぶたに浮かぶようでした。そして、昭和38年4月20日隼人工業高校の講堂で入学式を行ったときは、機械工学科2学級定員80名、電気工学科定員40名で、教官8名、事務職員11名、学生実数124名であった、と綴られています。

その後、昭和42年度に土木工学科1学級定員40名、昭和61年度に情報工学科1学級定員40名、平成3年に機械工学科2学級の内1学級を改組して電子制御工学科1学級定員40名とし、以来現在の5学科体制になっています。また、平成22年年度に土木工学科から都市環境デザイン工学科へ名称変更しました。学生総数も平成24年4月時点で1,041名、内女子学生は102名となっています。同じく教職員はというと教員78名、事務職員29名、技

術職員15名の合計で122名のものが学生の教育研究に携わっており、設立当時と比べると半世紀を経て大きく発展してきていることがわかります。

一方で、この半世紀の間に社会の様々な形態、構造も大きく変化して来ています。例えば、社会インフラの代表である長距離高速交通移動手段の一つである新幹線は、本校創立の翌年昭和39年（1964年）に東京新大阪間で営業運転を始め夢の超特急ともてはやされましたが、半世紀足らずの平成23年（2011年）には紆余曲折を経て鹿児島から青森まで新幹線が繋がりました。また、特に大きな変化と思われる航空機利用も、半世紀前に比べると信じられない程に今では普通に誰でも飛行機を使って移動する時代になっています。これら以外にもコンピュータの進化やインターネットの普及など社会基盤の大きな変化は枚挙にいとまがありません。その多くは工業技術における発展・進歩によるものですが、このことにおいてはこれまでの多くの高専卒業生も直接に関わり、経済・文化の成長や発展の一翼を担っていることは間違いありません。この50年の間、国公立の高専は実践的・創造的技術者の育成を目指した特色ある教育を展開し、30万人を超える卒業生を輩出してきました。高専機構の「国立高専の整備について」（平成18年9月）によれば、平成17年春の工学系新規採用技術者約7万名に占める高専出身者の割合は約12%と推計されているように、技術者の一割は高専の卒業生です。さらに平成20年の中央教育審議会の「高等専門学校教育の充実について」の答申では「卒業生の高い就職率・求人倍率に見られるように、社会から高く評価」されていると記されています。企業からの評価は非常に高いことは周知のことですが、これも卒業生の様々な貢献によるものと思います。

鹿児島高専も平成24年3月には、1期生から数えて6,960人の卒業生を送り出し、国内、国外を問わず様々なところで活躍しています。高専創立の黎明期の卒業生は、社会における認知度が低いこともあって大分苦労されたと思いますが、持ち前の気骨あふれる精神力で開拓されてきたことに心から敬意を表するものです。25年前にロボコンが始まり、これを通して高専が一気に知られるにつれ注目を浴びるようになったことは、卒業生にとって喜ばしいことであり感慨無量のことと思います。もう定年を迎えて第2の人生を送られている卒業生も少なくないですが、本校卒業生の今後益々のご活躍を祈念致すとともに、鹿児島高専の発展のために今後ともご助言、ご支援をお願いするものです。どうぞよろしくお願い致します。

平成24年度一日体験入学

教務主事補 山田 真義

今年度の一日体験入学も、昨年度と同様前学期末試験後の8月12日（日）に開催されました。お盆休み直前の日曜日開催であったため、参加人数が前年度と比較し、激減してしまうのではないかと不安もありましたが、中学校訪問などによる一日体験入学の案内等の効果もあり、475名の中学生が一日体験入学に参加しました。各学科別の参加人数は、機械工学科98（7）名、電気電子工学科79（13）名、電子制御工学科123（7）名、情報工学科87（22）名、都市環境デザイン工学科88（30）名でした（括弧内は女子の人数）。一日体験入学に参加した合計475名の生徒の内女子生徒が79名と昨年度より約20%増加し、女子の参加人数割合は、参加生徒の約17%でした。電子制御工学科、情報工学科、都市環境デザイン工学科は例年通りの女子生徒の参加人数でしたが、今年度は、機械工学科、電気電子工学科の女子生徒の参加人数が増加しました。

毎年、本科の5年生が体験実習の準備から実施、展示テーマの準備・後片付けと一生懸命がんばってくれています。テーマによっては専攻科生や低学年の学生なども積極的に一日体験入学の手伝いをしていていました。内容としては、体験実習の他に、学校説明会、学科説明会、展示テーマの見学、学寮での昼食、進学相談、奨学金・授業料免除相談、保護者・引率者のための学校説明会などがありました。体験実習では、高専での授業内容や実験・実習を元に作られているので、参加した中学生は高専でどのようなことを学んで行くのかを肌で感じることができたと思います。アンケートの満足度は95%を越えており、体験実習は参加した中学生に大変好評で

す。一部を紹介すると、「今日の体験入学で高専の難しさ、高度な学習内容、そして楽しさがわかりました。来てみて良かったです。ありがとうございました。」や、「校舎がとてもきれいで、学生の方々も気さくな方ばかりだったので、とても気持ちよく体験させていただきました。」「校内がすごくきれいにされていて、説明も分かり易かった。」「高専に入学したいと思った。」など、たくさんあります。技術を学ぶことができるからという観点だけではなく、きれいな学校という観点からも中学生が高専に憧れているということが分かります。今、学校がきれいに保たれているのは、各学生というより、陰で支えてくれる方々がいるからだと思います。そのことに気づき、学外者がいつ来ても憧れる高専にするために、各学生、教職員1人1人が校内、教室をきれいに保つよう努力する必要があると思います。

寮食堂での昼食についても好評が得られています。今年度も、既に閉寮しておりましたが、寮長を筆頭に寮学生会学生有志が食事指導をしてくれたおかげで約500名の中学生や保護者がスムーズに食事することができたと思



写真2 体験実習の様子2



写真1 体験実習の様子



写真3 学科展示の様子

います。

最後に、一日体験入学の手伝いをしてくれた学生に感謝しております。また、後援会にも大変お世話になり、感謝しております。

在校生や保護者の皆様方からも近所の中学生や保護者の方へ一日体験入学のこと、鹿児島高専のことをお伝え頂ければと思います。

平成24年度1年生集団研修報告

教務主事補 田中 智樹

平成24年度の1年生集団研修は4月10日（火）、11日（水）の1泊2日で実施されました。5日に入学式・入寮式が行われたばかりで、まだ授業も始まっていない中、

「鹿児島高専の学生としての自覚を持つ」

「学友との友情を育もう」

という2つの目標を掲げて本研修は実施されました。例年通り、国立大隅青少年自然の家にて行われ、1年生208名、学生会役員20名、教職員10名が参加しました。

研修の内容は、校長、教務主事、学生主事による講話をはじめ、学生会を主体とするレクリエーション、また担任との交流会や環境問題についての講義、何でも相談室からのガイダンスなど多くの先生方にご協力いただきました。また学生会役員は食事の際の1年生の誘導、研修所所員との打ち合わせなど、研修会を進める上での細々した裏方の仕事に奔走しながら、司会進行も行うなど事前準備から運営まで精力的に働いてくれました。その結果大きな事故もなく、楽しく有意義な研修を行うことができました。以下に研修の概要を報告いたします。

(1) 4月10日（火）

第1日目、8:35からショートホームルームを行い、その後学科ごとにバスに乗り、鹿児島高専を出発。この車中から学生会役員が中心となり、自己紹介やオリエンテーションが行われ、集団研修に臨む雰囲気作りが行われました。国立大隅青少年自然の家に到着後、入所式を行い、【研修1】として、赤坂校長、植村教務主事、精松学生主事の講話が行われました。鹿児島高専の学生とは、授業は、日々の生活は、などといった基本的な生活について語られました。昼食をはさみ、【研修2】野外活動1としてスコアオリエンテーションが行われました。天候にも恵まれ、野外での活動を終えた後、夕べの

集い、夕食、入浴の時間が取られました。また学習室では高専祭のDVDが放映され、入浴時間を待つ学生たちに公開されました。20:00～20:30にはクラス担任との交流会が行われ、その後【研修3】として20:30から学生会によるQ&Aが実施されました。1年生の質問に先輩である学生会役員が答えていくという企画で、学生会役員も相当の準備をしてこの企画に望んでおり、学生同士のより濃密なコミュニケーションが図られたことと思います。

(2) 4月11日（水）

第2日目、起床後、館内清掃を行い、朝の集いが行われ、その後朝食、そして【研修4】として本校都市環境デザイン工学科西留清教授によって『地球環境問題』と題しご講演いただきました。続いて【研修5】本校一般教育科松田信彦教授による『何でも相談室ガイダンス』が行われました。

【研修6】では大隅青少年自然の家の施設を利用し野外活動で汗を流しました。昼食後、最後の研修として【研修7】学生会長の総括、そして教務主事からの講評をいただき、研修の全日程を終了しました。

まだ慣れぬ担任や級友たちとの交流だけでなく、学生会の先輩たちとの交流は入学したての新入生たちには大きな刺激になったと思います。当日は他校の新入生も研修を行っていましたが、教職員が指導しているその姿とは対照的に、同じ学生が約200人の新入生を先導している鹿児島高専の姿に驚きと誇りを感じてくれたものと思います。学生会役員を中心とした節度ある行動は1年生たちに「鹿児島高専の学生としての自覚」を持つきっかけとなったはずです。本研修をきっかけとして1年生がこの良き伝統を受け継ぎ、次の1年生に伝えてほしいと思います。

最後に実施にあたり事前の計画、準備、当日の運営と奔走してくれた学生会に感謝し、またご支援、ご協力をいただいた教職員の皆様、大隅青少年自然の家のスタッフの方々に御礼を申し上げます。



研修日程表

4月10日（火）		4月11日（水）	
8:35～8:40	SHR	6:00～6:50	起床洗面 シーツ等の返却 清掃
9:00	バス乗車	7:00～7:30	朝のつどい
9:10	鹿児島高専出発	7:30～8:00	朝食
10:40	大隅青少年自然の家到着	8:30～9:20	【研修4】講演1 題目「地球環境問題」 講師 都市環境デザイン工学科教授 西留 清 先生
10:50～11:10	入所式 (1) 団長挨拶 (2) オリエンテーション	9:20～9:40	【研修5】講演2 講師 一般教育科教授 松田 信彦 先生
11:20～11:40	【研修1】講話 校長講話	9:50～11:40	【研修6】屋内活動 学生会主催企画
11:40～12:00	教務主事講話	11:50～12:30	昼食
12:00～12:20	学生主事講話	12:40～13:00	【研修7】講評など (1) 学生会長の話 (2) 教務主事講評
12:30～13:00	昼食	13:00～13:10	退所式 (1) 団長挨拶 (2) 自然の家挨拶
13:20～16:30	【研修2】野外活動1 スコアオリエンテーリング		
17:00～17:30	夕べのつどい	13:10	バス乗車 大隅青少年自然の家出発
17:30～18:00	シーツ等の受け取り	14:40	鹿児島高専到着
18:00～19:00	夕食		
18:30～19:45	入浴 体育祭 DVD 放映		
20:00～20:30	クラス担任との交流会		
20:30～21:30	【研修3】学生会による Q&A		
22:00	就寝		

平成24年度きりしま チャレンジャー実施報告

教務主事補 田中 智樹

平成24年12月15日（土）、霧島市教育委員会との連携事業「きりしまチャレンジャー」が「工業技術体験in鹿児島高専」と題し実施されました。鹿児島高専の実験施設を開放し、霧島市の小中学生79名が訪れ、用意された6つのコースから一つを選択して実験に臨みました。

小中学生を対象とした体験学習を通じての市教委との連携はH20年度から始まり、今年度で5回目となります。この活動の最大の特徴は小中学生を鹿児島高専に招待し、高専生が日頃利用している教室や実験室で実施するという点でしょう。また本校学生が参加者の指導に当たる点も特徴です。お兄さんお姉さんに教えられて、一生懸命実習にむかっている参加者の姿が印象的でした。

また保護者の方も多くお見えになり、子供たちの実習風景を見学していました。傍らで見守っていたり、一緒に実習に参加したり、必死な姿を写真に収めたりと保護者の皆様にも楽しんでもらえたのではないかと思います。保護者の方々の実験施設への入室及び見学は一昨年まではありませんでしたが、実習担当の先生方のご配慮により教室内に席を設けていただくなどご対応いただきました。お陰をもちまして保護者の方々も大変満足された様子でした。

今年度は募集定員80名のところ130名程の応募がありました。鹿児島高専に対する関心の高さを感じさせる数字ですが、これも実習担当の先生方や職員、学生の皆様のご協力の賜物と感謝しております。そして計画から募集選考、当日の運営など多くの人員を割きご協力いただいた霧島市教育委員会の皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

以下、今年度実施テーマと概要です。

テーマ①：ピンポン玉ロボットで遊ぼう

ロボットを組み立て、ピンポン球の玉入れゲームを行います。

テーマ②：電子ゴマをつくろう

回る際の遠心力をスイッチに利用して、LEDの点灯やICで音楽が流れる電子ゴマを作ります。

テーマ ③：作って体験エレクトロニクス

タッチセンサーからLED点滅機までいろんな機能の電子回路を作ります。

テーマ④：ホバークラフトを作ろう

空気の力（モーターの力）で浮き上がり、スイスイ走る

車を作ります。

テーマ⑤：ペットボトルロケットを作ってみよう

ペットボトルを加工して、水ロケットとして打ち上げよう。

テーマ⑥：立体工作で楽しめMATH

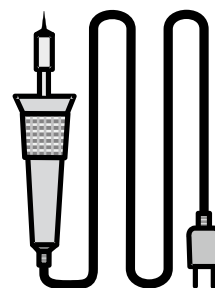
正20面体、サッカーボールといった正多面体や準正多面体を作ります。



写真1 ペットボトルロケットを作ってみよう



写真2 作って体験エレクトロニクス



開校記念講演感想文

都市環境デザイン工学科 1 年 揚野 崇

今回の講演を聴いて、「夢のチカラ」について深く考えさせられました。まず、継続するための方法です。トライアスロンというとても辛いスポーツを、何十年も続けていらっしやると聞いたときは驚きました。そして、その後どうやってやる気を保っているのか、気になりました。そして、夢を持つことが大切、夢は叶えるもの、と知ったときは鳥肌が立ちました。飽き性気味だった自分の過去を振り返ってみると、確かに目標を持ってやってはいなかったです。この言葉は、これから何かをするときに思い出したいと思いました。

また、「ヤツ」も考えさせられました。なぜ、「ヤツ」なんだろうと考えて、僕は「元気な人」という答えを出しました。この答えが正解かわからないけれど、何となく合っていると思います。僕も「ヤツ」になりたいと思いました。

そして、一番心に残ったものは、一歩踏み出すことが大事と言うことです。少しでもやってみたいことがあったら、一歩踏み出してチャレンジすることを学びました。僕は、今までやりたいことがあっても、「めんどくさい」「どうせできない」と諦めていました。この言葉を聞いて、僕はテニス部に入ることに決めました。休みがほとんどない部活なので、たるんでいる自分にとってはちょうど良いです。そして全国優勝というとても大きな目標を立てました。夢は叶えるものという言葉に胸に、頑張るつもりです。また、テニスというスポーツを、夢を持ってやることによって「ヤツ」になれると信じています。

「夢のチカラ」は夢を持つてみないと分かりません。ぜひ、他の人も夢や目標を持って「夢のチカラ」を得てほしいです。そして、夢や目標を何歳になっても、また途中で叶えてしまっても、新しい夢を大小関係なく持ち続けて、充実した生涯を送りたいと思いました。今回の講演はとても勉強になるものでした。



開校記念講演感想文

機械工学科 3 年 外園 直樹

僕はもの作りが好きだ。自分でおもしろいものを考えて形にしていくということが、楽しくて仕方がない。

「アナログ人間になれ。」という言葉は今回、一番心に響いた気がする。どんなに高性能なコンピュータも、0と1の計算しか出来ない。それに比べて、ヒトの脳は答えのないものを創造することが出来る、と言う説明に感動した。また、僕はサーボモータなどで電氣的に制御するよりも、リンク機構などで機械的に動かしたいとの思いが強いため、さらにこの言葉に惹かれた。

僕は負けず嫌いだ。他人より劣りたくないし、劣っていると思われるのが腹が立つ。「怒りをバネに生きる意味を問いつける危ないやつになれ」は、トヨタ車体の社長さんも相当負けず嫌いな性格だなと感じた。しかし、負けず嫌いだからこそ、社長まで登りつめられたのだろう。だから僕も、今まで以上に食欲に勝ちを掴みにいきたいと思う。

今回の講話で技術者として大切なことや、生きていく上で大切なことなどをいろいろ教えて戴いた。夢は信じ続ければ必ず叶うという言葉信じて、少しの悔いもない人生を送りたい。

1時間程の講話だったが、とても有意義な話を聴けて良かった。折角の貴重な体験の話なのに、寝てたりしゃべったりしているのはもったいないなと感じた。

「夢のちから」

電気電子工学科 4 年 川野 聖

「夢を持つのです。夢は叶えるものです。これが夢のちからです。」今回の講演を聴いて僕の心に一番残った言葉です。

今回の講演の講師の方は、株式会社トヨタ車体の代表取締役社長宮村憲一さんでした。トヨタ車体は、レクサスやヴォクシーの車体設計などを行っているそうです。宮村さん自身もランドクルーザーの設計に携わったそうです。このことを聞いて、僕は非常に驚きました。僕の父と兄は自動車整備士です。二人ともトヨタ系列のディーラーに勤めているので、仕事の話を開いたりするとランドクルーザーのことも聞きます。その車を設計し

たなんてすごいなと思いました。更に、自分たちと同じ鹿児島高専から社長になった人がいることにも驚きました。そんな大先輩の話は、とても印象に残りました。

宮村さんのおっしゃった言葉でもう一つ心に残ったものがあります。

「今の人生をもう一度そっくりそのまま繰り返しても構わないという生き方をしてみろ！」

この言葉を聞いたとき僕は自分に問いかけてみました。果たして僕は悔いの残らない人生を送れているのか？何事にも全力で取り組んでいるのか？そう問いかけたとき、僕は恥ずかしくなりました。ただ毎日を何の目標もなくただただ過ごしていることに気づいたからです。なので僕はこう考えました。今すぐに、将来何の仕事に就くか決めることは難しいので、今は精一杯勉強に取り組み、一年後就活の時に、自信を持って試験に臨めるようにしたいと思いました。まずは日々の予習、復習、毎日の授業をしっかりと受けたいと思います。そして、社長にはなれないかもしれないけど、自分の仕事に誇りを持てるような技術者になりたいです。

心家であると思います。人の上に立つ人間は、ただ長年働いてきた実績がある、と言うだけではないのだと感じます。会社で一番上の職に就いたことに満足せず、さらなる向上心を持って仕事をする、そういう人間になれるよう頑張りたいと思いました。

宮村先生の講演の中で、「百年カレンダー」という言葉がありました。それで、自分の百年カレンダーも、もう五分の一を過ぎていることを再確認しました。今までの自分は、学生として“それなり”の生活を送ってきました。しかし、それ以上でもそれ以下でもありません。何か大きな物事を達成するには、人一倍努力が必要だと思います。自分の百年カレンダーが充実したものになるよう努めていきたいです。

自分の夢、自信を持って語ることでできる夢、それを考え直す良い機会になりました。今回のお話を、自分のこれからの人生に活かしていけるようにしたいと思います。

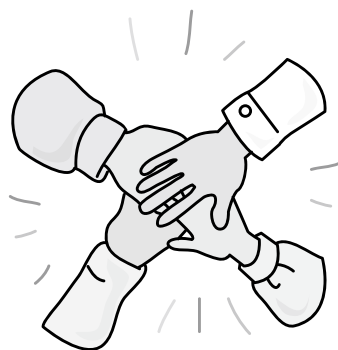
「夢のちから」を聴いて

電気情報システム工学専攻1年 津曲 亮介

夢を持つこと、改めてそのことについて考えると、自分の夢はこれですと、自信を持って答えられる様なものがないことに気づかされました。「夢は何か」と聞かれたときに答えるのはテンプレートのようなものばかりだと思います。しかし、宮村先生はトヨタ車体に入社したときから、どのようなものを作り、自分が将来どこまで登りつめるかという目標を持っていたとおっしゃいました。しかもそれを実現しています。また、今でもトライアスロンの代表になりたいなど、新たな夢があるといえます。私もこんな風に、人に自分の夢を語れる人間になりたいと思いました。

私自身、いつかこんなことをしてみたいとか、こんな仕事してみたいと、色々と思うことはあります。しかし、どうせなれるはずがないとか、他人に話すのは恥ずかしいとか、すぐに諦めの考えになっていたように思います。しかし、夢は実現するもの、挑戦する前からそんなことばかり考えず、まず挑戦する姿勢が大事だということを感じました。

宮村先生をはじめ、テレビなどで見る多くの社長は、普通の人とは違い、いつでも大きな野望や未来を語る野



シンガポールにおける 工場見学旅行報告

電子制御工学科 吉満 真一

電子制御工学科の工場見学旅行は、4泊5日の行程でシンガポールを訪問した。昨今の日本企業の海外への進出状況を踏まえると、本校を卒業した学生が就職後に海外へ赴任する可能性は極めて高く、現に多くの卒業生が長期や短期での海外勤務を経験している。わずかな期間ではあるが、住み慣れた日本を離れ異文化に触れることは、卒業を次年度に控えた学生諸君にとって貴重な体験である。旅行計画にあたり、海外で働く日本人エンジニアの姿を見てもらうため、日系企業の現地法人を主な見学先として検討を進めたが、最終的に日系企業2社、現地企業1社を訪問することとなった。

シンガポール入国後、企業見学は2日目より実施した。午前中に訪れたのはヤマザキマザックシンガポールである。ヤマザキマザックは小型から大型のNC工作機械をはじめ、5軸のマシニングセンタなどを手掛ける大手の工作機械メーカーである。シンガポール工場では主に、中小型機の生産を行っているが、日本人スタッフは設計技術者やマネージメント部署に数名とわずかで、生産業務は現地スタッフが行っている。営業部の高城様と技術部の池田様より、詳細な説明を受けた後、生産設備を勉強させていただいた。学生は学校の授業で工作機械を使っていることもあり、関心を持って生産過程を見学している様子であった。その後、午後よりシンガポールの水処理施設であるマリナバレッジを見学した。シンガポールでは水の確保は大変重要な課題ということで、最新かつ大規模な設備を見学し、普段我々が何気なく使っている水資源の重要性について、改めて考える機会となった。



写真1 ヤマザキマザックシンガポールにて



写真2 水処理施設であるマリナバレッジにて

3日目は醤油で有名なキッコーマンのシンガポール工場を訪れた。現地法人の社長である野木様に、会社の東南アジア地域での業務について熱心に説明していただいた後、技術部の林様の説明で生産設備の見学を行った。ほとんどの学生が醤油の醸造工程を見るのは初めてということもあり、興味深く見入っていた。見学後の質問時間では、活発な質疑応答が行われ、学生の海外勤務への興味関心が高いことを伺わせた。



写真3 キッコーマンにて

日系両社での共通した話題として、現地スタッフとのコミュニケーションが挙げられた。言葉や文化の異なる相手に、意図することを正確に伝えることの難しさや、その反面得られる喜びや仕事のやり甲斐について話され、言語力に加えて異文化理解の重要性を感じた。

旅行期間は企業見学以外にも、マールイオン公園やマウントフェーバーなどシンガポールならではの観光地も訪れた。また自由行動の時間では、各自訪れた場所で、英語を使ったコミュニケーションにも挑戦していたようで、ホテルに帰ってきたある学生が「もっと上手に英語

を使えたら、もっと楽しめたと思いました」と心からそう感じた様子であった。

今回の工場見学旅行で、ほとんどの学生が海外を初めて経験し、さらに日本人エンジニアが海外でどのような仕事をしているのか、また、現地でどのような経験をしたのかを直接聞く機会を得た。参加学生それぞれが、この滞在期間で多くのことを感じ学んだと思うが、その思いを忘れることなく胸に刻み、今後の生活や学習の原動力にして欲しいと願っている。

最後に今回の旅行に際し、ご理解とご支援をいただきました保護者の皆様、旅行計画から現地でのサポートに粉骨砕身していただいた旅行代理店様および現地エージェントの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

工場見学旅行の感想

機械工学科 4年 江口 匠

私は、この工場見学旅行において、一つの目的がありました。それは、就活の際の企業選択の参考にすることです。夏季休暇にインターンシップに参加したことで、仕事に対しての価値観、意欲などが変わり、とても良い体験ができました。しかし、それと同時に他の企業はどのような仕事をしているのか、どのような違いがあるのか知りたいと思うようになりました。そこで今回の工場見学旅行では、様々な企業を見学して、インターンシップに参加した企業との違いを比べ、仕事内容にどのような違いがあるのかを考え、企業選択の参考にしたいと考えました。

工場見学を行い、私が最も驚いたことは生産体制の違いです。私は、日本での人件費が高いことに加え、インターンシップに参加した企業がそうであった様に、日本での製品の生産工程は、機械による生産がほとんどだと考えていました。しかし、ヤマハの船外機工場や三井ハイテック、工場の大きな三菱重工でも手作業工程が多く存在したのです。これらは、生産台数が少ない、生産する機種がすぐ変わるので機械化を行うと効率が悪い、機械では作業することができないなどの理由で手作業での生産を行っていました。このような工場では、人が作業することを考えて作業環境の改善をするなどの工夫があり、生産体系による工夫の違いを感じました。

全ての企業で共通していると感じたものは、就職した

際の仕事です。本科で卒業した場合、どの企業でも現場とデスクワークを行き来するような仕事をするのだろうかという印象を受けました。このことから、ほとんどの企業で仕事内容の違いはあれど、インターンシップで感じた「仕事」と同じなのだろうと思いました。

最後に、今回の工場見学では積極的に行動することができたと思っています。また、様々な企業を巡ることで様々な仕事を目の当たりにすることができ、大変勉強になりました。今回の工場見学、インターンシップでの経験を就職活動に生かせるようにしたいです。



工場見学旅行

電気電子工学科4年 杉藺光太郎

4年電気電子工学科の工場見学旅行は、11/5（月）～11/9（金）までの4泊5日で実施された。日程は、初日11/5：鹿児島→名古屋（1社見学）→浜松1泊、2日目11/6：浜松（1社見学）→愛知（1社見学）→名古屋1泊、3日目11/7：愛知（2社見学）→名古屋1泊、4日目11/8：名古屋→彦根（1社見学）→大阪1泊、最終日11/9：大阪で解散というハードなものだった。

1日目（11/5）午後は、三菱重工株式会社名古屋航空宇宙システム製作所を訪問した。宇宙航空システムと聞いていたので、宇宙開発（ロケット本体、人工衛星など）の現場を見せて頂けると期待していたが、セキュリティの関係で立入が制限されてしまった分、少し残念な内容であった。今回見学させて頂いた所は、航空開発（主に戦闘機）部門のための資料室であった。主に展示されていたのは、MV-300ビジネス機である。手が届くほど近い距離で見ることが出来、設計段階の資料も展示し

てあったので、貴重な体験だった。昔からの技術が今もなお活かされていることを感じる事ができた。

2日目(11/6)午前は、浜松ホトニクス株式会社豊岡製作所を訪問した。今、世間で話題となっている「ヒッグス粒子」の発見に貢献した企業であり、「カミオカンデ」のセンサーも作った企業である。普通の企業と違い「研究開発」の企業なので、主に大学院卒業の方々が多く就職しており、進学希望者には興味深い企業である。医療分野にも力を入れており、最新のがん発見装置「PET」の開発にも関わっている。20-30年後にはがんはほとんどなくなるであろうとのことだった。製品を作るための製造装置自体もホトニクス製であり、熟練の技術も必要なので、他の企業には絶対に真似出来ない技術でもある。大学に進学し、将来研究開発の仕事がしたい人にとっては、最高の企業だと自分は感じた。

11/6午後は、日本車輛製造株式会社豊川製作所を訪ねた。自分がよく利用する「鉄道車両」や、さまざまな現場で使われる大型機械、プラント、コンテナ、大型車両の部品、橋の部品も製造している企業である。今回の企業見学では、実際に新幹線や電車の組み立て作業の現場を見せて頂いた。中の溶接、配線、塗装等は、すべて職人の方々による手作業で行われており、何人もの人々がチェックを繰り返して完璧な車両が完成する。N700系新幹線は、日本車輛以外にも川崎重工や日立製作所等の企業でも製作しているが、製造方法は各社で違うことを知って驚いた。新幹線1編成あたりの配線の総延長が40kmにも及ぶことを聞き、車両製作は非常にたいへんな仕事なのだと実感することができた。

3日目(11/7)午前は、JFEスチール株式会社知多製造所を見学した。名前はテレビ等で聞いたことがあったが、詳しいことは全く知らなかった。もとは川崎グループの企業(川崎製鉄)だったが、後に分離独立し、NKK(日本鋼管)と合併したとのことだった。自分たちが見学した知多製造所の主力製品は、石油や天然ガスの開発等で使われるエネルギー産業用鋼管である。鉄鋼事業の分野では、生産体制、開発力、コスト競争において、世界最高レベルの力を持つ企業であり、そのために電気電子の知識が必要とされていることを知った。また、自家発電設備、エネルギー設備を持っているので、震災や計画停電等の影響を受けなかったことに驚いた。このことから分るように、かなり安定した企業、力のある企業であることを知った。

11/7の午後からは、中部電力株式会社知多発電所及び知多電力館を見学した。中部電力は、多くの先輩方が就職している企業であり、これまで以上に身近に感じ

た。自分たちが見学させて頂いたのは、火力発電所の中でも全国有数の大きさを誇る知多発電所である。主としてLNG(液化天然ガス)を燃料としている発電所で、他の燃料と比較しても最も環境に優しい燃料であるとのことだった。原子力発電が停止されたこともあり、環境への影響には細心の注意を払っていることが感じ取れる内容の話が多かった。毎日行われている点検作業等は、中部電力職員だけでなく、三菱重工などのメーカーの方々も関わっており、発電所は多くの人々の努力によって守られているのだと感じた。

4日目(11/8)は、午前中名古屋から彦根(滋賀県)へ移動し、午後から大日本スクリーン製造株式会社彦根地区事業所を見学した。大日本スクリーンの名前を聞いて、「スクリーン」を製作している会社だと思い込んでいたが、実際は半導体やディスプレイの「製造装置」を作るB to Bメーカーであることを知った。海外のサムスンやインテルなどにも装置を納品しており、世界シェアはNo. 1の企業である。会社内にコンビニや大きな食堂、テニスコート、駅があり、社員同士の中も良いという話だった。実際に、会社の雰囲気がとても良く、働きやすそうな会社だと感じた。装置開発メーカーなので、やはり大学院まで進学した人が多く就職している企業で、自分にとってやりがいのある仕事をするためには、進学は必須であることを感じた。

今回の見学旅行では、それまでよく知らない企業が多かったが、どの企業も技術力や経営基盤がしっかりしていること知り驚いた。進学希望の自分にとっては、進学する意義を見い出せた良い機会でもあった。

工場見学旅行 in シンガポール

電子制御工学科4年 米盛 将矢

11月4日12:30。僕達電子制御工学科4年の学生一同は、工場見学旅行先であるシンガポールへと向かうべく鹿児島空港に集合しました。出国手続きなどを済ませ、約6時間のフライトを経てシンガポールへ到着しました。シンガポールと日本には約1時間の時差があり、到着したのは現地時間21時でした。

シンガポールへ到着してまず初めに感じたことは何より暑さでした。赤道直下の常夏の国ですので、多少覚悟はしていましたが、想像以上の暑さと湿度でした。バス

に乗り込み、宿泊先であるエリザベスホテルへ。窓から初めて見るシンガポールの夜景に車内は盛り上がりました。世界一の観覧車シンガポールフライヤー、最高級総合リゾート・マリーナベイサンズに植物園、オーチャードロード……。鹿児島で育った僕達には、目を見張るような建造物などばかりで、バスの中は歓声がやむことはありませんでした。

翌日、日系企業のヤマザキマザックを訪問しました。ヤマザキマザックは、工作機械の製造を行っている世界大手のメーカーです。見学では、日本人社員の方から会社概要を教えていただいた後、実際に工場を見学させていただきました。工場内では現地スタッフがほとんどで、普段学校の実習工場で見かける、NC旋盤やマシニングセンタ、レーザ加工機など色々な工作機械が製造、テストされている様子を見ることができました。海外において日本人エンジニアがリーダーとして現地の方々とうまく連携して働く姿を見て、憧れを抱きました。

その後、マリーナバレッジへと向かいました。マリーナバレッジは市内から5分ほどのマリーナ湾の河口に建設された最新式のダムです。海水をダムでせきとめ淡水化し、飲料水として供給できるようにすることが目的で、現在半分以上をマレーシアからの輸入に頼っている水資源を契約切れの2061年までに自国でまかなえるようにするそうです。とても大規模な施設で、様々な技術的工夫を見ることができ、良い勉強になりました。

3日目はキッコーマンシンガポール工場を見学しました。醤油の生産工程を見ることは初めてのことで大変興味深いものがありました。日本にしかない調味料だと思っていた醤油の世界シェアを知り、驚くとともに日本の醤油が世界に通用するということを、誇らしく思いました。

企業見学は以上の3社でしたが、今回の工場見学旅行では他にもたくさんの貴重な体験ができました。自由時間には、島1つが丸々テーマパークとなっているセントーサ島や、インド街、リバーボートでのナイトクルージングなど、日本ではできない体験をいくつもすることができました。また滞在中、苦労したのはやはり英語でした。中学から約6年間英語を学習してきましたが、今まで習った表現をうまく発揮できませんでしたので、次回は語学力を充分に身に付け、また訪れたいと思います。

この貴重な体験の為に、奔走してくださった吉満先生、上沖先生、名鉄観光さん、現地エージェントのMr. David、そして旅費を捻出してくれた両親に感謝し、今後の就職活動や社会活動に役立てたいと思います。

工場見学旅行について

情報工学科4年 小林 一徹

高専生活で最も大きな行事である高専祭も終わり、一週間近くにも及ぶ工場見学旅行が行われました。私たちの工場見学旅行先は主に関西方面で『GSユアサ社』、『原子力開発機構関西科学研究所』、『オムロンコミュニケーションプラザ』、『島津製作所創業記念資料館』、『NTT西日本』、『理化学研究所計算科学研究機構』、『産業技術総合研究所関西センター』を訪れました。そこでどの見学先においても技術者の「ものづくり」への確固たる信念が伝わってきたのを今でも覚えています。私の今回の工場見学で印象に残った見学先について述べたいと思います。

まずは2日目に見学させてもらった島津製作所創業記念資料館です。創業135年という長い歴史もあり、まさにこれまでの日本の工業技術を支えた一因でもある会社で計測機器や医用機器、小中学校の理科で用いられる機器（科学館にあるようなおもしろ実験機器）をガラスケース越しに見学しました。自分も現にそのような実験機器のおかげで科学に興味を持ち始めることができ、おかげで今に至ってもものづくりの勉強をしています。先人たちの築きあげてきた技術が今の私のものづくりに対する価値観に少なからず影響を与えたことに間違いありません。

次に3日目に訪れたNTT西日本での見学です。NTT西日本の見学と同じタイミングに通信工学を並行して学んでいたのも、通信については少ばかり知識を持ちあわせていました。がしかし、あくまでも教科書を参考に勉強しているのであって、実際に現場で「通信」という規模の大きさを知るのは初めてでした。地下にある、とう道と呼ばれる通信ケーブルの専用管路トンネルにも入ることができ、西日本だけでもとう道の総距離が何百kmもあると聞いて驚きました。今や、気兼ねなく使用しているインターネットや電話等の情報ネットワーク時代においてかせない存在となった通信を実際に目で見て、触れ、そして体験することができて大変良かったです。

次に同じく3日目に訪れた理化学研究所計算科学研究機構の見学です。理化学研究所では次世代スーパーコンピュータの「京」を見させてもらいました。残念ながら今現在では計算速度世界ランキング（TOP500）では3位となりましたが、過去に2回も連続で1位を獲っている日本の誇りです。（半年に1回ランキング更新）「京」は一つの企業が製作するのではなく、各部品ごとに分か

れて様々な企業が担当し、結集させて作り出されました。いわば日本の技術力が十分に世界に通用することを証明してくれたということです。いまからの日本をどう変えていくのか、どう発展させていくのかは私たちに懸っているといっても過言ではありません。それにまた、スパコンのランキングこそがその国の技術力に反映されると私は考えているので、間接的に自国のスパコンに携われるような技術者になるためにも更に多様な知識を深めていきたいです。

他の工場においてもその工場にしかできない分野、特異な分野と様々あり、大変有意義なものとなりました。改めて、「ものづくりとは何か?」「この学校にきた意味」その根底を見つけることができ、また自分の将来を見据えた工場見学旅行となりました。

これもひとえに日頃よりの先生方、後援会、両親のご支援によるものと心より感謝しています。ありがとうございました。

工場見学旅行を終えて

土木工学科 4年 増元あずみ

2012年。東京は土木・建築に関しての話題がほくほくの年でした。2月、東京ゲートブリッジ開通。5月、東京スカイツリー開業。10月、東京駅丸の内駅舎の復原工事完成。土木工学科の工場見学先は、例年関西が恒例でしたが、このような理由から、11月5日、私たちは東京へと飛び立ちました。

1日目、東京ガス(株)扇島工場にて、工場見学は幕を開けました。原料とするLNGガス(液化天然ガス)は、マレーシアやインドネシアから船で運ばれてきます。このガスを貯蔵する地下タンクの建設現場を見学しました。直径72m、深さ50mという巨大なタンクです。タンク上部は土で覆われ緑地化されており、産業構造物と自然との調和が図られていました。タンクの屋根の作り方はとてもユニークでした。なんと、タンク内で屋根を作りあげ、空気圧で上まで持ち上げるのです。非常に興味深い施工法でした。

2日目、東京行きの機窓から見る事ができた東京湾アクアラインへと向かいました。東京湾を海底トンネルと橋梁で横断する道路です。海ほたるから海底トンネルの避難用通路を歩き、事故が起きた際の救命の工夫がしっかりなされていることを確認しました。軟らかい地

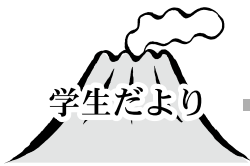
盤中にトンネルを掘るという多くの困難を乗り越えたことを知りました。

千葉の君津では、新日鐵住金(株)君津製鉄所を訪れました。製鉄過程を見学しておもしろかったのはもちろんですが、工場内のインフラ設備についての驚きのほうが大きかったです。東京ドーム約220個分の広大な敷地には、線路が敷かれ貨物列車が走ります。発電所もあります。工場外にはダムまであります。まるで、自給自足をする1つの町のような様子でした。さらに、環境にも優しい配慮がなされています。水においていえば、鉄を冷やす際に用いる約340万m³/日の水は、ほぼ100%が再利用水です。製鉄過程で生じる副産物や副生ガスは無駄なく有効に活用され、効率の良さに感動しました。

3日目、首都圏外郭放水路では、地下に隠された壮大な空間に足を踏み入れました。大雨が降った際、雨水を地下へと流し、調圧水槽を経て、ポンプでくみ上げ、江戸川に流す施設です。調圧水槽には巨大な柱が何本も立っており、天井は高く、地下神殿と称される理由に納得しました。立坑内では、メンテナンス用の通路を1周しました。落ちたら70mまっさかさまという、スリル満点の見学でした。

4日目、工場のほかに、観光スポットにも多く足を運びました。楽しみにしていたゲートブリッジを訪れたときは、ちょうど夕暮れ時で、夕焼けに照らされたトラス構造が輝いていました。実物を見て、本当におもしろい形をしているな、と感じました。夜の東京駅はあたたかなライトアップが印象的でした。トレードマークのドームと赤レンガがお洒落な雰囲気醸し出していました。スカイツリーは、展望デッキまでのエレベーターに施された装飾が魅力的でした。日本の伝統的な手法でありながら、デザインはお茶目なところもあり、350mの上下移動を楽しめました。すみだ水族館や、浅草からの水上バスなど、東京の魅力盛りだくさんの日々でした。

あっという間に、1週間の工場見学旅行は終わりました。ひたすら高専祭に全力を注ぎ、進路のことを後回しにしていた出発前。工場ではOBの方々の話を聴いたり、作業工程を見学したりしているうちに、進路のことが、現実味を帯びてきました。この1週間で学んだことを生かして就職活動に励みたいと思います。また、この旅行は何より、楽しかったです。素晴らしい思い出です。この機会を与えてくださった先生方、保護者、その他すべての方々に感謝しています。ありがとうございました。



この2年を振り返って

学生主事 精松 伸二

学生主事としての2年間の任期も残り少なくなりました。この間、多様な問題に直面し、学生委員会を中心にその対策・解決に取り組んできましたが、まだ多くの未解決問題があり、学生主事として力量不足であったと痛感しております。平成23年4月、学生主事に就いたばかりの頃、3月11日に起こった東日本大震災の復興を願って新旧の学生会役員や学生の有志たちが募金活動を行い、その義援金を関係機関に送りました。彼らのボランティア精神には大変感激しました。体育系や文化系のクラブが参加する九州沖縄地区高専大会、そして西日本地区高専大会での活躍、更には全国高専大会に駒を進めたクラブの活躍ぶりにも感動しました。学生が中心となって取り組む高専祭は、皆の力と夢が結集された最高の舞台です。また、学生会による朝の挨拶運動、交通指導、花壇の水やりや塵拾いなどの美化運動への取組みは有意義であり、大変素晴らしいものです。学生皆の前向きな姿勢・熱意は学校全体の原動力になると言っても過言ではありません。

しかしながら、それとは裏腹に「学生心得」から逸脱した違反行為、具体的には万引・窃盗、地域住民の方々への迷惑行為、交通違反・事故などが多発しました。このような難局を打開しようと、平成24年7月に学年毎の集会を開催し、「学生心得」を遵守すると共に「懲戒等に関する規則」を再認識するようにと強調しました。前年度に比べ、平成24年度では、違反行為や被害報告はかなり減少してきましたが、皆無ではありません。更なる指導強化が必要かもしれませんが、むしろ学生諸君が高専生としての自覚を強く持ち、社会のために貢献できるエンジニアを目指すべく邁進することが大事です。

特記すべきこととして、まず、平成23年度に学寮での合宿のあり方が再検討され、従来の「申し合わせ」に替わるものとして「要項」が作成されて、手続き、監督指導、安全管理等の面においてより円滑で充実したものになったこと、次に、平成24年度には、駐輪場が改修され、自転車の配置がクラス毎に区分されたことで指導・把握し易くなったこと、そして平日の登下校時、隼人駅と本校間においてバス運行が開始され、学校としても安全対策の観点から推進することになったことがあげられます。

来年度は創立50周年を迎えます。本校が益々発展していくことを念じております。

終わりに、側面から私を援助してくださった主事補の

篠原先生、新田先生、武田先生、池田（正）先生、引地先生（前年度）、委員の先生方、学生係の方々、そしてご協力くださった後援会、教職員の方々に深く感謝申し上げます。

学生会長をして

電気電子工学科4年 中村 勇峰

鹿児島高専に入学して初めての大きな行事は、入学後すぐにある1年生研修でした。まだクラス全員の顔と名前も一致せず、右も左もわからない状態での集団宿泊研修は不安の方が大きかったです。そんな僕たちに対して、優しく面白く接し、また仕事をテキパキとこなす学生会役員の方々はとても輝いて見えました。自分もこんな風になりたい、と思い1年生のころから学生会役員になり、優しい先輩方の下で充実した活動をすることができました。

今度は自分が学生会をまとめる番だ、と決意を新たに学生会長に立候補してから早一年。最初のころはいつも頭の中には偉大な先輩方や、先代の学生会長の影がありました。行事ごとやその準備など、なにかある度に先輩たちはどうしていただろう、あの人ならこうしていたかな、とその影を追いかけのばかりでした。他の役員はしっかりと自分の仕事をこなし、わからないことがあれば僕に聞いてくれます。しかし僕は会長として頼られる存在でありたい、という思いが強く、わからないことがあっても周りには頼らず自分の学生会での経験だけを頼りにして、周りを見ることができていませんでした。そんなとき1人の学生会役員が声をかけてくれました。

「仕事大変そうだね。手伝えることがあれば言ってね。」このとき、本当に頼るべきなのは先輩の影でも、自分の経験でもなく、学校をよりよくしようと共に頑張っている学生会役員の仲間なんだと気付くことができました。人の真似事や、前回の経験ばかりを当てにしているは新しいものは何も生まれない。自分が自分のことを信じられなければ周りを信じることもできないし周りからも信じてもらえない。そして、仲間と協力して何かをやり遂げることの大切さと喜び。この1年間学生会長をすることでたくさんのことを学ぶことができました。また普通に生活していれば経験できない大変なことや嬉しいことを経験することもできました。楽しいことば

かりではありませんでしたが、鹿児島高専の学生会長をすることができて本当に良かったです。この経験は僕にとって一生の宝物です。そして自分が先輩たちに抱いていた思いを、これからの後輩たちも同じように抱いてくれるような学生会で在り続けてほしいと思います。

最後に、1年間頼りない僕を支えてくれた学生会の皆様、先生方、関係者の方々、本当にありがとうございました。

会計局長として

情報工学科4年 室屋 知佐

学生会会計という大切な役を頂いてから、早いことに、もう3年が経とうとしています。大好きな先輩方に、仲良しな同級生、おもしろい後輩、そして頼りになる先生方、学生課の方と一緒に取り組み、過ごしてきた学生会役員としての学生生活は、本当に充実していて楽しいものでした。

会計は、普段は他の部署のように忙しくありませんが、学生会費の予算配分を決めたり、決算を行ったりと、大事な役割を担っています。曜日交代制で学生会室に通って各部活動の予算管理をしたりもしています。

…と書けば、とてもかっこよく、堅苦しい部署のように聞こえるかもしれませんが、会計のみんなはとても明るく、楽しい人ばかりで、私の大好きなメンバーです。それに、私自身が3年間を通して学んできたこと、感じてきたことも、会計の仕事云々というのとは、少し違ったような気がしています。

もちろん、学生会費の管理をする部署の役員として、自覚を持って仕事に向き合うこと、各部活動会計と連携をとること、など、会計としてやらなければならないこと、守らなければいけないこともたくさんあって、一つ一つを長い時間をかけて学んできたつもりです。そうやって、学生会に携わり、昼休みや放課後を費やしてきました。それでもなお学生会を好きでいられるのは、学生会長や会計メンバーをはじめとする学生会役員のみんながいてくれるからです。学生会を通じて、たくさんの人と逢い、話をして、人と人のつながりの大切さ、あたたかさをとても感じます。小さなことを気にかけてくれる友達や、学生のことを愛してやまない先生と関わる機会も多く、たくさんの影響を受けてきました。本当にあ

りがたいことだと思います。“会計局長”として、特別なことを成し遂げられたわけではありませんが、人とのつながりを大切にできたことを誇りに思います。

さて、これからの学生会はもっとパワーアップし、学校を更に盛り上げてくれることに期待してください。私は、他の4年生役員と一緒に、そのサポートを頑張っていけたらと思います。

最後になりますが、学生会が成り立っているのも、学生の協力があり、先生方や保護者の方の理解があるからです。本当にありがとうございます。これからも、そのことを忘れずに、残された学生会役員としての仕事を、みんなと一緒に全うしていきたいと思います。

文化祭を終えて

文化祭実行委員長 機械工学科4年 澁谷 直樹

「来年は自分の番、これまでのように文化祭を成功させられるのだろうか？」去年の文化祭が終わってから大きな不安の中、新実行委員長として任された文化祭を成功させるために一年間仕事をしてきました。

私は三年生になってから実行委員となりました。これまでのただ楽しんでた文化祭とは違い、運営する立場になると思っていた以上に多くの仕事があり、このような行事をするのはとても大変なことだと感じました。ステージ上の催し物も細かくスケジュールが組まれており、一つひとつが多くの人に楽しんでもらえるように工夫されていました。他にも露店、展示など多くのものがあり、自分はこれらを一つにまとめることができるのかと心配になることがありました。ですが、仕事をしていく中で前年度の実行委員長である五反田さんの的確なアドバイス、各部署の長をはじめとする実行委員のみんなの協力、新田先生、あべ松先生をはじめとする先生方のサポートのおかげで少しずつ形となっていました。また1人でも多くの方に文化祭に来てもらうためにポスター、パンフレットを作成し、近隣の企業様に協力をお願いして広告を行うなどの活動も行いました。

文化祭当日は天気の心配もありましたがみんなの日頃の行いが報われて雨が降ることもなく、大きな問題もなく、多くの人が楽しそうにしていたので第50回にふさわしいみんなの思い出に残る文化祭になったのではないかと思います。

先に書いた通り、文化祭が成功したのは多くの先生方、快く TENT を貸してくださった隼人中学校様、近隣の企業の方々、住民の方々の深いご理解とご協力のおかげです。そして何より学生一人ひとりの盛り上がりのおかげです。心から感謝しています。

今回は文化祭実行委員長としていままでにはなかった責任の重さ、人と仕事をするの大変さと、物事を一つにまとめることの難しさをとて感じました。それと同時に協力してくれる人がいることのありがたさを一番に感じました。もちろん文化祭が成功したときの感動は忘れることのできないものとなりました。実行委員のみんなには迷惑をかけることが多かったですが、みんなにはとても感謝しています。これからますます素晴らしい文化祭がいつまでも続いていくことを願って終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

第50回体育祭を終えて

体育祭実行委員長 土木工学科4年 岡田 尚也

平成24年10月28日（日曜日）、鹿児島工業高等専門学校は体育祭を迎えました。天候はずっと心配されながらも早朝雨が降っただけで、それ以降は高専生の想いが届いたかのような雲ひとつない晴れでした。

今年の体育祭は第50回であることや、学科の名称変更に伴い土木工学科が今回の4年生で最後となり、来年度から都市環境デザイン工学科4年生が中心になるとあって大きな節目でもある体育祭でありました。そんなとても意味のある体育祭の中、自分は体育祭実行委員長をさせていただきました。なので、やはり何とも言えない大きな期待とプレッシャーがありました。

正直最初は、右も左も見えない状態で何から手をつけていいかまったくわかりませんでした。しかし、先輩方からのたくさんの的確なアドバイスなどをいただきながらどうにか事前準備をすすめていくことができました。

そして、夏休みは返上で準備をしていきました。後期に入ると仕事が徐々に増えていき、緊張や不安など様々なプレッシャーからなかなか眠れない夜があったりして、度々体調をくずしたりしました。体育祭が近づくにつれていろいろなトラブルもできました。トラブルが出るたびに自分の甘さや未熟さを感じては、反省するばかりでした。しかし、何度もくじけそうにもなりながらも頑張っ

てみんなからの励ましや、クラス、他学科から応援や支えがあったからだと思います。それと、各先生や学生課の方々からの言葉があったからだとも思います。みなさんありがとうございます。

体育祭当日は無事晴れてくれて、大きなトラブルやアクシデントがなく、競技の際のけが人もなく無事おえることができました。各クラスの応援団長、櫓絵隊長を筆頭に今までの中でも一番のものを作ってくれたと本当に思いました。自分は残念ながら、応援団ができなかったけれど、自分にとってこの高専生活で一番の思い出で、最高の体育祭になったと思います。そして4年生みんなの最高の思い出にもなったと思います。

この体育祭を通じてお世話になった方々に本当に感謝しています。そして、来年、再来年の1年生、2年生、3年生にはもっともっと体育祭を盛り上げていてもらいたいです。

実行委員長は、自分の思っていたものよりとても大変で辛いものでした。しかし、今振り返ればすごく大切な時間だったと、胸を張って言えます。

そして、体育祭実行委員長として培ってきたものをこれからは、就職活動へといかにしていきたいです。



都城・鹿児島高专親善試合結果

鹿児島高专会場

平成24年5月12日(土)

競 技 種 目		試 合 結 果										
サ ッ カ ー	第1試合	合都	城	(	1	—	6)	○	鹿児島			
	第2試合	合都	城	(	0	—	8)	○	鹿児島			
	第3試合	合都	城	(	2	—	3)	○	鹿児島			
	第4試合	合都△	城	(	1	—	1)	△	鹿児島			
ハ ン ド ボ ー ル	第1試合	合都△	城	(	4	—	7)	○	鹿児島			
	第2試合	合都△	城	(	6	—	6)	△	鹿児島			
	第3試合	合都△	城	(	7	—	7)	△	鹿児島			
	第4試合	合都	城	(	21	—	22)	○	鹿児島			
	第5試合	合都	城	(	4	—	5)	○	鹿児島			
	第6試合	合都○	城	(	6	—	4)		鹿児島			
男子バスケットボール	第1試合	合都○	城	(	73	—	81)	○	鹿児島			
	第2試合	合都○	城	(	45	—	27)		鹿児島			
	第3試合	合都○	城	(	70	—	65)		鹿児島			
女子バスケットボール	第1試合	合都○	城	(	68	—	6)		鹿児島			
	第2試合	合都○	城	(	20	—	6)		鹿児島			
バ ド ミ ン ト ン	第1試合	合都	城	(	1	—	2)	○	鹿児島			
	第2試合	合都	城	(	0	—	2)	○	鹿児島			
	第3試合	合都	城	(	1	—	2)	○	鹿児島			
ソフトテニス（男子）	第1試合	合都	城A	(	1	—	2)	○	鹿児島A			
	第2試合	合都	城B	(	0	—	3)	○	鹿児島B			
	第3試合	合都	城C	(	0	—	3)	○	鹿児島C			
	第4試合	合都	城A	(	0	—	3)	○	鹿児島A			
	第4試合	合都	城B	(	0	—	3)	○	鹿児島B			
	◆ 個人戦（男子）											
			1 位		米吉・折田（都城）							
			2 位		米徳・甲斐（鹿児島）							
	ソフトテニス（女子）	第1試合	合都	城	(	0	—	3)	○	鹿児島		
		◆ 個人戦（女子）										
				1 位		西田・國永（鹿児島）						
				2 位		小村・岩崎（鹿児島）						
剣 道	第1試合	合都○	城	(	5	—	1)		鹿児島			
	第2試合	合都○	城	(	1	—	2)	○	鹿児島			
	第3試合	合都○	城	(	3	—	1)		鹿児島			
	第4試合	合都○	城	(	2	—	1)		鹿児島			
	第5試合	合都○	城	(	2	—	1)		鹿児島			
水 泳	競水	の部の点	合都○	城	(	247	—	233)		鹿児島		
	泳球	の部の点	合都○	城	(	0	—	40)	○	鹿児島		
	総合	の部の点	合都○	城	(	247	—	273)	○	鹿児島		

都城・鹿児島高专親善試合結果

都城高专会場

平成24年5月12日（土）

競 技 種 目	試 合 結 果
陸 上 部	総 合 点 ○ 都 城 (178 - 144) 鹿 児 島
硬 式 野 球	第 1 試 合 (4・5 年) 都 城 (5 - 10) ○ 鹿 児 島 第 2 試 合 (低 学 年) 都 城 ○ (6 - 5) 鹿 児 島
男子バレーボール	第 1 試 合 都 城 (19 - 25) ○ 鹿 児 島 第 2 試 合 都 城 (23 - 25) ○ 鹿 児 島
女子バレーボール	第 1 試 合 ○ 都 城 (25 - 7) 鹿 児 島 第 2 試 合 ○ 都 城 (25 - 12) 鹿 児 島
卓 球	◆ 団 体 戦 第 1 試 合 A ○ 都 城 (3 - 1) 鹿 児 島 第 2 試 合 B ○ 都 城 (3 - 1) 鹿 児 島 第 3 試 合 C ○ 都 城 (3 - 1) 鹿 児 島 第 4 試 合 D ○ 都 城 (3 - 2) 鹿 児 島 ◆ 個 人 戦 1 位 木村 匠吾 (都 城) 2 位 池江 優佑 (都 城) 3 位 野邊 走馬 (都 城) 3 位 松元 拓磨 (都 城)
テ ニ ス	◆ 男子団体戦 第 1 試 合 A 都 城 (0 - 3) ○ 鹿 児 島 第 1 試 合 B 都 城 ○ (2 - 1) 鹿 児 島 第 1 試 合 C 都 城 ○ (2 - 1) 鹿 児 島 第 2 試 合 A 都 城 (0 - 3) ○ 鹿 児 島 第 2 試 合 B 都 城 (1 - 2) ○ 鹿 児 島 第 2 試 合 C 都 城 (0 - 3) ○ 鹿 児 島
柔 道	◆ 団 体 戦 第 1 試 合 ○ 都 城 (3 - 1) 鹿 児 島 第 2 試 合 ○ 都 城 (3 - 2) 鹿 児 島

第49回（平成24年度）九州沖縄地区国立高等専門学校体育大会等 結果一覧

成績 種目	団 体 戦			個 人 戦		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
陸上競技	佐世保高専	有明高専	久留米高専	男子三段跳：苅浦谷 周平	男子走高跳：大藺 晃平	男子200m：江口匠 男子4×100mリレー： 中俣・森・江口・徳留
ソフトテニス	北九州高専	有明高専	鹿児島高専			男子やり投：前川 寛斉
バドミントン	有明高専	北九州高専	熊本高専(熊本)			男子：西留・島廻
水泳	熊本高専(八代)	佐世保高専	鹿児島高専	男子200m背泳：西川 央哲	男子100m平泳：草原 大貴	男子800m自由形：西川 央哲
ハンドボール	熊本高専(熊本)	北九州高専	熊本高専(八代)		男子100mハーフライ：萩田 武蔵	
硬式野球	大分高専	佐世保高専	熊本高専(八代)		男子400mリレー： 内山・草原・萩田・小田	
バスケットボール(男子)	北九州高専	久留米高専	沖縄高専			
バスケットボール(女子)	沖縄高専	有明高専	都城高専			
卓球	有明高専	北九州高専	佐世保高専			
剣道	北九州高専	熊本高専(熊本)	熊本高専(八代)			富澤 直季
サッカー	鹿児島高専	大分高専	久留米高専			
柔道	都城高専	熊本高専(熊本)	鹿児島高専			男子90kg以下級： 前田 大翔・市来 彰悟
バレーボール(男子)	佐世保高専	鹿児島高専	有明高専			
バレーボール(女子)	佐世保高専	有明高専	都城高専			
テニス(男子)	佐世保高専	北九州高専	大分高専	男子ダブルス：内門・鮎川	男子シングルス：内門 大地	男子シングルス：鮎川 秀平 男子ダブルス：井之上・奥園
弓道(男子)(西日本地区)	松江高専	熊本高専(八代)	熊本高専(熊本)			
〃(女子)(西日本地区)	鹿児島高専	松江高専	宇部高専		岩井迫蘭	
空手(男子)(西日本地区)	大分高専	熊本高専(熊本)	鹿児島高専	男子個人形：宇崎 滉太	男子個人組手：今村 優希	
				女子個人形：帖佐 そよ香		

※網掛け表示は、全国大会出場者

(敬称略)

◎第47回全国高等専門学校体育大会

(1) ソフトテニス

開催日：平成24年8月18日～19日

会 場：びんご運動公園テニスコート
個人の部（男子）2回戦敗退

(2) サッカー

開催日：平成24年8月25日～28日

会 場：維新百年記念公園 外
結 果：優勝

(3) テニス

開催日：平成24年8月21日～23日

会 場：松江総合運動公園庭球場
結 果：個人戦男子シングルス 初戦敗退
個人戦男子ダブルス 2回戦敗退

(4) 水泳

開催日：平成24年8月26日

会 場：広島ビッグウェーブ

結 果：メドレーリレー400m 8位
(市来、橋本、荻田、小田)

自由形800m 15位 西川

背泳ぎ200m 4位 西川

平泳ぎ100m 7位 草原

バタフライ100m 予選敗退

学校対抗 21位

(5) 陸上

開催日：平成24年8月25日～26日

会 場：コカ・コーラウエストスポーツパーク
布勢総合運動公園陸上競技場

結 果：走高跳 6位

200m 予選敗退

三段跳 17位、19位

やり投げ 20位

(6) バレーボール

開催日：平成24年8月25日～26日

会 場：鹿島総合体育館

結 果：予選敗退

(7) 剣道

開催日：平成24年8月26日

会 場：鳥取県立武道館

結 果：2回戦敗退

◎第34回全国高等専門学校通信弓道大会

開催日：平成24年6月30日

会 場：霧島市隼人弓道場

結 果：女子個人 準優勝 七夕

◎第42回西日本地区高等専門学校弓道大会

開催日：平成24年7月14日～15日

会 場：北九州市立夜宮弓道場

結 果：女子団体 優勝

女子個人 準優勝 岩井迫

◎第18回西日本地区高等専門学校弓道大会

開催日：平成24年7月14日～15日

会 場：熊本高専熊本キャンパス第一体育館

結 果：男子個人形 優勝 宇崎

女子個人形 優勝 帖佐

男子個人組手 準優勝 今村

◎第45回九州沖縄地区国立高等専門学校英語弁論大会

開催日：平成24年8月24日

会 場：鹿児島工業高等専門学校

結 果：暗唱の部 2位 熊野

弁論の部 1位 高見

◎高専ロボコン2012九州沖縄地区大会

開催日：平成24年10月21日

会 場：合志市総合センターヴィーブル

結 果：特別賞（本田技研工業株式会社）

鹿児島高専Bチーム（全国大会出場）



学生表彰者リスト

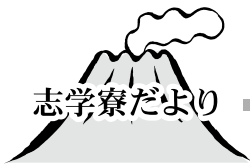
◎文化賞

大会名	学年・氏名	成績
平成23年度土木学会西部支部研究発表会	土木工学専攻2年 ハラグチ ケンイチロウ 原口 健一郎	優秀講演者賞
日本機械学会九州学生会第43回 学生員卒業研究発表講演会	機械・電子システム工学専攻1年 オオツボ ジュンヤ 大坪 純也	優秀講演賞
平成23年度地盤工学会九州支部学生賞	土木工学専攻2年 ナカノ ダイキ 中野 大樹	優良学生賞
第5回国際マイクロメカニズムコンテスト (自慢のマイクロメカニズム部門)	機械工学科5年 ムトウギレイ アリ	技術賞、 アイディア賞
	機械工学科平成23年度卒業生 サメノ ケイ 鮫島 佳	アイディア賞
	機械工学科平成23年度卒業生 サチト メーヌカ	アイディア賞
第45回九州沖縄地区国立高等専門学校 英語弁論大会	都市環境デザイン工学科3年 タカミ セイヤ 高見 誠也	弁論部門優勝
	電子制御工学科1年 クミノ カイ 熊野 凱	暗唱部門2位
第2回科学・技術・教育に関する日本-タイ 国際ワークショップ	機械工学科5年 フクナガ タツヤ 福永 竜也	優秀論文奨励賞
	機械工学科5年 ミヤコ ユウキ 都 勇気	
第10回作文コンクール・読書感想文の部	情報工学科1年 ウチオオクボ ユキ 内大久保 由季	特選
	電子制御工学科1年 ムロヤ サキ 室屋 抄希	入選
	電気電子工学科3年 ハマダ マサヤ 濱田 昌也	入選
	電気電子工学科1年 タテシ アヤ 立石 理	佳作
	電子制御工学科2年 ツボヤマ ユウヤ 坪山 佑哉	佳作
	電気電子工学科2年 カジオ ジュンペイ 梶尾 隼平	特選
第10回作文コンクール・小論文の部	電子制御工学科2年 オオミナ ミズキ 大峯 瑞季	入選
	電子制御工学科1年 セイコ バ ユウ 清木場 悠	佳作
	電気電子工学科3年 マツオ ナオト 松尾 直人	佳作
	都市環境デザイン工学科1年 サトウ さらい 佐藤 さらい	優勝
第15回校内英語暗唱大会	電子制御工学科1年 クミノ カイ 熊野 凱	準優勝
	電気電子工学科1年 タテシ アヤ 立石 理	3位
	電子制御工学科1年 ムロヤ サキ 室屋 抄希	4位
	電子制御工学科1年 フクモト ジュンペイ 福元 俊平	5位

学生表彰者リスト

◎平成24年度 学習到達度試験成績優秀者一覧

	学 科	氏 名		学 科	氏 名
1	機械工学科	仙名 昭夫	9	電気電子工学科	濱田 昌也
2	電気電子工学科	青木 祐也	10	電気電子工学科	前田 大輝
3	電気電子工学科	内門 竜一	11	電子制御工学科	吉永 亮佑
4	電気電子工学科	北山 謙威	12	情報工学科	片平 耕介
5	電気電子工学科	末永 祐磨	13	都市環境デザイン工学科	村上 光樹
6	電気電子工学科	橋口 慧			
7	電気電子工学科	バトジャルガル バヤルジャルガル			
8	電気電子工学科	濱田 拓也			



志学寮での2年間を振り返る

寮務主事 保坂 直之

志学寮を任せられてからほぼ二年が過ぎようとしている。任期を終えるまでまだ数ヶ月を残しているので、やや早い時期ではあるが現時点から振り返る回想の報告として、530余名の寮生と過ごした二年間の概要を記したいと思う。ただし紙幅に限りがあるのですべてをふり返ることはできず、「朝礼」「防災」「7志」の三点に絞り込んだ回想にしたい。

1. 朝礼の習慣

志学寮の寮生は朝、起床してすぐに校庭に集合し、点呼後、ラジオ体操する。だが、意識は半ば目覚めたが身体がまだ眠ったままの寮生が多数校庭に立っているようにも見える。要するに、朝はあまり元気ではない。

着任して最初の課題は、朝のラジオ体操をどう「適正化」するかだった。別の運動などに置き換える選択肢もあっただろうが、寮生会の意見は「ラジオ体操をきちんとするよう働きかける」だった。二年間とも、それなりに元気に体操して一日を始める、という習慣は総じて守られたように思う。勿論、気候のいい春先から真夏の炎天下、体育祭シーズン、冬の寒い薄暗い朝、と時を追うごとに身体の動きの元気が失われていったようには見えなかつた、たとえば小学生が運動会で披露するお手本的なラジオ体操などとは比べるべくもないものではあるが。

朝のラジオ体操を見に行くついでに、体操の後、整列し直させて短い話を聞かせる二年間だった。朝礼は月曜のみ、をそれとなく変更して毎朝短いながらも朝礼のような形をとるようにしたということである。自分が特に話題を多く持っていたから、というわけではない。寮生がまだ寝ぼけている間に、話をともかく私語なく聞かせること、無意識に整列すること、をすり込んでしまったかった、というのが本当の目的である。朝のスタートさえきちんとできていれば一日中うまくいくはずだ、このスタートの仕方をずっと維持できれば必ず学業もうまいくはずだ、という話はよくしたつもりだったが、私としては本心からそう信じている。

後でも述べるが、本校の寮生は毎朝校庭にともかく出る、という日課を無意識に行うため、非常時の避難が大変スムーズにできるのだと思っている。今年の11月に6志の隣家で火災があった時にも、寮生の避難行動は大変スムーズで迅速だった。寮生会も上手に対応しており、緊急事態などは勿論ないにこしたことはないのだが、非

常時の的確さは本校寮生を誇れる点だと思っている。

2. 防災関係

二年前の平成23年4月は震災の直後だった。4月中旬、学寮での一年のスタート後に例年実施している避難訓練をよい機会として、学寮での非常時の安全確保が十分であるかを再検討したことも思い出される。

まず気になったのは第4志学寮3F、西側にある非常用脱出設備だった。第3志学寮が耐震基準を満たさないという理由で取り壊されたために、3志とつながっていた4志の西側は袋小路になり、都市部のペンシルビルなどで使われる非常用昇降機が廊下の窓際に設置されていた。法的にはこれで十分だが、慣れていない寮生がいざという時にこの縄ばしご状の設備を正しく使えるのかどうか不安だったため、これに替えて非常用の梯を新設した。

大きな地震に際しては、居室にいる限りはレイアウトを勝手に変えていない限り、ほぼ安全は確保されるだろうと考えている。家具のレイアウトの変更を認めていないのは理由があるのだと寮生は理解して欲しい。補食室はIH化されているので地震でも火災は発生しない。火を消そうとして負傷するよりも、すぐに廊下に逃げた方が安全である。鹿児島の場合、桜島の活動に伴って強い地震があると予想されるので、火山の活動情報を見て寮生に注意を喚起する準備をしてある。

津波については、大正噴火の時に2メートルの津波が発生したという記録があるため、校庭への避難で大丈夫かと考えたが、本校のグラウンドは海拔5メートル程度と、意外に高い場所にあり、河川からも離れているので、まず校庭、という寮生の行動で問題ないだろうと見ている。勿論、自然災害については慢心せず常に情報を集め、臨機応変の対応をすることは必要である。

3. 寮生会の強化と7志の準備

第7志学寮の新設が正式に決定し、そのための準備に具体的に取り組み始めたのは平成24年の始め頃からだったが、遅かれ早かれ7志ができることは確実だろう、と任期の初めから覚悟を固めていた。100名分の個室のみによる棟ができて寮生の数は600を超える。人の数が増えることは学寮で教育を受けられる学生の数が増すことなのだから喜ばしいが、同時にその割合で病気・事故・非常事態の数が増えることを意味する。

問題の手当にあたる人を増やすことは必須であるため、夜の寮生の面倒を見てくれる舎監役のスタッフの増員を計画中だが、学寮では寮生自身による運営が最も重要である。7志開設後の学寮を今までのように運営

するには指導的な寮生、つまり寮生会役員・班長の数を増やすと同時に、活動を活発にして質も上げなければならない。

任期の二年目である平成24年4月から、一日三回行う点呼のうち、中間点呼と最終点呼の方法を少し手直しして、班長が班員を廊下に出させるやり方に変えている。だが、変更した、というのは正確な言い方ではない。『寮生活案内』には「点呼は廊下に出ての整列点呼」と明記してあるのだから、いつの間にか変ってしまったやり方を元に戻したことなのだと思う。

寮のルールというものは口伝の世界でもある。「自分たちはずっとこうしてきた、だから今まで通りにやるべきだ」という主張が最も説得力を持つ。寮生というものは実は教員よりも保守的なものなのである。そのため、こうした小さな変更も簡単なことではないが、個室の扉が100並ぶ7志での毎日の点呼を考えた場合、班長がドアを開けて班員を探す方法では無理であろう。7志に住む上級生、交流のために外国から来て7志を利用するゲストの学生が増える以上、学寮の運営にも柔軟さやゲストも含めた寮生へのきめ細かい対応が必要になるのだから、少々のルール変更もスムーズにできないようでは7志開設後の運営は行き詰まってしまう。

点呼については当初は前途多難と思われたが、寮生はお互い良く協力しあって、正確で理想的なやり方に一歩だけ近づけたのではないと思う。また、主にクラブ活動に熱心な寮生等の意見を容れて、男子寮の週末の門限・点呼時間を1時間繰り下げる試みを今年の夏から実施している。女子寮の日課時間を変えなかったため、週末の点呼が二度手間になるなど、問題は多々あったが、担当する寮生はよく取り仕切ってくれて順調に運営していると見ている。あと3ヶ月で7志に100名近い寮生が入り、志学寮は未知の領域で試行錯誤をしていくことが始まるわけだが、柔軟で細かい制御をする地ならしはできたのではないかと考えている。

二年間、宿日直者の毎日の報告に目を通していた。530余名の若者が狭い敷地に集まって暮らす場である。様々な問題が次々に報告され、相談を受けるが、日誌を見る限りは「異常なし」「良好」などと記されている日がほとんどであった。それで正しいのである。

いつも心配事に追い立てられていた毎日だったが、要は寮生の数が極めて多いから「常に追い立てられていた」と感じるのであって、若干の大事件はあったものの、「異常なし」の日々が常態として続いているというのが我々の志学寮の現実なのである。人間関係で悩む

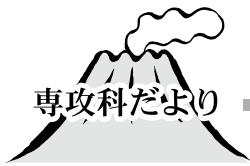
寮生は少し多く感じたが、盗難などの重大な問題は少なかった。規模を考えれば、寮生はきちんと暮らし、学んでくれていると見るべきであろう。

ただし、「異常なし」というのは平穏無事なまま、堅牢な何かが不動の状態で聳えていたわけではない。感染症が広がってしまえば、悪くすれば瞬時にウィルスの巣窟になるのが学寮であり、24時間逃げ場のない環境で人間関係のトラブルがあれば、あっという間に深刻化するのも学寮である。油断するとすぐに倒れてしまう、重い荷物を積んだ自転車を、学寮のスタッフや寮生会の学生が休まずこぎ続けることで、倒さずに何とか前に進めていた、というのが学寮の姿である。

自分がまだ道に倒れていないのも、「私が代わりにやります」「私も加わります」と常に言ってくれたスタッフや寮生のおかげである。500名の若者が朝の7時から付き合ってくれるという毎日、考えてみれば楽しいものであった。

お世話になった方々に感謝するとともに、次年度以降も志学寮と寮生が、今まで通り多くの人たちに支えてもらえるよう、寮生に代わって心からお願いしたいと思う。





今後の専攻科の課題について

専攻科長 三角 利之

私が専攻科長を拝命して、任期の2年が経過しようとしている。この2年間の間に専攻科の企画・運営等に携わり、本校専攻科の教育の成果や教育システムについて、優れている点や改善点が、具体的に見えてきたように思う。また、今年度本校は大学評価・学位授与機構の「機関別認証評価」や「専攻科の教育の実施状況等の審査」を受審した。その審査結果については、今年度末に正式に公表される予定である。このような機関別認証評価等の外部評価も踏まえ、今後の専攻科の課題について、以下に述べることにする。

まず、本校専攻科の今後対応すべき課題の一つは、土木工学専攻の改組の課題である。平成22年度に本科の土木工学科が都市環境デザイン工学科に名称変更し、平成27年度には都市環境デザイン工学科の卒業生を輩出することになる。この都市環境デザイン工学科の卒業生を専攻科に受け入れるために、土木工学専攻のカリキュラムを変更して、適切な専攻名に改組する必要がある。このことについては、将来計画委員会、専攻科委員会、都市環境デザイン工学科において、改組に向けた検討を行い、教育課程等の作成の準備を進めているところである。さらに、産業構造の変化や技術の進展、そして専攻科に対する社会のニーズや要望等をふまえ、現在3専攻からなる専攻科の在り方についても、今後検討していく必要があろう。

次に、モデルコアカリキュラムを基にした教育改革・改善の課題がある。モデルコアカリキュラムは、国立高専すべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容である「コア（ミニマムスタンダード）」を示すと共に、より高度な社会的要請に応えて高専教育の一層の高度化を図るための指針となる「モデル」を提示するもので、平成23年度末に国立高専のモデルコアカリキュラム（試案）が策定された。このモデルコアカリキュラムは、本科のみならず専攻科の教育課程も対象となる。今後、モデルコアカリキュラム（試案）の到達目標を踏まえ、本校専攻科の教育課程全体を見直し、その体系化および高度化を図っていく必要がある。このことにより、専攻科修了生が社会および産業界で活躍するための教育の質の保証を図ることができるものと思われる。

また、JABEE認定の対応についての課題もある。JABEEの認定基準が2012年度に改定され、この基準に対応して

専攻科の教育プログラムを改善していかなければならない。2012年度基準では、特に「育成しようとする技術者像」と、「修了生が確実に身につけておくべき知識・能力」を明確にすること、また、学習・教育目標の設定に関して、「チームワークに関する能力」が加えられ、本校の学習教育目標や教育プログラムを検討し改善していかなければならない。また、エンジニアリングデザイン教育も重要視されている。エンジニアリングデザイン教育は、課題発見から議論、提案、発展、解決のプロセスを重視する教育である。具体的には実際のプロジェクト遂行を踏まえ、設計や製造に限らず、工程管理、予算管理などを実施し、これら成果報告を行うことで実践力を養う教育である。本校の専攻科では、エンジニアリングデザイン教育に対応する科目として、環境創造工学プロジェクトの科目を立ち上げている。この科目の充実を図るために、平成24年度にはこの科目の単位を1単位から2単位に変更してその教育内容を充実させるとともに、専用の活動場所を確保するなど、設備の充実を順次進めているところである。今後、創造性豊かな技術者を育成していく上で、特色あるエンジニアリングデザイン教育を進展させていく必要がある。

最後に、本校の教育目標に掲げているように「グローバルに活躍できる技術者」をいかに育成していくかの課題がある。専攻科の教育課程の中に、外国語の科目をいくつか設けてはいるものの、国際化の流れに対応した外国語能力を、学生に十分身につけさせているかという点では、不十分であると思われる。このことは、卒業生・修了生からのアンケート調査からも、「外国語教育が不足している、あるいは十分ではない」との指摘がなされている。この問題を解決していくには、通常教育課程の中で対応することは、時間的な制限もあり困難である。そこで、このことを解決する方法として、特にアジアの諸国との国際交流や海外における長期インターンシップの充実、短期留学等の推進が挙げられる。このためには、長期の海外インターンシップや短期国際留学等を考慮に入れた教育課程の編成や国際交流のための環境づくり、および学生や教員の国際化の流れに対する意識改革等を今後推進していくことが重要であると思う。

以上述べてきたように、専攻科をとりまく課題は山積しており、このような課題を克服して、本校専攻科の技術者教育をさらに充実させ、国際的に活躍できる技術者、そして社会に大いに貢献できる技術者を養成していきたい。

専攻科の特別研究について

機械・電子システム工学専攻2年 岩元 謙介

私の専攻科での特別研究テーマは「眼電図を用いたスイッチ入力システムの構築」になります。この研究を電子制御工学科の原田先生の研究室で日々行っています。先生の研究室では大きく2つのジャンルでの研究が行われています。1つが人間の体から出る生体信号を用いた研究です。扱う生体信号の例を挙げると、脳波や、目の電位を使った眼電図、筋肉から出る電位を用いる筋電図などがあります。もう1つが小型のヒト型ロボットを用いて歩行や姿勢の制御などを行っています。私は、前者の生体信号を用いて研究を行っています。

私の研究は大まかに言うと、体が不自由になり、ベッドに寝たきりになってしまわれた方が、体を動かさなくても、目を閉じる動作を行うだけでスイッチが入るような仕組みを考え、実際に作るというものになります。現在の研究では電球のスイッチを入れるようにしていますが、このシステムを福祉機器に繋いだり、発展させてコミュニケーションツールを開発したりすることも出来るかと思います。

研究内容を少し詳しく説明しますと、人間の目にはわずかな電位が常に存在していますので、目の周りに電極を張り付けると、目を動かしたり、目を閉じたりしたときの電位の変化を測定することが出来ます。この目の周りに電極を張り付ける方法を眼電図法といい、この方法でとった生体信号を眼電図といいます。みなさんは病院や、映画やドラマの病院のシーンで心電図を映したのを見たことがあるのではないのでしょうか、あのピコンピコンと音を出しながら波が発生し、その人の心臓の鼓動を伝えているようにうつされているものです。眼電図もあの波形のように目を動かすと波形が上下します。特に、目を閉じる際の波形は大きく上下に波が振れるので、その特徴を生かしてスイッチを入れるシステムを作りました。システムを作ることが出来たので、これからは細かな部分の改良を行い、より実用性のあるシステムを構築していきます。

専攻科での研究は本科での卒業研究の友達と協力しながら行うのとは違い、一人で行う場合が多いので苦労することもあります。しかし、その分研究する時間が多く設けられているので、研究をとことんやりたい人にはお勧めです。それにどうしてもわからない場合は先生がヒントを下さったり、一緒に考えて下さったりするのでとても助かっています。

専攻科卒業にあたり私の研究する時間もあとわずかとなりましたが、最後の特別研究発表に向けて、今まで行ってきた研究の成果をしっかりと伝えることが出来るよう残りの日々をがんばっていきたいです。

専攻科の特別研究について

電気情報システム工学専攻2年 岩田 和也

専攻科の特別研究は、卒業研究と比べ研究時間も長く、専攻科での2年間は研究のためのものと言えるものでした。卒業研究の時は、東野君と二人で一つの研究を行っていましたが、特別研究では一人で研究を行うことになったため、専攻科に入学した当初は、とても苦労しました。私は、専攻科の特別研究として、本科での卒業研究の内容を引き継ぎ、「負の誘電泳動を利用した電圧可変平面電気四重極による細胞操作」についての研究を行いました。この研究は、バイオテクノロジーや医療分野への応用を目的としていますが、細胞操作の手法に電氣的な力である誘電泳動を用いていることから電気電子の知識が必要となり、今まで鹿児島高専で学んだ知識を生かすことができました。そのため、今まで受講してきた講義の大切さを今更ながら実感しました。また、細胞操作システムの開発は、須田先生の研究室において初の試みであったため、同じ研究室の先輩方のご指導や論文以外にも新たに調査及び考察しなければならないことも多かったためとても苦労しました。しかし、有用な結果が出るたびに大きな達成感がありました。今後、私の研究データが後輩の研究に生かされたらうれしく思います。そして、特別研究を通して、電気電子の知識だけでなく生体分野の知識、半導体微細加工技術の知識及び技術を身につけることができたため、この数年で大きく成長できたと思います。学内での研究発表会だけでなく、専攻科1年次に、電気関係学会九州支部連合大会及び応用物理学会九州支部にて研究成果を発表したことはとてもいい経験になりました。

私は専攻科終了後、九州大学大学院システム生命科学府へ進学します。そこで、生体分野の勉強をしていくこととなりますが、鹿児島高専で培った電気電子の知識と技術を役立てたいと思っています。また、鹿児島高専本科5年次から専攻科での3年間の研究経験も生かして新たな研究に励みたいと思います。

最後に、本科の卒業研究及び専攻科の特別研究のご指導をしてくださった須田先生に深く感謝いたします。また、同じ研究室の先輩として多くのご指導をしてくださった岩元さん、井手口さんにも感謝いたします。そして、研究を手伝ってくれた東野君、宮里君、上野君、東君、曲田君にも感謝します。

特別研究を終えて

土木工学専攻2年 石神 宏朗

私は、食品廃棄物（甘藷焼酎粕・でんぷん粕）を用いたきのこの機能性について5年次から3年間研究を行ってきました。研究を行うにあたり、指導教員の山内先生の勧めもあり、鹿児島大学農学部にて実験を実施させていただきました。

研究を開始した当初は、これまで学んできた土木工学分野と異なった農学分野の試験方法や試験器具を使用するにあたり戸惑いもありました。しかし、私と同じように鹿児島大学で研究を行っていた同研究室の先輩や鹿児島大学の先生、学生方々がさまざまなアドバイスや手助けをしてくださったお陰でスムーズに研究活動を実施することができました。実際にきのこの機能性を調査するために鹿児島大学で行った主な実験は、①抗酸化能の測定、②血圧上昇抑制効果の測定、③酵素活性の測定です。測定を行うにあたり、分光光度計や、ICP、液体クロマトグラフィーなどの機器や様々な試薬、処理方法などがあり、充実した研究設備の中で研究を行うことができました。

研究活動を通じ、農学部で研究を実施して戸惑ったことの一つに「単位」があります。” μ l”という単位は、今でこそすんなりと出てきますが、初めて鹿児島大学で実験を行い、 μ lという単位を聞いたときには、単位の換算が全く分かりませんでした。「1ml=1000 μ l」だということをこっそり先生に質問し、ノートに取ったことを今でも鮮明に覚えています。

特別研究における研究成果は、鹿児島大学や京都大学など様々な場所で発表する機会をいただきました。これも、非常にいい経験をしたと思っています。

私は専攻科を修了後に就職をしますが、就職してからでも特別研究における経験を生かして頑張っていきたいと思っています。

ISTS2011に参加して

機械・電子システム工学専攻1年 加藤 良治

2012年1月25日、私は日本を発った。初の海外デビューである。目的地はタイ王国。ISTS2011での発表に参加するためである。ISTS2011 (International Symposium on Technology for Sustainability) は日本の高専機構とタイ王国のキングモンクット工科大学との国際シンポジウムであり、私は鹿児島高専の学生として、現在行っている研究について英語での発表を行ってきた。

研究発表にあたって、論文と発表資料を作らねばならなかった。もちろん全編英語で。この作業は大変苦勞したが、英語に対する意識とともに英語力も向上することができた。このことについてはのちに詳しく述べたいと思う。ともあれ無事に発表準備を済ませて、いざタイ王国へ。空気・街並み・食事etc…21年間鹿児島で過ごしてきた私にとってとにかくすべてが新鮮で刺激的だった。出発前は不安で仕方なかったが、異文化を肌で感じるのがこうも楽しいものなのか！発表の経験もさることながら、「海外に出た」ということがとても大きな経験になった。

蒸し暑い外気とガンガンにエアコンを効かせた室内の温度差の中、発表は無事に終えることができた。緊張はしたが、現地で知り合った他高専の方から高評価をいただくことができとてもうれしかった。しかし、彼らもまたすごい。1年間留学した人、有名大学院への進学が決定している人、行動がとても積極的な人。さすが全国の高専の精鋭達である。彼らとの交流はこれまでの自分の意識を大きく変えてくれた。自分の未熟さ、住んでいた世界の狭さを実感し、残された高専生活を有意義に過ごし少しでも自分の能力を向上させたいと強く感じた。

現地ではカルチャーショックを受けることも多々あった。中でも印象に残ったのは、裕福層と貧困層の格差である。大きな庭付き一軒家に住む人もいれば、水上や空き地にやっと建てたボロボロの家に住む人もいる。繁華街のデパートは鹿児島のアミュプラザとは比較にならないほど大きく、きれいである。そこで優雅に食事をする人もいれば、河川の不衛生な水を使った食事をする人もいる。数日間の滞在であったが、後者の割合が圧倒的に多く感じた。資本主義の形態が生んだ形といえどもそれまでだが、このような現状の国があることを認識し、ぜひ肌で実感し、そして多くの人に伝えて欲しいと思う。日本は裕福すぎる国である。

先にも述べたように、今回のISTS2011を通じて英語力を上げることもできた。これまで英語はインプットの学習が多かったが、英語で書く・伝えるというアウトプットの練習が自分にとっては非常に効果的だった。タイの学生と英語で会話することも難く行えた。

最後に、ISTS2011参加にあたり、数々のご指導をいただいた塚本公秀教授、旅費の面でご支援いただいた高専機構と後援会の方々、ならびに関係していただいたすべての方々にこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

ISTS2012 in Bangkokに参加して

土木工学専攻2年 村山 陵

2012年11月に高専機構とKMITL（タイ王国キングモンクット工科大学ラカバン校）に加えて、長岡技術科学大学及び豊橋技術科学大学との共催により、ISTS2012という国際シンポジウムがタイ王国バンコク市で開催され、私は鹿児島高専から参加させて頂きました。現在私は、専攻科土木工学専攻に在籍しており商品廃棄物の有効利用に関する研究を行っております。今回のシンポジウムでも同研究に関する発表を行うことができました。

私がISTS2012に参加して二つのことを感じました。一つはシンポジウムに参加することによってこれまでの試験結果や考察を見直し、今後の展開を整理するいいきっかけになったということです。高専の本科・専攻科合わせ3年間の研究活動の中で現在の研究に至った経緯や今後の課題などを考えさせられました。

二つ目は、英語によるコミュニケーションの重要性を感じました。ISTS2012は研究発表を主体として、学生とスタッフの交流、国際性の向上、情報交換等の為の



フォーラムとして位置づけられています。日程でも発表終了後は、情報交換や交流の場が用意されており、どの学生も活発にコミュニケーションを取り合い、シンポジウムの後も友人として連絡を取り合っています。

最後にこのような国際シンポジウムに参加する貴重な機会を頂けたことに感謝いたします。

修了生へ贈る言葉

電気情報システム工学専攻長 濱川 恭央

鹿児島工業高等専門学校専攻科 修了生の皆さん、修了おめでとうございます。また修了生の保護者の皆様、心よりお祝い申し上げます。

鹿児島高専へ入学、さらに専攻科を修了するまで、丸7年。編入生は丸4年と、青春の大半をこの鹿児島高専で過ごされたわけですが、学生生活は楽しかったですか。長くもあり、短くもあったこの高専生活で、本当に沢山の思い出が出来たことと思います。

是非、高専で出来た友人や仲間を大切にしてください。

一緒に学び、ともに楽しみ、苦しみ、慰めあい、時には怒られ、喧嘩もし、同じ時間と空間を過ごした友人や仲間は一生の宝です。たとえ将来別の道に進もうとも、遠隔地に住もうとも、この情報化社会では連絡はとれます。全く立場や環境が異なるのに、自分のことをわかってもらえる良き理解者になってもらえます。本当に苦しいとき助けてくれるのは、家族や友人や仲間です。

「類は友を呼ぶ」といいますが、高専の学生、ましてや専攻科に残った皆はやはりどこか似ています。うまく言えませんが、考え方、物事に対する反応などは、他校の学生とは異なり、どこか似ているところがあります。だから苦しい時など、友人に相談すると、容易に意思疎通が図れ、アドバイスをもらえたりできます。

これから皆さんは高専を巣立っていきます。

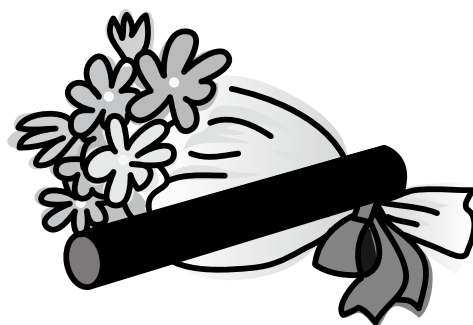
進学する人は、大学院ではじっくり勉強する時間はなかなか取れません。特に学年があがるほど「授業で習ったけど覚えていません」など、恥ずかしくて言えなくなります。したがって、自ら計画、能動的に行動、できれば楽しく勉強、研究を行ってください。

就職する人は、自分が選び、自分を選んでくれた企業です。例え理不尽に上司から怒られることがあっても、納期に間に合わなくてなど徹夜することがあっても、是

非、楽しく働いてください。また就職した企業を背負って立つ人間だと自覚し、より楽しく、そしてより長く働かれることを望みます。

人間皆、楽しい時や辛い時があります。なぜか楽しい時のことは忘れがちで助けも不要ですが、辛い時は、なぜか覚えていたりします。そんな時、「自分はひとりじゃない、高専出身の皆も頑張っている。どうせなら無理をせず、楽しく！」という考えでそれぞれの人生を楽しんでください。

最後に、鹿児島高専の専攻科修了という誇りをもち、今後のご健闘をお祈りいたします。



地域共同テクノセンター報告

地域共同テクノセンター長 前野 祐二

鹿児島高専「地域共同テクノセンター」は、地域の企業や行政機関などと連携し、地域企業との共同研究や技術相談、地域企業の技術者の人材育成事業、本校学生に対するインターンシップなどによる地域企業との協同教育を行うための拠点施設です。本校がこれまでに蓄積した技術開発や研究成果を基に、共同研究、技術相談、技術者教育を集約的に行うことにより、地域の技術力を高め、地域産業の振興・活性化を助長し、地域の経済力の向上に貢献することを目的としています。

本センターは「地域交流部門」、「共同研究部門」、「創造工房部門」、「研究促進部門」の4部門を設け、地域の中小企業及び行政と連携して、共同研究や技術相談、技術者の再教育機能を強化し、産学官連携機能や地域の活性化を図っています。また、ものづくり基盤技術の教育研究機能を高め、より高度な専門性、創造性を持った実践技術者の養成も図っています。すなわち、本センターは研究機能と教育機能とを融合させて、その一元化を図っていることに特色があります。

平成24年度の地域共同テクノセンターは、センター長、副センター長、前述の4部門の部門長の教員5名（副センター長は研究促進部門長を兼務）、およびテクノセンターの各部門を支援する産学官連携コーディネーターを中心に運営しています。本年度は中原コーディネーターに加え、宮村コーディネーターを新しく迎え充実した陣容にした。また、本年度から、KTC会員企業の合同企業説明会を開催し、地域企業と本校の連携を推進する試みを始めた。今後とも「地域に技術で貢献」を合言葉に、テクノセンターの活動をより活発に行っていく所存です。



ソフトプラザかごしま 「鹿児島高専産学官連携推進室」

地域共同テクノセンター副センター長
兼研究促進部門長 玉利 陽三

本校は、鹿児島市の情報関連企業も入居しているソフトプラザかごしまに「鹿児島高専産学官連携推進室」として入居しております。ここでは、技術相談、共同研究、産学官連携等の打ち合わせを行っております。

ソフトプラザかごしまでは、鹿児島市が主催して年に数回、産学官共同セミナーが開催され、そのうちの1～2回は、本校教員が講師を務めております。今年度も平成24年8月25日に本校電気電子工学科の前薮教員を中心に本校教職員、鹿児島市職員ならびにソフトプラザかごしま入居企業の方と協力して、キッズ向け産学官共同セミナー「ロボットプログラミング教室」という中学生向けの実習を、電気電子工学科5年生にも手伝いを頂き行いました。参加した中学生自身がロボットを組立て、それに自ら作成したプログラムを入れ込み動かすことができ、大変好評でした。

また、ソフトプラザかごしまへ入居している1団体として、平成24年11月30日（金）から12月2日（日）の3日間にわたり、「かごしまITフェスタ」の運営に携わり、ブースも出展し、さらに、ロボット工作教室を実施しました。ロボット工作教室では、電気電子工学科の中村教員、前薮教員、技術室の永田技術職員、松尾技術職員に講師をして頂き、さらに電気電子工学科5年及び電気情報システム工学専攻2年の数名の学生にも手伝って頂き、大変好評でした。鹿児島高専の展示ブースでは、気象ネットを展示、さらに情報工学科の堂込教員、技術室の脇部技術職員、情報工学科5年学生による「インターネットで遠隔操作できるロボット」の実演をしました。展示ブースではこれらに加え、情報工学科の芝教員ならびに情報工学科5年学生による応援団の演舞ができるロボットも展示して大変人気がありました。また、ITフェスタのイベントの一つでありますETロボコンITフェスタ杯において、本校の学生チームが優勝し、ITフェスタを盛り上げ、地域に貢献しました。

このようにソフトプラザかごしま「鹿児島高専産学官連携推進室」は、IT関連の共同研究の推進や地域貢献のために鋭意努力していく所存ですので、ご理解、ご協力をよろしくお願い致します。

KTC会員企業の合同企業説明会

地域共同テクノセンター副センター長
兼研究促進部門長 玉利 陽三

錦江湾テクノパーククラブ（KTC）とは、本校を中心に南九州地域の企業と鹿児島県商工労働水産部、鹿児島県工業技術センター、鹿児島市、霧島市等の公的機関も加入している産学官連携組織です。本校の地域共同テクノセンターが主体となって活動しております。

今年度初めての試みとして学生への会社案内とインターンシップに関する説明を目的とした合同企業説明会を平成24年6月7日（木）に開催しました。対象は、4年生以上で専攻科生も含まれました。また、今回説明会に参加して頂いた企業は、11社（飛鳥電気㈱、アロン電機㈱、㈱九州タブチ、㈱コアガス日本、国分電機㈱、㈱ダッド鹿児島支社、㈱トヨタ車体研究所、㈱南光、㈱秦野精密、㈱藤田ワークス、㈱YPK（50音順）（敬称略））でした。

大講義室で全体プレゼンテーションを行いました。定員160名の教室がほとんど満席となるほどでした。その後、第一体育館へ場所を移し、各社ブースを設けて頂き、個別説明をして頂きました。

アンケート結果より、学生、企業側ともに参加して良かったとの回答を得ております。学生に関しては、県内より県外への就職を希望している学生も多く、就職先として検討したいと考える学生は少ないようでしたが、この説明会に参加し、入社試験を受験して見事、内定をもらった5年生も出ております。

来年度以降も開催し、KTC会員企業を学生にも認識してもらい、将来の就職先の一候補として考えてもらえれば幸いです。鹿児島高専の卒業生が県内企業にも就職、そして活躍し、地域に貢献することを願っております。



共同研究について

共同研究部門長 前蘭 正宜

本部門は共同研究の推進が主たる担当であります。本校は高等教育機関として地域への貢献や産学官連携の重要性が高まっています。本年度も例年と同様に「地域に技術で貢献」を重点的に行っています。

たとえば、地域における産学連携の推進を目的とした錦江湾テクノパーククラブ（KTC）例会の開催（年数回）、本校教職員の研究活動をベースに共同研究の「種」を紹介する研究シーズ集の発行、かごしまITフェスタの運営・参加等を例年と同様に行っています。また、鹿児島高専と都城高専、両校からの技術発表や、錦江湾テクノパーククラブ、霧島工業クラブとの交流を目的とした南九州発新技術説明会を開催しています。このように県内に留まらず、高専機構や他大学・高専、県外の企業との連携を図るため、全国高専テクノフォーラム、全国高専フォーラム、産学官推進会議、情報基盤ネットワーク会議等に参加し、本校の技術紹介と意見交換会を行い、本校教員と企業との連携研究を推進しています。

また、一昨年度から特許の取得に努めるために独立行政法人 科学技術振興機構 知的財産戦略センター 大学支援グループ 特許化支援事業所（九州）と連携して教員のアイデアを特許に結び付ける支援を行っています。

地域共同テクノセンターでは粒度分布測定装置をはじめとする工作機械、測定機器を設置しており、共同研究の設備として使用可能です。地域の中核施設としての充実を活動目標としています。今後ともご理解ご協力の程、宜しくお願いします。

地域交流について

地域交流部門長 岡松 道雄

平成23年4月より地域交流部門を担当させていただいています。地域交流部門は地域の企業との交流を促進し、高専の持つシーズと地域企業の持つニーズのマッチングを図ることが主な目的です。また、この活動をより広い範囲でとらえる視点が、いわゆる産学官の連携です。例年、錦江湾テクノパーククラブ（KTC）をはじめ

め、ベンチャープラザ鹿児島「二水会」、九州沖縄地区高専新技術マッチングフェアへの参加など、地域とのつながりを重視した活動を行ってきました。

また、私の所属する都市環境デザイン工学科は、土木工学科を母体とし、一昨年（22年度）学科名を改称しました。それに伴い、総合的に都市と環境を考える学科となりました。この視点から地域交流を考えると、産学官の取り組みの中で、工業のみならず公共空間や農林業振興等を考える活動のアプローチが見えてきます。

このような観点から始めた取り組みに、ペットボトルイルミネーション（PBI）があります。これは霧島商工会議所青年部（YEG）の発案で昨年（平成23年）から始まった地域活性化のためのイベントです。自然エネルギーだけを使い、リサイクル資源としてのペットボトルを照らすことで、単にきらびやかなイルミネーションをつくるだけでなく、まちの活性化と歴史・環境問題を同時に考えることが目的です。

本校からは、地域共同テクノセンターをはじめ、一般教育科（理系）の野澤先生、都市環境デザイン工学科の毛利先生にご協力を頂きながら、去る12月14日に2回目の点灯式を行うことが出来ました。今年はトヨタ車体研究所様やソニーセミコンダクタ九州様、そして隼人工業高校様の参加もあり、一段とにぎやかなPBIとなりました。

また、ペットボトルの洗浄収集に市内の小中学校が協力をして頂き、約8000本集まったと聞いています。組み立てには昨年に引き続き、本校の建築同好会の学生が参加し丸2日かかりで、直径9m高さ6mのドームを完成させました。骨組には地域（国分酒造のある川原地区）の竹林から間伐した孟宗竹を採用して、地域の林業を考えるきっかけとしています。

このように地域連携と環境教育をつなげる「まちのデザイン」活動をとおして、地域における本校の存在意義を見つめているところです。



平成24年度人材育成事業について

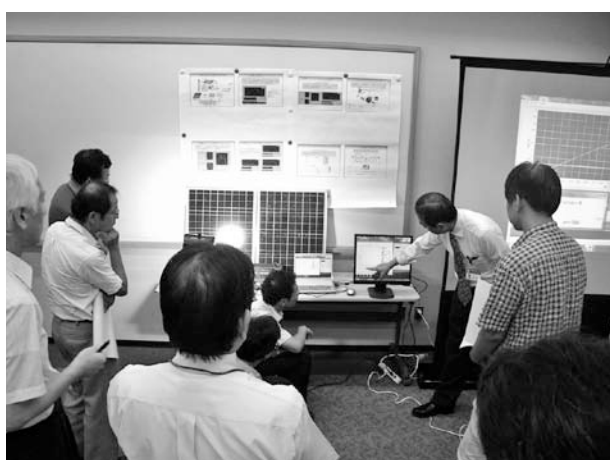
創造工房部門長 島名 賢児

中小企業では一人一人の技術者が幅広い知識と技術を持つことが中小企業力の向上につながり、そうした人材育成を通じて自社の特徴を活かしたオリジナル製品の開発を積極的に行っていくような企業を増やすことが鹿児島県の発展につながると考えており、本校では平成18年度から継続して中小企業技術者を対象とした人材育成事業を実施してきて、これまでに受講生として250名以上が受講しています。その成果が評価され、日本工学教育協会から平成24年度日本工学教育協会賞の業績賞が授与されました。

7年目となる平成24年度については、鹿児島県内に在住のスキルアップを目指している社会人の方を対象に鹿児島高専の持つ先端的、先導的な研究・開発技術をベースに、受講生の技術力向上を目的として、高専教員の専門性を活かした講演とデモにより、新技術をスポット的に公開し、技術のスキルアップを目指していただくため、平成24年9月8日（土）に鹿児島市のかごしま県民交流センターで「鹿児島高専発 県民のための新技術セミナー」を実施しました。実施方法は、午前の講演と午後からの実験デモもしくはポスターセッションを行いました。この取り組みは、本校の電気電子工学科の楠原教員を発起人として昨年度から開催しており、今回は幅広い分野の内容の講演やデモを行うため、本校からは機械工学科の小田原教員、電気電子工学科の楠原教員、中村教員、今村教員、永井教員、電子制御工学科の新田教員、島名、情報工学科の武田教員、技術室の永田技術職員、清水技術職員が講師として参加し、本科学生3名にも手伝ってもらいました。

来年度以降も本セミナーを継続していきたいと考えておりますので、ご理解とご協力の程よろしくお願い致します。





科研費錬成塾について

創造工房部門長 島名 賢児

東日本大震災の影響で大幅な予算削減が行われている状況の中、各教員に配分される研究費も年々減ってきている状況です。そのため更なる研究の発展を図るためには科学研究費などの外部資金を獲得することが重要となってきました。そこで本校でも科学研究費の採択件数の増加のために今年度は新たな取り組みが行われました。

その取り組みの一つとして、今年度はまず、平成24年9月4日（火）に長岡技術科学大学の姫野修司先生をお招きして本校教職員に対して科学研究費の申請書作成についてご講演いただきました。さらに、本校の参加者が自らの研究内容を1枚のスライドにまとめて、そのスライドをもとに説明し、参加者全員から質問やコメントを受ける形式で行われました。参加者からは非常に適切

な指摘を受けることができたとの声が上がっていました。

さらに、平成24年10月9日（火）に新潟県長岡市にある中盛館で開催された長岡技術科学大学VOS塾に本校の教職員が参加しました。長岡技術科学大学からは様々な分野の教員13名、本校からは4名の教職員が参加しました。他にも長岡高専や長野高専からも数名参加していました。実施方法は、発表者がプロジェクトを使って科学研究費の申請書またはスライド1枚に研究内容をまとめた資料を映し出して説明し、参加者から質問やコメントを受ける形式でした。長岡技術科学大学の先生方からは非常に厳しく、また適切なコメント等をいただき、本校の参加者からも申請書を作成する上で非常に役に立ったとの声が多かったです。

来年度以降もこのような取り組みを継続していきたいと考えておりますので、ご理解とご協力の程よろしくお願い致します。



統合失調症という病気

学生何でも相談室長 松田 信彦

何年か前のこのコーナーでも少し触れたのですが、「統合失調症」は高専生に限らず、この年頃の学生によく見られる精神疾患のひとつとして、我々相談室関係の教職員はよく耳にする病気です。しかし、この病気は、まだまだ一般にはよく知られていない面もあり、これを読んでいる皆様にとっても、あまりなじみのない病気かもしれません。

この統合失調症という名前になじみのない大きな理由は、この病名自体が比較的新しい名前だからです。実は今から10年ほど前の平成14年までは、「精神分裂病」と呼ばれていました。もともとは明治時代にドイツ語を日本語訳したものです。しかし、病名からくる偏見・誤解が患者やその家族を苦しめていることなどを勘案し、平成14年に日本精神神経学会が訳語を改めて「統合失調症」とし、厚生労働省がそれを認めて、今の形になりました。つまり、病気自体は昔からあるのですが、病名は、まだまだ10年程度の歴史しかないのです、一般的にはまだまだ認知されていないのでしょう。

そこで、この病気のことを少しでも知っていただこうと思うのですが、私は医療関係者ではありませんので、医学的な話はできません。そこで今回は、本職の国語の教員の立場から、この病気に関するひとつのエピソードを紹介したいと思います。

本校では1年生の国語の時間でだいたい教えるようにしておりますが、高村光太郎という詩人がいます。明治から昭和にかけて活躍した、日本を代表する詩人であり、彫刻家でもあります。彼の代表作に『智恵子抄』という詩集がありますが、妻である智恵子と結婚する前から彼女の死後まで、およそ30年間にわたり詠まれた多くの詩には、彼女に対する光太郎の愛情があふれています。

実は、この妻智恵子は、結婚して15年ほどたった頃から精神分裂病（現在の統合失調症）を煩い、特に最後の数年間は、入院などして闘病生活を送ります。（直接の死因は粟粒性肺結核）

このことは、光太郎の詩にも、また「智恵子の半生」という文章にも、非常によく描かれています。統合失調症の症状としては、一般に陽性症状と陰性症状に分けられるのですが、陽性症状には、幻覚や幻聴、被害妄想や注察妄想などがあります。智恵子にもこの陽性症状があったことが、彼の詩からうかがえます。智恵子の亡く

なる3年前に詠まれた「風にのる智恵子」には、次のような一節があります。

狂った智恵子ははをきかない

ただ尾長や千鳥と相図する

（中略）

尾長や千鳥が智恵子の友だち

もう人間であることをやめた智恵子に

恐ろしくきれいな朝の天空は絶好の遊歩場

智恵子飛ぶ

また亡くなる前年の「値（あ）ひがたき智恵子」には、

智恵子は見えないものを見、聞えないものを聞く。

智恵子は行けないところへ行き、出来ないことを為（す）る。

（中略）

わたしをよぶ声をしきりにきくが、智恵子はもう人間界の切符を持たない。

とあり、病状がかなり進行していることが表れています。そして智恵子の亡くなる4ヶ月ほど前に詠まれた「山麓の二人」には、

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は

陰しく八月の頭上の空に目をみはり

裾野とほく靡いて波うち

芒（すすき）ぼうぼうと人をうづめる

半ば狂へる妻は草を藉（し）いて坐し

わたくしの手に重くもたれて

泣きやまぬ童女のやうに慟哭する

——わたしもうぢき駄目になる

意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて

のがれる途無き魂との別離

その不可抗の予感

——わたしもうぢき駄目になる

涙にぬれた手に山風が冷たく触れる

わたくしは黙つて妻の姿に見入る

意識の境から最後にふり返つて

わたくしに縫（すが）る

この妻をとりもどすすが今は世に無い

わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し

闇（げき）として二人をつつむこの天地と一つになった。

これらは、非常に生々しい内容の詩ですが、光太郎はこ

のような状況の妻から目をそらさずに、まさに愛をもって彼女に向き合った結果だと、私は思うのです。

一方で、妻の死後に書かれた「智恵子の半生」には、

智恵子が結婚してから死ぬまでの二十四年間の生活は愛と生活苦と芸術への精進と矛盾と、さうして闘病との間断なき一連続に過ぎなかつた。彼女はさういふ渦巻の中で、宿命的に持つてゐた精神上の素質の為に倒れ、歓喜と絶望と信頼と諦観とのあざなはれた波濤の間に没し去つた。

という一節があり、光太郎は彼女の精神的な病気を、彼女の「精神上の素質」と表現しています。

現在、相談室に携わる我々のような立場の人間は、よくこのような精神疾患であったり、発達障がいにより、様々な症状が見られる学生について、できるだけ「病気」あるいは「障がい」という言葉を使わずに、その学生の「個性」として捉えようとし、周囲にもそのように説明することがあります。それは、まだまだ多くの人々の中には、特にメンタル面での病気や障がいに対する様々な偏見が、根強く残っていることもあり、そういう誤解や偏見を出来るだけ避けようとする配慮なのかもしれません。しかし、これだけ教育にしても、人権についての啓発も、そして医療も発達した現代においても、様々な人たちが病気や障がいに対する偏見をなくそうと日々努力して、なお、なかなか誤解や偏見がなくなる中で、実に70年以上も前の日本に、このようなひとりの詩人がいたことに、驚きと感動を禁じ得ません。

彼女の病気に対し、智恵子も光太郎も、おそらくは我々が想像を絶するような苦しみを味わっていたであろうことは想像に難くありません。それでも光太郎は智恵子を無上の愛で包み、また彼女も光太郎に一心に愛を注ぎ込んでいたことは、これらの詩を通して知ることができます。そして、彼は彼女のありのままを受け入れていることが、この詩を通してよく理解できるでしょう。目の前の辛い現実から目をそらさずに、それを宿命だと受け止め、また病気により精神に変調をきたしていたことを、彼女の「素質」だと捉えた彼の愛は、人間として本当に見習うべき姿勢だと思います。

彼の詩の素晴らしさは、決して彼の表現性や文章的テクニックだけではなく、本質的にこのピュアな人間性と深い愛情によるものだと思います。

これまで国語の授業中に、幾度となくこの光太郎の詩と文章を学生にも紹介してきましたが、そのたびに、心を打たれます。また相談室長として、また教員として、

メンタル面で問題を抱えている学生にどのように接すべきかを、彼の作品をとおして私は学んできたような気がします。それは、その学生のありのままを、ピュアな気持ちで受け止めることだと思います。まさにその学生の「個性」として、また「素質」として認めていくことが必要なのだろーと感じています。

さて、現在ではこの統合失調症も、光太郎や智恵子の時代と比べると、医学の発展とともに、服薬などの治療でずいぶんと回復するようになりました。

一般的にこの病気の生涯罹患率（一生の間に病気にかかる割合）は、およそ1%とされています。100人に1人の割合になりますが、これは人が一生の間にかかる割合ですので、そう考えると、高専生でこの病気にかかる割合は、もっともっと低いのではと思われるでしょう。しかし、実際はそうではありません。実はこの病気には好発期があり、だいたい10代後半から20代に発症することが多いとされます。つまり高専生（一般的には高校・大学）の年代は、比較的発症しやすい年齢ということになります。鹿児島高専には1000人以上の学生が在籍していますので、1%前後の罹患率と好発期とを合わせ考えると、単純に10人のそういう学生がいても、なんら不思議ではないのです。

2008年の厚生労働省のある調査では、日本で受診中の統合失調症の患者は、およそ80万人と推定されるという結果が出ています。当然受診していない方は、もっと多くいるだろうと思われます。

このように、実は身近な病気でありながら、一般には十分に認知されていないのがこの病気のひとつの側面で、まずはこういう病気があることをよく理解することが大事だと思います。そして、もしそういう兆候があれば、すぐに医療機関を受診することで、現在ではずいぶん良くなることも知って欲しいと思います。

そして、この統合失調症のことを正しく知ること、誤解や偏見がなくなることが、何よりも大切なことだと思うのです。



ソフトウェア無線の研究

電気電子工学科 井手 輝二

私の専門は、無線通信分野です。そのなかでも特にソフトウェア無線の研究を企業勤務の頃から行なってきました。「ソフトウェア無線」とは、無線機（例えば携帯電話など）にソフトウェアを入れ替える（ダウンロードする）だけでいろんな無線システムに対応するための技術です。

身近な無線機として例えば無線LANと携帯電話の端末は、使用している電波の周波数帯が違うので別々のハードウェアが必要になります。使用するユーザの立場からは、なるべくハードウェアは一つにして、移動する場所によって無線LANと携帯電話を切り替えて（ソフトウェアをダウンロードして）使用したいものです。ところがハードウェアを一つにしようとする場合に大きな問題があります。それは異なる周波数の電波は波長が違うために、例えば受信機の場合では同調回路をその都度その周波数に調整するか、切り替えなければならないわけですし、送信機も同じような問題があります。特に従来の受信機では、高い周波数の電波を受信する場合に何回も低い周波数に変換して、復調（電波で送る前の元の音声やデータに復元すること）しているため、その都度同調回路を通るわけですから、受信する周波数が違うといろんな種類の周波数変換回路や同調回路が必要となり、とてもハードウェアを一つにしようすることが実現できません。

このような問題点に対して、受信した電波を一回だけ周波数変換して復調する受信機（直接変換：ダイレクトコンバージョン受信機）にすることにより、少なくともいろんな種類の周波数変換回路や同調回路は不要になるため、ソフトウェア無線に適用できるようになります。このようなダイレクトコンバージョン受信機をソフトウェア無線として、いろんな無線システムに適用できるようにするためには、まだいろんな問題点があります。その中でも大きな問題点として、無線機で無線周波数を処理するときにどうしても使用しなければならないデバイス（素子）が起す歪みがあります。今私はダイレクトコンバージョン受信機のそのような歪みを補償する技術の研究に取り組んでいます。

ソフトウェア無線技術は、最近さらに発展してコグニティブ（認知）無線と呼ばれる技術の研究が行われています。コグニティブ（認知）無線では、ソフトウェアで無線システムを切り替えるだけではなく、無線機がその

場所が一番適した無線システムを自分で選択してあたかも人工知能をもったようにすることであり、いろんな無線システムが混在するところでは、干渉を回避して通信を行うことが可能になります。

このようなソフトウェア無線やコグニティブ（認知）無線は、未だ解決すべき問題が多々ありますが、ユーザ視点に沿った無線機や無線システムが実現できるように今後共研究を進めていきたいと考えています。

アーバンデザインにおける隙間と境界の可能性

都市環境デザイン工学科 毛利 洋子

何を対象とするかで「デザイン」の具体的内容は大きく変わります。私の場合、実務の上では、家具や住宅、ポスターやチラシ等の配布物も、デザインする対象としてきました。

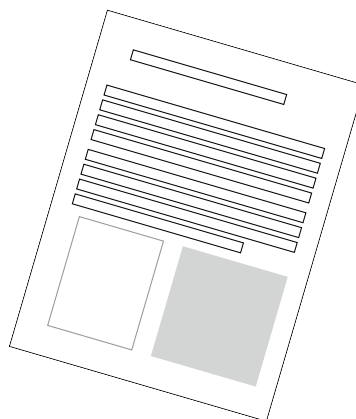
一方で、研究の対象としてきたのは、アーバンデザインと言われる領域です。そのなかでも、街路、ポケットパーク、広場、建築物の足元に広がるオープンスペースなどに着目してきました。このような空間に対し、どのような形状を提案すべきか、手掛りとなる知見を模索しています。大まかな方法は、新たに設計する際のスタディの過程を記録することや、既にある空間を調査することです。調査の着眼も色々ありますが、形だけに着目するのではなく、人にどの様に見えるのか、その結果、どの様に人々に使われているのか、という関連性に着目したり、その場所の歴史に着目したりもします。したがって、人が持つスケール感覚や、文化によるスケール感の違い、認知心理学、ネットワークに関する知識も、形づくりの際の手掛りとなります。工学である土木・建築・環境の知識も踏まえつつ行うアーバンデザインのバックグラウンドは、とても幅広いです。それは、それだけの影響力を持つという事でもあります。

このような研究対象としてきた空間は、建物どうしの間や公共空間と民有地の境界を跨ぐこと等、様々な狭間であることが多いので、「隙間と境界」という印象を持っています。このような空間も、人々の往来、地域のイベント・祭り、路上でのパフォーマンス、屋外でちょっと一息つきたい人達の受け皿となる都市の一部分です。また、時間をかけて、その地域で生活する人達によって作

り上げられていく部分でもあります。したがって、街の印象や街のにぎわい、街の個性へ与える影響が大きい部分だと認識しています。その為、まちづくり活動の相談に対応することや、まちづくり活動に加わる事もあり、同時に研究活動へも繋がります。

本校に着任して2年目を迎えましたが、初年度の昨年度から、霧島商工会議所青年部の方々が主催されるペットボトルイルミネーションに関わることができました。今年も大変お世話になり、楽しませて頂いています。この取組の価値をアーバンデザインの視点で二つ挙げてみます。一つは開催場所です。国分市民会館の前にある広場ですが、この場所に行くと、「川筋直し」の石碑があります。かつて川があった場所です。これを踏まえて地図をみたり、古地図と比較したりすると、この場所で旧市街の格子状の街路形状を残す国分の町割りが途絶え、旧市街の端となっていたことがわかります。一方、河川の流れを変えたことで生じた土地や、その後の整備で生じた道路線形の狭間で不整形な形が生じ、その部分が現在、広場として整備されています。「街の隙間」の様な広場の存在そのものが、この土地の歴史を伝えていきます。もう一つは、この様な場所で、地域の人々が、イルミネーションというイベントで活用するという点です。地域の人々に活用されることで、このような場所が顕在化され、地域の人々が活用できる空間であることが認識されていきます。すると、違う機会に地域の人々が利用し始めるかもしれない。現在、既に、他のイベントでも活用されています。この様な、繰り返しと継続が、地域の個性や街のにぎわいを育み、街の豊かさに繋がって行くのではないかと考えています。

アーバンデザイン次第で、この様な活動が可能にも不可能にもなります。人々の活動を促し、受け入れる器のデザインがアーバンデザインであり、その可能性を持ったデザインであることが、少しでも伝わればと思います。





贈る言葉

情報工学科5年担任 玉利 陽三

孔子の言葉に

子曰く、

吾れ十有五にして学に志ざす。

三十にして立つ。

四十にして惑わず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳従う。

七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。

があります。前半部分だけ、現代語訳すると、

孔子は云う、「私は、十五歳で学問の道に入ろうと決めた。

三十歳で学問に対する自分なりの基礎を確立した（学者として自立した）。

四十歳で戸惑うことがなくなった。

…」となります。

これを高専生に当てはめると、「ちょうど15歳のとき、それぞれの専門工学（情報工学科の学生であれば、情報の道）で飯を食って行こうと決めて高専に入った。」となるでしょう。そして、現在20歳の卒業生の皆さんは今からどうしましょう。鹿児島高専での5年間、それぞれの専門工学を学んで来ましたが、まだまだ足りません。一人前のエンジニアになるためには10年がかかるということです。その道を極めるためには、まだまだ勉強が必要です。今後は、高専で学んできた勉強を礎に、現場で必要な勉強、経験を積んでいかなければなりません。次々と新しいことが出てきて日々勉強しながら仕事をこなす人がほとんどだと思います。このような経験を積んで立派なエンジニアになっていくことでしょう。私も大学を卒業して、もう勉強をしなくても良いと思ったことがありました。それは、就職して間違いであると痛感したことを今でも覚えております。私は、40歳を越えておりますが、まだまだ、戸惑うこと（私の場合は、特にこの2年間はクラスの学生指導で戸惑うこと）が沢山あり、日々勉強だと思うことにしておりました。きっと皆さんの就職先でも、進学先でもそう思うことでしょう。

今後それぞれの道を極めるために鹿児島高専魂を胸に頑張ってください。皆様のご活躍を期待しております。

月並みではありますが、卒業生へ贈る言葉とさせていただきます。卒業おめでとう。

卒業を迎えて

機械工学科5年 西村 隼人

鹿児島高専に入学して5年がたち、卒業を迎えようとしている今、5年間とは長いようで短いものだと感じています。20年間生きてきた中で4分の1の期間をこの鹿児島高専で過ごしたのですが、とても充実して自分自身が大きく成長できた5年間となりました。この5年間で素晴らしい経験をたくさんすることができました。

寮生活では、集団行動でのマナーやルールを教えてくださいました。これは社会に出てからもとても大切な事だと思うのでこの経験をいかしたいと思います。寮生活で友達もたくさんできて楽しい生活を送ることができました。テスト前日に友達と勉強をしていて日の出を迎えたことが懐かしく思えます。私は野球部に入部し、日々練習に取り組みました。どんなにきつい練習でも仲間と励まし合いながらがんばりました。野球部ではチームワークの大切さを学ぶことができました。体育祭の応援団では97人の大所帯を仕切る幹部として1年間練習に取り組みしました。優勝目指して本番に向けてきつい練習をこなしました。本番での感動は一生忘れないと思います。その他にも工場見学旅行や、クラスマッチなど思い出は数え切れないほどあります。

私は5年前、鹿児島高専がどのような学校でどのような勉強をするのかなど、詳しいことを知らずに入学しました。そこで入学してから自分のイメージしていたものと違う部分も多くありました。しかし、目の前のことに一生懸命になることで、高専生活にやりがいを持つことができるようになりました。どんなに苦手な事でも挑戦することで、それが楽しみに変わることがあり、今思えば鹿児島高専での出来事すべてが私にとって楽しい思い出です。

鹿児島高専は、いろいろな事に挑戦できる学校だと思っています。勉強だけでなく部活動や学校行事、寮生活など自分のやりたいことに挑戦できる環境がこの学校が作ってくれました。4月から就職し、社会人としての第一歩を踏み出しますが鹿児島高専で学んだ、何事にも挑戦する気持ちを忘れずにがんばりたいです。

また、このような素晴らしい経験ができたのも、両親を始め、先生方など多くの方々の支えがあったからです。この場を借りて感謝申し上げます。

鹿児島高専で得たもの

電気電子工学科 5年 中瀬 裕貴

鹿児島高専に入学し、もうすぐ卒業を迎えます。振り返るといろいろなことがありましたが、私は特に部活に力をいれてきました。私はサッカー部に所属し、部活に励んできました。サッカー部ではいろいろなことを学びました。サッカー部では全国高専大会優勝を目指し、日々の練習に取り組んでいます。入部当初は練習のきつさ、厳しさに驚きましたが、先輩、後輩、同学年の仲間に恵まれ、5年間続けることができました。その中で精神的にも体力的にも大きく成長することができ、サッカーだけでなく挨拶や上下関係、時間を守ることなど、人として大切なことを学ぶこともできました。

1年の頃はグラウンド整備や道具の準備・片づけ、ボール拾いなどの雑用を経験し、大変でしたが同学年の仲間が多くいたので、きつくても楽しい毎日でした。その中で仲間がいることできついことも乗り切ることができることや裏方の仕事の大切さを学びました。私は5年間で2回の全国高専大会優勝を経験することができました。厳しい練習を乗り越えて優勝したことにより、とても大きな感動を味わうことができました。このような経験はこれから先、なかなか経験できないのではないかと思います。

私は2年生の頃から、高専卒業後の進路として大学へ編入することを目標としてきました。日々の練習で疲れていながらも、宿題や実験レポートを効率的に終わらせ、部活と勉強を両立し、成績で上位を維持できるよう努力しました。その結果、大学進学という目標を達することができました。これは進学という目標があったから出来たことで、目標を持つことはとても大切だと思います。

また寮生活を通して洗濯や身の回りの整理など、それまでは親に任せていたことも自分でできるようになり、大きく成長することができました。友達と寝食を共にしたり、夜遅くまで遊んだり、語り合ったのもいい思い出です。

私はこれら以外にも、ここには書ききれないくらい多くのことを鹿児島高専で得ることができました。5年間お世話になった先生方や友人、先輩、後輩そして両親には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れることなく、これからの人生で、鹿児島高専で得たものを最大限に生かしていきたいと思います。

鹿児島高専での2年間を振り返って

電子制御工学科 5年 落合 龍稀

私が鹿児島高専に編入してから、2年の月日が経とうとしており、もうすぐ卒業を迎える。この2年間は、たくさんのことを経験し、また学ぶことができたとても充実した日々だった。

鹿児島高専に編入するにあたって、私は勉強や人間関係など、何もかもが不安でしかたがなかったが、その不安は的中した。授業では、みんな当たり前のように微積分やC言語を使って問題を解いていたのだ。自分だけが取り残されている感じがして、不安はどんどん大きくなった。しかし、クラスメイトは私と距離を置くことなく、わからないことは親切に教えてくれ、日を重ねるごとに会話も増えていき、不安は小さくなっていった。

4年生の夏季休暇には、厳しい応援団の練習が始まった。高校ではそういった経験がなかったので、はじめ私はなぜみんなが夏季休暇をつぶしてまで応援団にそこまで力をそそぐのか不思議だった。応援団の練習は続き、10月からは下級生も加わり全体として形になった頃には、少し本番当日が楽しみになってきた。そして、高専祭当日雨の心配もあったが、無事に演舞を終え、電子制御工学科は優勝することができた。しかも、応援の部と櫓絵の部のW優勝だった。私は達成感で胸がいっぱいになり、とても嬉しかった。このときになって、何故みんなが応援団に一生懸命になって力を入れるのかがわかったような気がした。

高専祭が終わると、工場見学旅行でシンガポールへ行った。私にとっては初の海外だったのでとても新鮮だったし、外国の人や文化に触れ、外国を身近に感じることができ、楽しく貴重な旅行となった。

私の高専生活を語るうえで、欠かせないのはサッカー部での経験である。編入して間もない頃、勉強への不安で入部を悩んでいた私を、仲間が強く勧誘し背中を押してくれたので入部を決意することができた。サッカー部の練習は想像をはるかに超え、休みはほとんどなく、フィジカルトレーニングが満載のハードな日々の連続だった。合宿は早朝6時からのフィジカルトレーニングから始まり、夜のミーティングで終わるサッカーづくしであった。厳しい練習が苦しくて逃げたくなる日もあったが、支え合える仲間がいたから踏ん張ることができたと思う。部活動では、仲間の存在は本当に大きく心の支えとなった。そして、練習の後は、温泉に行ったり、一緒にご飯を食べたりと、共に楽しい時間を過ごして

きた。また、テスト前には勉強も教えてもらい助けてもらってばかりだった。

今年の夏、サッカー部の最大の目標であり5年生の集大成である全国高専サッカー大会が山口県で開催された。私は、昨年、今年と全国大会のピッチの上に立つことができ、2回の全国大会を経験することができた。全国大会では、1回戦福井工業高専、2回戦豊田工業高専に勝ち、準決勝で近年最大のライバルである近畿大学工業高専に逆転勝利した。決勝戦では新居浜工業高専に勝利し優勝することができた。私は、優勝が決まるといろんな感情がわいてきて声を出して泣き、苦楽を共にした仲間と抱き合っていた。最後の最後にものすごい感動を味わうことができた。

今こうして2年を振り返ってみると私は、いつも周りの仲間に支えられて過ごしてきたのだと、改めて感じている。本当に忙しい2年間だったけど、楽しい高専生活だった。

5Sのみんな！ サッカー部のみんな！

本当にありがとう。

5年間を振り返って

情報工学科5年 久保 秀喜

時間がたつのは早いもので、高専に入学してから5年たち、いよいよ卒業となります。

5年間の高専生活では様々なことが体験でき、学ぶことができました。

1年生の時、寮に入ることで生活が大きく変化しました。そして、期待と不安の中、高専生活がスタートしました。寮生活では、親元を離れての生活で親のありがたさを知ることができ、最初は不安だったものの友達が増えるにつれて楽しいものとなりました。

友達が増えるきっかけを作ってくれたのが、高専祭でした。特に部活に所属していなかった私は、半ば強制で応援団をやることとなりました。最初は、土日も練習だし、風呂も込むし、とても嫌いだったのを覚えています。しかし、練習を通して、今まであまり話す機会のなかった人と話す機会も増えて、寮でも一緒に過ごすようになりました。今思えば、この高専祭で仲間が増え、高専生活が大きく変化することになりました。最初は嫌いだった応援団でしたが、段々と好きになっていって、気

づけば4年間毎年やっていました。

4年生の後期には、高専祭、工場見学と連続での大きな行事に盛り上がりました。高専祭では、みんなで1つのことをやり遂げることで、そのためにみんなで頑張ったという達成感を味わうことができました。

工場見学では、色んな企業を見ていく中、就職について働くということについて考えていくきっかけになりました。クラスみんなで行ったUSJもとても楽しめたことを覚えています。自由行動では、中のよい友達と行動を共にして大阪をうろつきました。やはり、仲の良い友達との旅行はとても楽しく、今でも強く思い出に残っています。キャッチに引っかかって1万円飛んだのも今ではいい思い出です。…いい思い出です。

5年生では本格的に就職活動が始まり決まるまでの数カ月は、とにかく不安でした。その分決まった時の喜びや安心感は大きく、面接練習に付き合っていた担任の先生や、相談にのって下さった先生方にはとても感謝しています。

最後に、5年間の中で、担任の先生や情報工学科の先生、一般の先生、そして、クラスの仲間達など様々な人に支えられここまで来ることができました。この場をかりて、お礼をいいたいと思います。

5年間、本当にお世話になりました。迷惑をかけることばかりでしたが、素晴らしい先生方や、素晴らしい仲間達と出会えたおかげで、高専生活がとても楽しく過ごせました。5年間、本当にありがとうございます。

5年間を振り返って

土木工学科5年 白石 貴大

私がこの鹿児島高専を受験したのは、友達に誘われたからです。技術士になりたいとか、数学が得意だとかは全くありませんでした。入学の時に、誘ってくれた友達と一緒にいませんでした。嫌いな数学の授業も多いと知っていた事もあり、その頃はかなり不安で、他の高校に行けば良かったと思っていました。

そんな私が鹿児島高専で5年間過ごせてくれたのは、部活動をしていたからだだと思います。私は中学生の頃からバスケットボールをしていたので、高専に入学してからもバスケットボール部に入りました。鹿児島高専のバスケットボール部は、校則とは違った規則や制度があ

り、体験入部してからやめていく部員も少なくなかったです。

しかし、厳しい制度や規則の中で部に残っている先輩方は、とても尊敬できる人ばかりでした。色々な事を教えてもらい、悪い事をしたら怒ってくれて、引退した後も練習に来て手伝ってくれる先輩もいました。

1年生の頃はそういった先輩達の後を追うので精一杯でした。

2年生になったら、後輩が入ってきました。私は昔から後輩が苦手だったので、どう対応すればいいか分からなかったのですが、とりあえず自分がしてもらった事を思い出して、先輩達の真似をして教えるようにしました。改めて先輩のすごさを実感し、人に教える事の難しさを知りました。

3年生になり、下級生の中では一番上の立場になりました。後輩に教える事には少し慣れてきていましたが、今度は教えるだけでなく、後輩を引っ張っていかなければならなくなりました。この時は、後輩に教えている事を振り返って、自分が出来ていない事を見つけて練習することにしました。自分がやらない事をやれという先輩に人について来ないと思ったからです。人の上に立つ事の難しさを知りました。

4年生、この年が5年間で一番辛かったです。7月に5年生が引退して、ついに部の中で一番上になってしまいました。3年生の時は困ったら、最終的に先輩がいて助かったという時もあったのですが、もうその先輩もなくなってしまいました。一番上が替わるとチームの雰囲気も悪くなり、自分が変な事をすればチーム全体がおかしくなる、という責任を感じるようになりました。責任を持って行動する事の大切さを知りました。

5年生になる頃には、悪かったチームの雰囲気も良くなってきて、なんとかチーム全員が高専大会で勝つ事を目指して練習できるようになっていたと思います。結局試合には負けてしまい、満足は出来なかったのですが、最後まで諦めずに続ける事の素晴らしさが分かりました。

昔の自分は、進路の選択を間違えたと思っていましたが、今、この経験ができた事を考えると、鹿児島高専を選び多方面の研鑽ができ実に良かったと思います。人生何があるか分からないので、何事も諦めず、失敗を成功に変えられるように、後悔のない人生にしたいと思います。

専攻科修了にあたって

機械・電子システム工学専攻2年 今村 駿

私が鹿児島高専に入学してもう7年間が過ぎようとしています。入学当初は専攻科にまで進学する予定はなく、残された5年間の学生生活すら、途方もなく長いと感じていました。しかし、小学校6年間よりも長いはずのこの7年間は毎日がとても充実しており、1日1日が短く、時間が進むのがとても早く感じました。私は、本科時代は機械工学、専攻科に入ってから機械、電子システム工学についての学習を行いました。これらの知識はこれから就職し、社会に出ていくなかで自身の成長に役に立つであろうものばかりであったと思います。と同時に、それ以上にこの7年間で築いた友人たちとの経験や思い出は大きな価値のあるものであると思っています。

中学卒業後すぐに地元から離れ、寮での生活が始まった当初は、俗にいう「中二病」丸出しの精神状態で知らない土地に放り込まれた状態であったため、友人はできる気がせず、先の高専での生活を本気で不安視していました。しかし、半年、1年と時間が過ぎ、2年生の中ごろでは精神年齢の成長もあったためか、友人も増え、「住めば都」のことわざはよくできていると思えるほど高専での生活は楽しく充実したものとなっていました。中学校時代ではクラスが毎年変わるためか、ろくにしゃべりもせず終わってしまう人がいたこともありましたが、高専では、5年間同じ部屋に通い、授業や学校行事に参加することで、また、共に寮での生活を楽しむ中で、全員が仲の良い友人になれました。

また、それは専攻科に入ってからと同じで、学科が違っても、同じく7年間も高専に通った同士であるため、専攻科生同士とても楽しくこの2年間を過ごすことができました。

この7年間でできた友人たちとのつながりは、一生続くものであると思っています。と同時にこの友人たちと過ごした学校での生活、寮での生活、学校行事への取り組み、私生活での馬鹿な所業まですべて含めて、これからの人生の中で大きな糧になると確信しています。

これから社会に出ていく中で、とても大きな不安と、期待があります。「社会に出て今の自分で大丈夫なのか」という考えは、この数年間ずっと頭の片隅に燦々としています。しかし、高専での生活で得られた知識、経験は確実に「自信」へとつながるものであると思います。高専での生活で得られたものを大切に、これから社会人として頑張っていきたいと思っています。

専攻科修了にあたって

電気情報システム工学専攻2年 田ノ元正和

私たちにもいよいよ、この鹿児島高専を巣立つときがやってきました。思い返すと、情報工学科に入学したときから数えて今春で7年もの時間をここで過ごしたことになります。日々をせわしなく過ごしているとなかなか自分の変化を自覚できませんが、専門知識どころか常識すらなかった頃の自分と比較すると随分と成長したものだ実感します。

本科に入学した頃は就職しようと思っていた私ですが、次第に情報工学が面白くなりこの道を究めたいと進学を決意しました。そして卒業後の次の2年間はこの専攻科で学ぼうと考え、無事試験をパスし入学したのがもう2年も前になります。この2年という時間は本当にあっという間でもう修了なのかと驚いていますが、振り返ると多くの出来事がありました。まず、普段の講義はもちろんのこと、長期インターンシップや学会発表といった経験は将来のために役立ったと思います。たまにははめを外すこともあり、夏のキャンプで大雨に見舞われてしまい飲み物がすべて川に流された珍事も忘れられない思い出です。そして何より本科5年から専攻科2年までの3年間で取り組んだ研究では、1年間では到底到達し得なかった成果を上げることができました。さらにこれを通して研究の楽しさを知り、次の進路も大学院への進学を選びました。今後も目標である研究者になることを目指し頑張りたいと思っています。

2年前に就職しすでに社会人となった友人たちの話を聞くと、社会の厳しさが窺えるとともに羨ましく思うこともあります。彼ら、彼女らに私たち専攻科修了生も続きます。何人かの仲間は今この春から社会に飛び出していき、進学する私たちもいずれはその日がやってきます。それぞれがそれぞれの形で社会に貢献するときに、もう近くまで来ています。

私たちがこの鹿児島高専で学んだことは決して無駄にならないと思いますし、今後どんなことがあっても乗り越えていけると確信しています。自らの今後一層の努力をここに誓い、そして共に学んできた仲間全員の健闘を祈って、修了にあたってのむすびとします。

専攻長をつとめて頂いた入江先生、濱川先生や、3年もの間研究指導に当たって頂いた芝先生をはじめ、厳しくも暖かいご指導を賜った鹿児島高専の教職員の方々に心から感謝します。2年間アルバイト先として受け入れてくださった図書情報係長の末吉さんと司書の桑幡さんにもお世話になり、ここに御礼申し上げます。そして楽しい時期もつらい時期も共有し、共に支えあって乗り越

えてきた専攻科の友人達にも感謝したいと思います。最後に、今日まで育ててくれ、進路決定についてもとやかく言わず支持してくれた両親に感謝します。

専攻科修了にあたって

土木工学専攻2年 中野 大樹

私が専攻科に入学してから、もう2年が経とうとしています。入学した当初は、「まだ2年間もある。」と考えていました。しかし、学生生活を通していろいろな経験をしていくうちに、日々1日が早く感じられるようになりました。2年間はあっという間で、もう専攻科修了を目前に控えている時期にいるとは信じられません。こんなに時間が過ぎるのが早く感じられたのも、専攻科で充実した学生生活を送れたからだと思います。

私が専攻科に入学するに至った動機は、「本科で得た知識をさらに深めてから、社会に出たいと考えていた」からです。専攻科では本科と違い専門科目の授業は少数で行われます。このような講義スタイルは、先生にすぐ質問でき、より深い知識を得ることができるため、自分に合っていました。

また、入学当初は、他学科の人と共通科目で同時に講義を受講していくため、人間関係を上手くやるか心配でした。しかし、講義の回数を重ねるごとに他学科の友人も増え、プライベートでも遊ぶようになりました。このことは、毎日の学生生活をより楽しくする要因ともなりました。

更に在学中には、実社会を経験するインターンシップや、それまでの研究結果を公表する学会発表など貴重な経験をさせてもらいました。これらの経験をする中で、時にはつらいこともありましたが、講義などとは異なる達成感を感じたことは今でも鮮明に覚えています。またその際は、先生方に変なお世話になりました。

本科在校生へ、本科で習った知識を深めたい人や、もうちょっと勉強してから社会に出るのも悪くないなあと考えている人、もっと研究活動がしたい人はぜひ専攻科に入学することをお勧めします。

最後に、7年間通った学び舎を後にするのはちょっとさびしい気もしますが、これから私は、技術者として鹿児島高専・専攻科で学んだ知識をフル活用し、社会に貢献していきたいと考えています。これまでの学生生活に関わったすべての人達に感謝し終わりの言葉とします。

卒業生の就職・進学一覧及び修了生の就職進学一覧

<機械工学科>

富士電機株式会社
旭化成株式会社
出光興産株式会社
ダイキン工業株式会社
大阪ガス株式会社
関西電力株式会社
ヤマハ熊本プロダクツ株式会社
千代田工商株式会社
三菱重工業株式会社下関造船所
九州旅客鉄道株式会社
I H I プラント建設株式会社
矢崎総業株式会社
シチズン時計鹿児島株式会社
株式会社M i s u m i
株式会社ジェイテック
株式会社ダイセル
株式会社テクモ
J X 日鉱日石石油基地株式会社
東洋インキ S C ホールディングス株式会社
曙ブレーキ工業株式会社
住友化学株式会社 千葉工場
独立行政法人国立印刷局
(進学) 鹿児島高専専攻科(4名)
(進学) 九州工業大学(5名)
(進学) 熊本大学(3名)
(進学) 長岡技術科学大学
(進学) 鹿児島大学
(進学) 宮崎大学
(進学) 千葉大学
(進学) 西九州大学

<電気電子工学科>

日本特殊陶業株式会社
株式会社東芝 電力システム社
株式会社ダイヘン
三菱化工機株式会社
株式会社引越一番
メタウォーター株式会社(2名)
中部電力株式会社
ヤマハ株式会社
国分電機株式会社
丸善石油化学株式会社
中国電力株式会社
住友化学株式会社
セイコーエプソン株式会社
三菱電機ビルテクノサービス株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
富士重工業株式会社
九州電力株式会社
安川エンジニアリング株式会社(2名)
株式会社ダッド
志布志石油備蓄株式会社
南国殖産株式会社
株式会社NHKアイテック
三菱電機プラントエンジニアリング株式会社
富士電機株式会社
株式会社ネオテック
日本精工株式会社
株式会社リコー
関西電力株式会社
ダイキン工業株式会社
本田技研工業株式会社
(進学) 鹿児島高専専攻科(2名)
(進学) 九州工業大学(3名)
(進学) 熊本大学(2名)
(進学) 豊橋技術科学大学(2名)

卒業生の就職・進学一覧及び修了生の就職進学一覧

<電子制御工学科>

ミヤマ精工株式会社（１名）
日立オートモティブシステムズ株式会社
住友金属鉱山株式会社
株式会社トクヤマ
ミヤマ工業株式会社（２名）
メタウォーター株式会社
朝日工業株式会社
独立行政法人国立印刷局
ダイハツ工業株式会社
雪印メグミルク株式会社（２名）
三菱自動車エンジニアリング株式会社
サントリープロダクツ株式会社
京セラ株式会社国分工場
ダイキン工業株式会社
大阪ガス株式会社
I H I プラント建設株式会社
セイコーエプソン株式会社
株式会社トヨタ車体研究所
東海旅客鉄道株式会社
株式会社渡辺機械製作所
飛鳥電気株式会社
関西電力株式会社
株式会社M i s u m i
株式会社テクノ２１グループ
住友化学株式会社 千葉工場
（進学）鹿児島高専専攻科（７名）
（進学）九州工業大学（２名）
（進学）熊本大学（１名）

<情報工学科>

株式会社ティー・エス・ジー
株式会社N T T ファシリティーズ九州
京セラコミュニケーションシステム株式会社
独立行政法人国立印刷局
関西電力株式会社（１名）
株式会社アルファースシステムズ（３名）
東海旅客鉄道株式会社
株式会社飯塚製作所
株式会社富士通ミッションクリティカルシステムズ
N T T コムソリューション&エンジニアリング株式会社
株式会社M i s u m i
KCCSモバイルエンジニアリング株式会社
株式会社富士通ビー・エス・シー
株式会社エヌ・ティ・ティネオメイト
メタウォーター株式会社（２名）
NECネットエスアイ株式会社
メルコ・パワー・システムズ株式会社
富士電機株式会社
N T T コムテクノロジー株式会社
富士通株式会社
富士電機株式会社
（進学）鹿児島高専専攻科（６名）
（進学）九州工業大学（１名）

卒業生の就職・進学一覧及び修了生の就職進学一覧

<土木工学科>

コーアツ工業株式会社
ライト工業株式会社
鹿児島水処理株式会社
オリエンタル白石株式会社
鹿児島県庁
前田道路株式会社（2名）
日立造船株式会社
五洋建設株式会社
東洋建設株式会社
大阪ガス株式会社（2名）
日特建設株式会社
九鉄工業株式会社
大崎建設株式会社
日鉄パイプライン株式会社
始良市役所
林建設株式会社
九州電力株式会社
小野田ケミコ株式会社
株式会社七呂建設
関西電力株式会社
パソコン技術管理株式会社
電源開発株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
株式会社N I P P O
株式会社富士ピーエス
株式会社横河ブリッジ
（進学）鹿児島高専専攻科（8名）
（進学）九州工業大学（1名）
（進学）長岡技術科学大学（1名）
（進学）熊本大学（1名）
（進学）宮崎大学（1名）

<機械・電子システム工学専攻>

株式会社インダ
旭化成株式会社（2名）
京セラコミュニケーションシステム株式会社
株式会社ニコン
本田技研工業株式会社
TANAKAホールディングス株式会社
株式会社トヨタ車体研究所
株式会社安川電機
（進学）大阪大学大学院
（進学）東京大学大学院
（進学）九州大学大学院（2名）
（進学）九州工業大学大学院

<電気情報システム工学専攻>

富士通株式会社（2名）
安川コントロール株式会社
旭化成株式会社
富士電機株式会社
ハイパーソフト株式会社
（進学）北陸先端科学技術大学院大学
（進学）九州工業大学大学院（4名）
（進学）九州大学大学院
（進学）豊橋技術科学大学大学院
（進学）奈良先端科学技術大学院大学（2名）
（進学）鹿児島大学大学院

<土木工学専攻>

鈴建建設株式会社
株式会社萩原技研
株式会社植村組
三軌建設株式会社
西日本高速道路エンジニアリング九州株式会社
株式会社九建
東京水道サービス株式会社
日特建設株式会社

新任のご挨拶

一般教科文系 林 良平

平成24年4月より鹿児島高専の一般教科に赴任しました。専門は経済学です。3年生以上の政治経済、経済学等の科目を担当します。どうぞよろしくお願いします。

鹿児島に転居してきたのが3月末でした。桜島の噴煙に驚いている暇もなく、4月1日に辞令を受け取ると、そのまま担任を任されました。6日には入学式を迎え、42人の学生とその保護者の前で立ち尽くしていました。先輩の教職員の方々の助けを借りて、なんとか形だけは整えて切り抜けましたが、その後今に至るまで余裕のない生活を続けております。

電子制御工学科の1年生は、どの学生も大変優秀でいつも驚かされます。避難訓練をするといえば、だれもない校庭に、まだ担任も到着していないのに1列に並んで待っています。保護者交流会としてバーベキューを企画しろといえば、自分たちで招待状を送り、球技大会（バレーボール）まで加えて立派にやっつのけます。テスト前には夜遅くまで勉強し、赤点をとると私の研究室に詫言を入れに来るほどです。担任を任された当初、いい加減な私で務まるだろうかと心配していたのですが、優秀な学生たちのおかげでいつも楽をさせてもらっています。

そんな学生たちが、殊更に輝いてみえたのが高専祭でした。教室ではおとなしく、目立たない学生が、応援団の練習に明け暮れて、次第に凛々しい顔つきになっていくのは見ものでした。4年生の先輩も、1年生の名前を覚えてくれた上で、やれ立ち方がなってないだの、やれ型が覚えられていないだのと、熱心に指導してくれました。チームで動くのが不慣れだった学生も、4年生をはじめとした先輩方の熱意にほだされて、投げ出したくても投げ出せない、しんどいけれども楽しいといった高揚した気分を味わっているようでした。高専祭が終わるとクラスの雰囲気も明るくなり、団結が強まったように感じました。

優秀な学生、そして後輩おもしろい先輩、それを邪魔しないように蔭でご尽力されている教職員の方々、保護者の方々。こうした鹿児島高専の構図が少しずつ見えてくるにしたがって、本当によいところに職を得たと、めぐりあわせに感謝している次第です。

私の直近の目標は、自分のクラスの学生をしっかり育て上げていくことです。特に、保護者の方々、教職員の

方々、お世話になっている方々に対して、感謝のできる人間になってもらいたいと考えています。この恵まれた環境で、精一杯勉強させてもらえることを当たり前と思わずに、ありがたいと思える人間になってほしいと思っています。なにぶん若輩者の未熟さゆえにうまくいかないことばかりですが、皆様のお力添えも頂きながら、一生懸命やっていきたいと思っています。どうぞご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

着任のご挨拶

一般教科理系 池田 昭大

平成24年4月1日付で一般教科・講師に着任致しました池田昭大（いけだあきひろ）です。物理を担当させていただきます。本校に着任するまでは九州大学・宙空環境研究センター（現：国際宇宙天気科学・教育センター）の研究員でした。この度、本校での教育に携わる機会をいただき、大変嬉しく思っております。

工業の知識を学ぶ学生の皆さんには、物理は必要不可欠な学問です。物理や化学など自然科学は工業の根底にあり、自然科学の発展と工業の発展は結びついています。これから技術者を目指し、新しい時代を切り開く学生の皆さんが、物理的知見を身に付けられるよう努力したいと思います。

私が専門とする研究分野は地球物理学です。その中でも特に、地球周辺の宇宙環境を研究しています。地球周辺の宇宙とは、国際宇宙ステーションが飛翔する高度400km程度の宇宙から、地球の半径（6千4百km）の10倍以上まで広がる地球の磁力線に囲まれたプラズマの領域です。これらの領域は、地球から1億5千万km離れた太陽から吹き付ける太陽風の影響を受け、その環境は刻々と変動し、オーロラをはじめとする様々な電磁氣的現象が引き起こされています。このように複雑な変化を見せる宇宙も、物理法則に従ってその様相を変化させています。自らの研究を続け、未知なる宇宙の変化の中に、物理法則で説明できる事象を発見できる事にはとても大きな感動があります。高校時代は物理が苦手でしたが、宇宙環境の研究を通して物理と向き合っていくうちに、宇宙だけではなく、物理の魅力も実感することができました。本校での授業においても、学生の皆さんに物理を教えるだけではなく、その魅力も伝えられるよう努力した

いと思います。

また、私の研究では、地上から宇宙環境を調査する観測器の設置を世界中でおこなっていました。海外での観測器設置作業では、現地の方々とコミュニケーションをとり、協力して作業を進めてきました。こうした中で、海外の文化に触れる機会がたくさんあり、とても素晴らしい経験をすることができました。本校の学習・教育目標である「グローバルに活躍する技術者」を育成するためにも、私が培ってきた経験を活かし、学生の皆さんが世界に目を向けられるよう教育に励みたいと思います。また、授業以外でも、学生の皆さんとの対話を通して、ともに成長していきたいと思っています。よろしくお願い申し上げます。

着任挨拶

一般教育科理系 堂園 一

2012年4月1日より一般教育科理系の保健体育の教員に着任した堂園一（どうぞのはじめ）です。私は、鹿児島市で生まれ、高校卒業まで鹿児島市で育ちました。高校卒業後は広島大学に進学、卒業後は鹿児島県の総合商社で2年間、NPO法人で1年間勤務し、筑波大学大学院に進学し、今に至ります。縁あって故郷の鹿児島で、教育・研究に携われる事を大変嬉しく思っています。

大学では中小企業の経営戦略研究、大学院ではスポーツマネジメントを専攻し、主にトップスポーツクラブ、地域スポーツクラブの経営についての研究を行いました。また、大学院在籍中はスポーツ団体にも所属し、トップスポーツクラブの経営コンサルタント事業のマネジャーを任せていただき、トップスポーツクラブのサポート・アドバイスを行なっておりました。トップスポーツクラブの運営、地域スポーツクラブの運営のノウハウ、事例紹介が可能かと考えておりますので、ご相談の際は研究室までお越しください。

本校に着任して半年が経ちましたが、隼人・国分での生活、授業や研究、部活動の顧問としての仕事や寮の仕事などにも少しずつ慣れてきました。この半年で感嘆していることがあります。それは、学生の皆さんが積極的に挨拶をしてくれることです。すれ違う度に、積極的に挨拶を交わすことができ、非常に清々しい気持ちで毎日過ごせています。特にサッカー部の部員は素晴らしく、

数十メートル離れた場所でも明瞭に聞き取れる挨拶をしてくれます。当たり前のようなことかも知れませんが、コミュニケーションが希薄になっていると言われていた現代で、しっかり挨拶ができていることが素晴らしく、1年生から5年生までしっかり挨拶をする良い伝統ができていると感じました。

保健体育におきましては、技術者として長く働き、社会に貢献するための体力の育成・健康に必要な知識の伝授はもちろんのこと、授業の中のゲームなどのスポーツ活動を通じて、公平・尊敬の精神、規律を守ることや挨拶などの社会で生きていく為に必要な要素を身につけてもらえる授業を展開し、これまで先輩方々が作って来られた良い伝統を継続して行けるような教育を行っていきたいと考えております。

最後に、鹿児島高専への社会の期待は大きいと私は考えております。学生の皆さんが世界を支える技術者になれるように、私自身も夢をもって成長の努力を続けていきたいと思っていますので、宜しくお願い致します。

鹿児島高専での一年を振り返って

機械工学科 高橋 明宏

高橋と申します。この一年間、3年機械の担任を仰せつかりました。「高専・両技科大間教員交流制度」を利用し、都城高専機械工学科から一年間こちらにお世話になりました。これまでの担任業務、および授業等を過大なく実施できましたのは、鹿児島高専赤坂校長、教職員と保護者の皆様、そして何よりも南金山教授をはじめ機械工学科の諸先生方の深甚なるご支援とご協力のおかげであり、紙面をお借りしまして心より御礼申し上げます。

この一年を振り返ったとき、鹿児島高専の学生達から話を始めなければいけません。それほど強い印象を持っております。3年機械のクラス学生を中心に述べますが、その印象というのが、「よく笑う」、「よく食べる」、「やる時にはやる」というものです。17、18歳の陽気なアニマル軍団だと称すれば、私の描くイメージがストレートに伝わるかと思います。とはいえ、実社会の競争原理の中に突然放り込まれたとき、彼らの底抜けの明るさ、元気さ、旺盛さが、彼ら自身のためにいかになく発揮され、いずれは周辺の方々を助ける存在になる

と信じています。大手メーカーがこぞって鹿児島高専に足を向ける理由がわかりました。3年機械の学生に限らず、鹿児島高専の学生達の将来は有望であります。多様な学生達のおかげで、私は教員としての力を伸ばすことができたと思っております。

楽しみといえば、体育祭も心待ちにしていた行事のひとつでした。多くの先生方から、体育祭のやぐら絵と応援団は一見の価値がありますと聞いておりました。体育祭当日は早朝から立派なやぐら絵が張り付けられ、午後からの応援演舞が始まると一糸乱れぬ群舞の見事さに時間を忘れて見入っていました。感動的な情景がまぶたの奥に残っております。やり切ったことへの達成感、演舞を終えた学生の純粋な涙や抱き合う姿が今でも浮かび上がってきます。すばらしい演舞への拍手やエールもありました。学生達の団結力と純朴さを理解できたような気がいたします。



体育祭当日の3M教室にて

驚いたことといえば、新学期の最初にほとんどの学生が制服あるいはスーツで身を固め、朝の集会、教室でのホームルーム、そして写真撮影にのぞむ姿です。新入生はいざしらず、高学年生がピシヤッとした様相になっていると、いかにも学校全体が真摯に引き締まった雰囲気形成します。大変すばらしい良い伝統だと思います。

もう一つ驚いたことがあります。私の故郷の四国、大学生として過ごした愛知、それから会社があった栃木と比べ、鹿児島は何か違います。それは利害を問わない潔さを兼備する圧倒的な「地域の力」でした。寮の宿直をしておりますと、学外の方々から学生の財布や学生証を拾ったとお電話をいただくことが何度かあり、地元の高専を大切に思ってくれていることを感じました。大変うらやましく思います。（学生諸君にお願いです。隼人町の皆様にご迷惑をかけることがあってはならないのです。）

さて、当原稿を作成している12月末は、4月から数えて9ヶ月目になります。クラス担任を行って、教務活動や課外活動全般に関わり、一人の教員として、誠に再認識できた事は「百聞は一見にしかず」という事です。私の眼に映ったのは、私の想像とはまったく異なる鹿児島高専の姿でした。教員交流制度で得たメリットのひとつと捉えております。とりわけ、部活動の活発さと地道に且つ精力的に取り組んでいる顧問・コーチの皆様には平服いたします。「高校総体不要論」・「運動部活動撤退論」を出す高専は、是非鹿児島高専を見習っていただきたいと思います。その点、大変申し訳ないと思うのは、その部活動の事です。電気電子工学科の須田教授を中心とした「柔道部」の顧問になりましたが、何ひとつご協力できませんでした。柔道部員からゆずってもらったTシャツに、「体でもなく、技でもない。まずは心」という文字があります。今、痛感して心に響いています。

もう一つ申し訳ないと思うのは卒業研究です。5年生4名が配属になりました。準備の整っていない環境の中で、持ち味のチームワークで粘り強く研究を進めてくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。珍道中だったタイでの国際会議はなかなかの良い思い出であります。

最後になりますが、鹿児島高専には昭和50年代生まれで勢いのある教職員の皆様が多いと思います。その中でも、ご縁があつて共に鹿児島高専に赴任した、池田昭先生、林先生、堂園先生、節政さんを皆様どうかよろしくお願い申し上げます。皆さん大変優秀です。そして、あと一年間の交流期間を残されている瀬濤（せとう）先生には、良い経験をされて無事に弓削商船高専に戻られることを願っております。

以上、雑多に振り返っての駄文をどうかお許し下さい。皆様のご健康とご活躍を都城からお祈りしております。一年間、ありがとうございました。

新任挨拶

電気電子工学科 瀬濤 喜信

はじめまして。4月から教員交流で弓削商船高等専門学校から参りました瀬濤（せとう）です。鹿児島高専には2年間在籍する予定です。どうぞよろしくお願いします。

弓削商船では13年間勤務してきました。ほとんどの方が弓削商船と聞いてもどこにあるどんな学校かわからないと思いますので少しだけ弓削商船についてお話しします。弓削商船は愛媛県と広島県の県境にある瀬戸内海の小さな島、弓削島にあります。弓削商船と聞くと船の学校と思われがちですが商船学科だけではなく情報工学科と電子機械工学科もあります。

鹿児島にきて最初にびっくりしたことは桜島の爆発です。ニュースで聞いてはいましたが身近で火山が毎日のように爆発していることに驚きました。頻繁に爆発するので7月頃には慣れていたのですが、それでも7月24日に南岳山頂火口が爆発したときは迫ってくる噴煙を見て思わず避難しようかと思ったぐらいでした。今では桜島の爆発も桜島は今日も元気だなあと思うぐらいになっています。

鹿児島高専での初めての授業は電気電子工学科の3年生でした。みんな真面目で私語もなく一生懸命に耳を傾けてくれる姿に驚きました。4月頃はお互い少し緊張気味だったことを思い出します。今では緊張も少しは解けて授業中にわかりにくいところがあると、すぐにわかりませんと言ってくれるので助かっています。

課外活動では、弓削商船でテニス部とロボット製作部の顧問をしていたこともあり、鹿児島高専でもテニス部とメカトロニクス研究部の顧問の仲間入りをさせてもらいました。どちらの部も素晴らしい成績を残しており、いろんなことを学びたいと思っています。今年度は新しい環境のなか日々の業務に追われ、なかなか部活動に参加できませんでした。来年度こそは学生と一緒にいろんなことができるように頑張りたいと思います。

電気電子工学科では学科長やまわりの先生方にサポートしていただいたり、わからないことを教えていただいたりしてとても感謝しています。また技術室の方たちには専門的な技術サポートやパーツの加工だけでなく、いろいろな相談にも乗っていただいてとても感謝しています。温かい人たちに囲まれて鹿児島高専に来てよかったなあと思う毎日です。まだまだ未熟な点も多いと思いますが残りの期間、精一杯頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

新任挨拶

総務課長補佐財務担当 宇都山清孝

鹿児島高専に赴任して、はや6ヶ月が過ぎました。

最近、最初の戸惑いも少しずつ消え、通勤にも慣れどうにか自分なりのペースで学校生活を送っています。毎日列車で通勤していますが、当初、有効に使うつもりだった通勤時間は、意外と混んだ車内、早起き、遅寝の毎日に、次第に眠りこける時間となっていました。

今回、赴任するまでの「高専」についての認識は、文科省関連県内4機関の一つであることと、ロボコンで優秀な成績を収めている学校であるといったことぐらいでした。実際の雰囲気はというと、自分が以前抱いていた男子だけの堅いイメージの学校とはだいぶ異なり、明るく、快活な雰囲気に包まれていました。そこで、私も潜在能力を持った学生さんに自由な雰囲気のなかで充実した学校生活を送ってもらえるよう可能な支援をしなければと思うことでした。

ところで、本校に赴任する前の私の勤務先は鹿児島大学の附属病院で、診療を支援する事務が主な仕事でした。病院の中では、問題等が多々発生し、事務量も多く多忙な毎日を送っておりました。

そのうちの3年間（10年程前）を鹿児島大学の霧島リハビリセンターで過ごしました。単身赴任しておりましたので週末には、冬ごもり前の熊みたいに”山の上”から国分近辺に降りてきては、街の賑わいや活気に触れてその余韻に浸りつつ、後ろ髪を引かれる思いで、保存食料等を確保し帰路についていました。たまの飲み会が国分で催されることもありましたので、国分と帰省の際の通過点である隼人はいくらか知っているつもりでしたが、高専の場所までは知りませんでした。そのため、最初、本校に訪問したときは、道に迷い軽トラのおじさんに、正門前まで先導して貰い、どうにか行き着くことが出来ました。

それでも「隼人」は、良泉もあり、見慣れた土地ですので、余裕があれば新たな発見を求め歩こうかと思っていたところ、赴任直前に自分の名字と同じ「宇都山」という地名があることを知り、先日、その場所に関する情報も得ました。探索の楽しみが増えたわけですが、まだたっぷり時間があるのでそのうちと思っているためか、未だ実現していません。「近いうち」に……。

最後に、上司からも言われていることですが、この高専でこれをやった、と回顧出来るような仕事をしたいと思っています。乗り過ごさないようにと緊張しながらの

毎日ですが、職務においても緊張感を持って臨みたいと思います。皆様、これからのお付き合いよろしくお願いいたします。

新任挨拶

総務課総務係員 吉崎 陽香

平成24年7月1日付けで鹿児島大学から赴任して参りました吉崎陽香（よしざきはるか）と申します。

赴任してからあっという間に半年が経とうとしています。大学に勤務して初めての異動が高専だったので、仕事の内容も環境もガラッと変わり、戸惑うことばかりですが、みなさんに助けていただきながら徐々に慣れてきているところです。

以前は学生系の仕事だったので、毎日のように学生さんと接していたのですが、今はその機会がほとんどなくなってしまい少し寂しく思うこともありました。ですが、部活生のかけ声や高専祭の応援団の練習など、大学とはまた違った学生さんの活力を感じながら毎日過ごすことができます。

高専に来て驚いたのは敷地が広いということです。まだ配置図を見ながらでないと出かけられないので、隅から隅まで散策してみようと思います。また、せっかく隼人まで来ているので、学校周辺はもちろん霧島市内にも詳しくなりたいです。

平成25年度、鹿児島高専は創立50周年という節目を迎えます。総務係としての仕事は想像もつきませんが、記念すべき瞬間に立ち会えることを光栄に思いつつ、協力しながら頑張りたいと思います。

高専でたくさんのことを学び、成長できるよう努めて参りますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

新任挨拶

総務課人事係長 川路 晃弘

平成24年7月1日付けで、鹿児島大学総務部人事課任用・審査係から総務課人事係に赴任しました川路晃弘と申します。

民間企業等経験者採用試験にて採用され、5年6月が経ちました。これまで、主に採用活動や人事労務の実務を担当してきました。社会人になり異動や転勤は8回目ですが、そのたびに多くの方々と出会い、いろんな考え方を知ることができることを嬉しく思います。それと同時に、異動発令は、職員の生活スタイルを変え、人事担当として重要なことであることを再認識させられる瞬間でもあります。採用から退職後まで、いろいろと担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

着任後半年が経過しましたが、だんだん通勤に慣れ、教職員の方々の氏名と顔が一致してきたところです。また、私自身も工学部出身ということもあり、先生方の会話や会議資料などで、学生時代に聞き慣れた専門用語にふれると懐かしく思います。

配属されました人事係は、教職員の方々の個人的な手続きから、勤務する上での必要な手続き等、多岐に渡り、みなさまにご協力をお願いすることが多い部門です。特に、教員の方々には、事務職員として、手続等の遺漏なく、適切な連絡・アドバイスができるように、考えながら業務を行って参ります。また、人事係の担当する「より良い職場環境づくり」は、教職員のみなさまの働きやすさに大切なことだと思っています。より良い職場環境づくりを考えると、教職員自身に気をつけていただくことに「健康であること」があります。良い「仕事」をするためには、健康な身体と健全な精神が大切です。長い人生において、働く時間がすべてではありません。家族や気の合う友人と過ごす時間は何者にも代えがたいものです。「自分自身の身体と心の健康に留意する。」当たり前のことですが、これもまた職員として採用された以上、求められていることだと思います。これらについて、人事係は、サポートしていく役割を担っています。より良く、相談等に応じれるよう配慮して参ります。

最後に、国立大学法人等の事務については、未だ勉強中ですが、鹿児島高専の発展と教職員のみなさまのご期待に添うよう努力いたします所存です。

前任者同様、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

新任挨拶

総務課用度係員 節政 徹也

平成24年4月1日付で採用されまして、総務課用度係で勤務しております、節政（せつまさ）と申します。

この原稿を書きながら、就いたばかりの頃何をすればいいのかわからず硬直していたのを思い出し、あれからもう半年がたったのかと自分のことながら感慨深く感じているところです。この学校に来るまで高専を見たことがなかったのですが、高校とも大学とも違った独特の雰囲気だととてもいい場所だと思いました。どこが良かったかというと、まず寮食が美味しいところです。お代わり自由で毎日違ったメニューが出るので、好き嫌いがほとんどない私は「今日は何だろう？」とお昼をいつも楽しみに待っています。また、学生さんたちが校内で会った時よく挨拶をしてくれるのにも驚きました。他にも、事務員の仕事を積極的に手伝ってくれたりなどいつも感心しながら見えています。

私は出身はいちき串木野市なのですが、昨年3月まで静岡県の大学に通っておりました。専攻していたのは数理論理学（数学基礎論）という分野になります。事務職に就くと決まった時は数学なんて活かさないだろうと思っていたのですが、実際に仕事を始めてみると意外と役に立つことも少なくなく、卒業した今になって数学も悪くないなと思い直したりもしています。

私のいる用度係は先生方や業者の方と接する機会も多く、日々楽しみながら仕事をしています。また部活動にも時間を見つけて参加できればと思っています。

これから長い間鹿児島高専にお世話になることになります。この学校の発展に少しでもお役にたてるよう精進していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

鹿児島大学での2年間

学生課教務係員 江川 香

みなさま、お久しぶりです。

鹿児島大学での2年の人事交流を終えて、平成24年7月1日付けで鹿児島高専へ戻って参りました。

出向する前にありました教務係で再び勤務しております。

す。月日は確実に2年流れていてその変化に内心毎日戸惑っています。しかしながら慣れ親しんだ環境で皆様と働けることを大変嬉しく思っております。

鹿児島大学では水産学部におりました。少しご紹介しますと、水産学部は大学の本部がある郡元から少し離れた下荒田にあります。ご存知かとは思いますが、下荒田キャンパスは海に面していません。鴨池海づり公園横に研究施設がある他、練習船「かごしま丸」は谷山港に、「南星丸」は本港に係留されています。また長島町にも臨海施設があります。キャンパスの広さは鹿児島高専の約3分の1、学部・研究科あわせた学生数は約700名ですので、高専よりもこじんまりとした印象で、実際、大学生特有の賑やかさとはほぼ無縁の、静かな環境でした。

突然の赴任、慣れない環境・業務での苦労も多かったのですが、大学での2年間は高専では出来ないとても貴重な経験ばかりで、出向させて頂いたことに大変感謝しています。業務においても、また、日常気付くちょっとしたことにおいても、大学と高専では異なることが意外に多々あり、とても興味深いものでした。また、高専では学生系の業務をしておりましたが大学では総務・人事系の業務でしたので、これまでとは違った視点から業務や職場を見ることが出来、自分の見識の幅を広げることが出来たと感じています。大学で経験させて頂いたことを無駄にせず、学生がさらによりよい学生生活を送れるよう、また高専のさらなる発展のために活かしていきたいと思っています。

ここで突然ですが、高専を離れていた間の私事について少しお話しします。これといった趣味特技がないことを改善するべくクラシックピアノを習い始めました。しかし、この半年はほぼ休止状態です。演奏を披露出来るレベルになりたいという秘かな野望を持っています。また、23年10月には無事に生誕30周年を迎えることが出来ました。それが原因かどうかは不明ですが、車の運転技術が向上しドライブ好きになり、さらにビール党からハイボール派になりました。ウイスキーを買って家でも飲んでいるのですが、飲むとドライブもピアノの練習も出来ないため、めっきり飲む回数は減りました。今後は部活動が盛んな高専に倣い、何かスポーツを始めてみようと考えています。

こんな私ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

退職のご挨拶

機械工学科 池田 英幸

「光陰矢の如し」、「歳月人を待たず」などと言いますが、それを実感しています。本校に採用されて早くも36年になりました。昭和52年の3月に採用面接のため郷里の北九州から列車で鹿児島駅に降り、隼人行きの列車に乗り換えました。鹿児島はその時が初めてで、桜島を見て感激しました。噴煙が上がっていたか否かは覚えていません。噴煙が上がると、観光客にとっては印象深いものですが、その火山灰が降り、地元に住んでいる人々が迷惑を被ることになることを、後に痛感しました。

隼人駅前、現在とあまり変わりませんが、マンションなどの高層物はなく、落ち着いた街並みでした。昔と大きく変わった場所は見次の交差点の付近です。当時は田んぼや畑ばかりだったと記憶しています。

本校の当時（昭和50年代）と現在の違いについて、以下記憶をたどりつつ述べます。本校の歴史は50年史に記載されております。私の記憶と食い違う点もあるかと思いますがご了承ください。

当時、本校には、機械工学科2クラス、電気工学科、土木工学科の3学科4クラスで、専攻科は無論ありませんでした。機械工学科は1組、2組があり、3年生でクラスの再編成が行われていました。そのため3年生のクラスのまとまりがなく、クラス全体の一体感ができるのは、体育祭前後からでした。

電卓も高価で学生が使用できる状況ではなく、計算は「計算尺」を使用しており、その使用法についての授業もありました。成績処理は教務係の方がそろばんを使っていたと記憶しています。その後、本校に設置されている計算機を、電気科の先生がプログラムを作り、成績処理に利用できるようになりました。当時の計算機の能力は非常に低いもので、かつ共同利用のため、個人が占有して使用できませんでした。その後、おもちゃのようなマイクロコンピュータが出て、急速に進歩し、現在の高機能のパソコンに至っています。また、ワープロもなく、正式の文書は和文タイプで作成し、通常は手書きでした。卒業論文も手書きで、発表会では「スライド」を使用していました。スライドとは、図表をアナログカメラで撮影し、それを暗室で現像後、ポジフィルムに焼き付けをして作成するもので、大変な手間と時間がかかっていました。その後、透明シートに手書きやコピーして投影する方法（OHP）が広まり、スライドは姿を消しました。

昔と大きく違うものは、インターネットでしょう。本校では情報工学科の先生がいち早くインターネットで「ホームページ」が見られるようにして下さいました。その当時は、文字だけのメールが一般的でしたので、文字に加えて画像が見られるのは、画期的でした。

思い出を書き綴っていましたが、制限字数を越えてしまいました。この36年間、本校で務めることができましたのは、現職および退職された教職員、学生の皆さんやその保護者の方々のご支援の賜物と感謝しております。今後、さらに本校が発展することを祈って、退職の挨拶といたします。

P. S. 退職いたしますが、再雇用で2年間はお世話になりますので、今後共よろしく願いいたします。

退職に当たって

電気電子工学科 加治屋徹実

再雇用の2年間を含めて41年間、そして学生時代の5年間を加えると計46年間もの長い間、この鹿児島高専にお世話になりました。この間、よき学生諸君とよき先輩・同僚諸氏に恵まれて、本当に楽しく仕事をすることができました。自分が教育という重要な職責に携わることができたことに満足感を覚えると同時に、恵まれた人生を歩ませていただいたと深く感謝する次第です。

私は1972年4月に、恩師である芝長義先生の薦めがあって、電気工学科の助手に採用されました。芝先生は本学科草創期の最大功労者ですが、本当に面倒見のよい先生でした。それ故に、多くの卒業生からいつまでも慕われ、尊敬される存在であります。私もその恩師の教育姿勢を見習い、少しでもそのレベルに近づこうと頑張って参りました。能力不足や努力不足もあって、恩師のレベルまでは到達できませんでしたが、教え子でありまた後輩でもある学生諸君に対しては、精一杯の愛情を注いできたかと自負しています。特にクラス担任として、知識や経験が乏しいままに受け持った最初の14期生から、過去の経験を十分に生かすことができた最後の41期生まで、通算15年間も深く学生に接する機会を持つことができました。毎回、いろいろな失敗や苦勞もありましたが、卒業してからも元気な顔を見せたり電話をくれるので、つくづく担任をして良かったなと思います。

本校は創立50周年を迎える年になりましたが、学校を

取り囲む社会環境も学生の気質も変化して来ました。特に独法化以降、全ての教職員が非常に多忙になり、じつくりと学生に目を向ける時間が少なくなったように感じます。世界の中での日本の評価は下がっていますが、大戦後、日本が世界のトップレベルに成長できたのは、高い教育によって人材育成がなされたからです。今は雌伏の時として、再びその存在を世界に認めてもらう日本になるためには、充実した教育を続けなければなりません。これからも全教職員と全学生が力を合わせて、すばらしい人材育成に努めていただきたいと思います。

退職後は、8年間続けてきた野菜作りで健康と体力を維持するとともに、最近始めた韓国語の勉強で頭の老化防止に努めたいと考えています。さらに、何か世の役にたつボランティア活動を見つけて、少しでも恩返しができればいいと思っています。

最後になりましたが、母校の益々のご発展と学生諸君及び教職員の皆様のご多幸とご活躍をお祈りいたします。

退職にあたり

電気電子工学科 本部 光幸

学校卒業後33年間の企業生活に別れを告げ、平成15年4月本校に赴任して以来、再雇用時代を含め早や10年が過ぎようとしています。鹿児島・隼人の地に参り、まず思ったのは「せっかく鹿児島に来たのだから、鹿児島弁（さつまことば）を少しでも覚え、使ってみたい」ということでした。隼人の図書館に行き、鹿児島弁に関する書物を数冊借り受け、ページをめくり、いざと意気込んだのをありありと覚えています。あまりの難しさに、自分は薩摩では「外国人、異邦人、いやエイリアン」と、あっさり投げ出してしまいました。が、しかし、このままでは情けないと発奮、1年半前から「さつま狂句」に挑戦しています。ほんの少しですが、鹿児島弁を使えるようになりました。東日本大地震、原発事故を踏まえ、駄作を1句。

「^{おと}恐ろしか ^{ぶえん}鮮魚にも出っ ^で放射能」

今、「教育とは」と問い返しています。読んで字のごとく「おしえそでてること」と辞書にはありました。「何を、何のために、どのように、どういう気持・態度で、教え育てるのか?」、全てに明確な答えを見いだせ

ないままに退職を迎えようとしています。一つ言えることは、本校の学習・教育目標に「相手の立場に立って」という言葉があります。教員にとって最も大切な相手は学生であるはずと思っています。「学生の立場、それも一人一人の学生の立場に立って、教え育ててきた」との自信は正直言っておりません。ただ、「そうすることが将来その学生のためになる、なるのでは」という気持ちで対応してきたつもり。「甘くなり過ぎたのでは?」、「もっと厳しくすべきではなかったのか?」と、自問自答の繰り返しでした。

短い期間ではありましたが、教員という職に就くことができ、企業では味わうことのできなかった、かけがえのない貴重な経験を積むことができました。講義や実験、実習を通して、学生さんから「目から鱗」といえるようなことも学びました。「学び」は一生、今後は理系ではなく、異分野に当たる日本史や古典文学といった文系を「学び」たいと思っています。

改めまして、鹿児島高専学生の皆さん、そして教職員の方々に厚くお礼申し上げます。10年間、どうもありがとうございました。

社長と従業員はどちらが長生きするでしょうか?

電子制御工学科 河野 良弘

社長と従業員はどちらが長生きするのでしょうか? コロンビア大学シーナ・アイエンガー著（櫻井祐子訳）の「選択の科学」によれば、答えは社長である。その中で、“自己決定権において選択の自由度に対する認識が、健康に大きな影響を及ぼす”とのイギリスの調査結果が示されている。すなわち、選択の自由度に対する認識が大きい方が、そうでない方と比較して、冠動脈性心臓病で死亡する確率は、1/3に減少するそうだ。企業の最高経営者にとって、会社の利益責任を負うことは確かに大きなストレスになるが、それよりも選択の自由度がほとんどない従業員の方が、ずっとストレスの度合いが強くなるからだそうだ。

ストレスを少なくするには、従業員に自己決定権を持たせて、選択の自由度を高めてやればいいことになる。しかしながら、従業員の持っている様々な文化差を不用意に侵害しないような配慮が必要とのことである。以下

は、ある企業が従来型の流れ作業方式をやめて、従業員を少人数のチームに編成したセル生産方式を導入した際の事例である。チームでは一人一人の従業員が、管理者に仕事を指図されるのではなく、自主的に製造目標を設定し、達成する責任が与えられた。その結果従業員の満足度は高まり、製品は品質、数量ともに記録を塗り替えた。ここでの従業員は主にアングロ系アメリカ人で、自分の意見を表明できる自主管理方式を歓迎した。ところが、この新しい自主管理方式を従業員の多くがカンボジアやラオスからの移民である工場に導入したら、“上司が管理するという自分の仕事を、なぜ部下に押しつけるのだろう”と、まるで仕事を丸投げされたように困惑してしまった。そこで、この工場では仕事仲間の形式張らない打ち合わせを通じて、従業員を意見交換に慣れさせて、従業員が文化的に受け入れられる形で、時間をかけてこの自主管理方式を導入する方法を見つけたそうである。

これらの話は人の生き方にもかかっている。個々の性格にもよると思われるが、上意下達の流れ作業方式より自己選択権をもたせたセル方式が、組織を活性化させることになる。丸投げされたのではなく、自己決定権における選択の自由度が高まったことを認識して、自立的精神で物事に取組み、健康で文化的な生活を送る方が賢明である。

私は65年間生きてきました。生きるということは壮大な人生ドラマの創作活動であるといわれます。市来中学校を卒業して、昭和38年4月鹿児島高専の一期生として入学し、多くの恩師、友人、後輩との邂逅を得て、昭和43年3月に卒業しました。卒業と同時に教官（助手）となり、また新たな同僚や学生達との出会いを得て、平成23年3月に定年退職しました。再雇用制度を活用し、平成25年3月に45年間の教員生活が終わりを迎えることとなりました。隼人の地に50年間生活し、私の人生ドラマは多くの出演者によって、楽しく有意義な半生となりました。私の人生ドラマに無償で出演していただいた方々に、心から感謝とお礼を申し上げます。

これからも鹿児島高専の伝統である自由な学園が、さわやかな風の吹く活性化された学園であり続けることを祈念し、最後のご挨拶といたします。

退職のご挨拶

情報工学科 加治佐清光

この度、平成25年3月末をもちまして定年退職を迎えることになりました。平成13年4月に赴任し、12年間、鹿児島高専で仕事をさせていただきました。その間、担当科目の授業の他、3年担任2回、4年・5年担任、専攻科の専攻長2年、情報工学科の学科長2年を2回の計10年分が自分にとっては大きな仕事でした。

それから、専攻科の設置1年後に赴任しましたが、赴任1年後に専攻科棟ができ上がり、その3階実験室内の教員室に11年いたことになります。そこで卒業研究やこれまで計12名の専攻科生の特別研究を担当したことが今となってはなつかしい思い出です。

退職はこれで3回目です。主に20歳代、30歳代に14年間働いた日本IBMは鹿児島で1級建築士をしていた兄の急逝を契機に故郷に帰りたいために退職し、主に40歳代に13年間働いた当時の労働省所管雇用能力開発機構の川内職業能力開発短期大学校と転勤先の九州職業能力開発大学校（北九州市）は、結局、鹿児島に帰りたいために退職しました。いずれも自己都合の退職でしたが、主に50歳代の仕事をさせていただいた鹿児島高専を今回、円満退職できることには感謝しております。

地元の大学院を24歳で出て、高専定年の63歳まで39年間働いたことになります。技術者、研究員、教育者としての職業人生を通じて、一番の思い出（できごと）は、学生時代にあこがれたコンピュータ企業IBMの米国IBM研究所で1年半、英国IBM研究所で1年間、まだ研究員ではなく20歳代後半の若い技術者として新製品の開発研究にたずさわったことでした。そして、それがきっかけで、技術者→研究員→教育者の道をたどった職業人生となりました。

鹿児島高専では、各種委員会や日々の業務などを通じて、先生方や事務職員の方々にはお世話になりました。おかげさまで、念願だった故郷での後進の育成と研究にたずさわることができました。

最後に、鹿児島高専のますますの発展を祈念して、退職のご挨拶とさせていただきます。



退職のご挨拶

都市環境デザイン工学科 岡林 巧

小職が授業以外に「教職員・学生・後援会・同窓会等の皆様と共に取組ませて頂きました」近年の本校の主な出来事について、感謝をもって追懐させていただきます。

□平成20・21年度大学改革推進事業 質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）採択事業「技術士会と連携した新たな実践的技術者教育」が文部科学省採択となり、全校取り組みとしてスタートし今日継続実施されています。

□平成21年度から、数年にわたって行われてきた週1回の校内一斉清掃を学生委員会で慎重に審議改善し、各クラスでの教室・廊下清掃を中心とした校内美化活動を学生会と展開することになりました。「技術者に必要な品格」向上のために、基本方針として、「①問題点を収集・分析する。②問題解決の手段を明らかにする。③問題解決をする。④問題解決のプロセスを定着させる。」の手順により、学生の育成援助に取り組ませて頂きました。

□平成21年度に新型インフルエンザが流行し、その予防と校内への拡大防止の対策が講じられました。同年度本校開催校の第44回全国高専体育大会ソフトテニス競技は、幸い新型インフルエンザ感染者が一人も発生せず無事終了いたしました。

□平成21年度小雨の降り頻る中、サッカー部員・体育系部員・文化系部員・学生会・教職員および保護者等を中心に「学校美化」の一環として約3万本の天然芝を第2グラウンドに植えることができました。これは、当時サッカー部代表顧問の山崎教授が九州サッカー協会会長をされておられたご縁と特段なご配慮により実現したものです。現在は、ご存知のように緑豊かな整備された天然芝のグラウンドとして授業やクラブ活動は元より地域住民のスポーツ振興に一役を担う本校の財産となっています。

□平成22年度、第47回九州沖縄地区高専体育大会は、本校が主管校として、5競技を担当することになっていましたが、5月宮崎県で発生した口蹄疫感染地域が拡大し、鹿児島県においても「準非常事態宣言」が6月に発せられ、各種イベント開催が不可能となりました。本校担当の5競技は、会場を他県に全て移して主管校として開催することで不測の事態に対処することができました。

此のように、本校において38年間教鞭を執らせて頂き、63歳の定年退職を迎えることができましたのは、本校教職員をはじめ、後援会、同窓会の方々や学生からの暖かい励ましのお蔭であります。ここに心から感謝申し

上げます。

最後に、鹿児島高専の益々の発展と皆様のご多幸とご健勝を祈念いたしまして退職のご挨拶とさせていただきます。



平成23年度永年勤続表彰 (退職時) について

永年勤続表彰は、退職の日において、在職期間が30年以上の方を表彰するものです。平成23年度永年勤続表彰式については、平成24年3月30日（金）に校長室で行われました。表彰者は次の2名の方でした。

所 属	氏 名
一般教育科理系	赤 澤 正 治 教 授
情 報 工 学 科	榎 園 茂 教 授

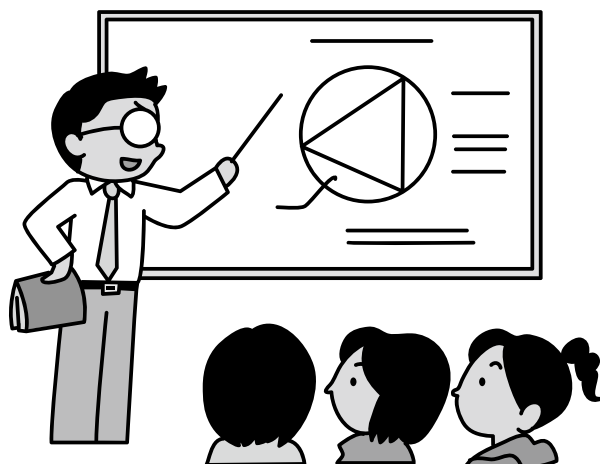


平成24年度教育功労者表彰 について

この教育功労者は、本校の教育、学校運営及び社会貢献に関して、特に顕著な功績を挙げた方を表彰するものです。

教育功労者選考委員会委員及び各学科等の長から推薦のあった方について、平成24年9月3日（月）に教育功労者選考委員会を開催し、選考の結果、一般教育科理系北 菌 裕一准教授が平成24年度教育功労者に決定しました。この表彰式が、平成24年10月16日（火）に校長室で行われ、表彰状及び記念品が授与されました。

所 属	氏 名
一般教育科理系	北 菌 裕 一 准教授



国際交流事業

国際交流・留学生担当 椎 保幸

23年度の後半から本年度（24年度）前半までの一年間に実施した、国際交流および留学生支援に関連した事業の概要を報告するとともに、各事業に参加した学生のレポートを合わせてご紹介いたします。

[1] 海外語学研修

① 23年度オーストラリア・パース語学研修

日 時：平成24年3月14日から3月23日

研修先：ジョンフォレスト・セカンダリーカレッジ
(オーストラリア・パース)

参加者：本科1年生10名、2年生6名 計16名
(うち女子学生が3名)

引率者：坂本国際交流委員、三原国際交流委員

(学生レポート)

パース語学研修を振り返って

機械工学科3年 仙名 昭夫

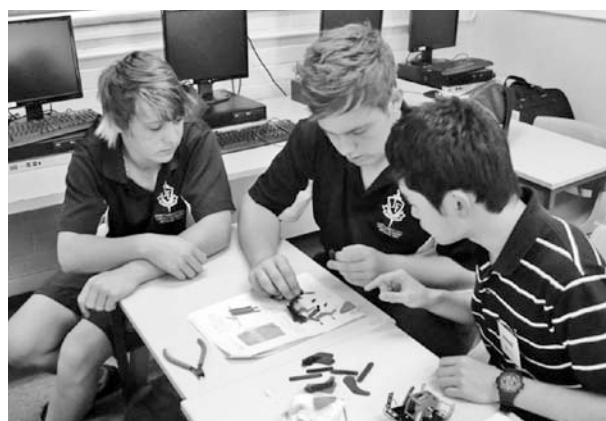
僕は平成24年3月にオーストラリアのパースへ語学研修に行きました。理由は将来に備えて、英語をもっと学んだほうがいいと思った、というのがありますが、一番の理由は僕自身が外国に対して漠然とした憧れを持っていた、というのが大きいです。いつもテレビや本などで見るばかりで身近にあるとは言えない日本以外の国に行ってみたかったのです。あとは、何事も経験！という気持ちもありました。それでは、パースでの生活について説明していこうと思います。

まずはホームステイ。同じ家にホームステイするのは2人ずつだったので、完全に英語だけ、とはなりませんでしたが、それでもやはり、英語メインの生活に慣れるのは少し時間がかかりました。しかし、ホストファミリーにとっても親切に接してもらえたのでどうにかなりました。こちらがわかりやすいようにゆっくりと話してくれたり、僕が何度聞き返しても、機嫌を悪くせずになおしてくれました。休日には、街や大きな公園、海などに連れて行ってもらいました。さまざまな景色やグルメを楽しむことができて、とてもいい体験ができました。日本のお土産を渡したときも、とても喜んでもらえたようでうれしかったです。ホストファミリーの方々に

は感謝してもしきれません。

そして学校。様々な国の学生がいて驚きましたが、すぐになれました。学生はみんな気さくでいい人ばかりで、休み時間は常に多くの人に囲まれながら話ができました。たどたどしいながらも日本語で話しかけてくれる人もいました。授業では、相手学生に日本語を教えたり、逆に英語を教えてもらったりしました。他にも、クリケットやダンスで交流を深めたり、一緒にロボット作りをしたり、放課後には学校近くのショッピングモールで買い物をしたりしました。このように、家でも学校でもとても貴重な時間を過ごせました。ホストファミリーも学生もいい人ばかりで、別れるのが辛かったです。

今回のパースでの体験はかけがえのない思い出になりました。パースで学んだこと、教えてもらったことを忘れずにこれからの日々を過ごしていきます。いま、これを読んでいるあなたも一度だけでも外国に行ってみてはどうでしょうか。きっと何かが変わると思います。



オーストラリア・パース語学研修

都市環境デザイン工学科 3 年 竹内 優花

2012年3月15日、現地時間15:30。私は「語学研修」の参加者として、自身にとって生まれて初めての海外経験となる国、オーストラリアに到着しました。

飛行機での移動は鹿児島から羽田まで約2時間、羽田からシンガポールまで約7時間、そしてシンガポールから最終目的地であるオーストラリアのパースまで約5時間と、計14時間のフライトでした。機内は大変快適でしたが、足がそれまでにないほどひどくむくみ、また、到着した後のことへの期待や不安などで心身共に強烈に疲れていたことを覚えています。

オーストラリアでの平日は主に地元の学校で過ごしました。現地の学生の多くはとてもフレンドリーで、すれ違う学生のほとんどが外国人である私たちに物怖じせずには挨拶をしてくれたのです。カリキュラムに日本語学習の含まれる学校だったためか、中には「コンニチハ」と日本語で挨拶をしてくれる学生もいて、照れくさくもあり嬉しくもありました。休み時間になると、沢山の女の子が私のもとに集まってくれて、積極的に話しかけてくれました。女の子たちは小さなリボン髪をつけていたりバンダナを巻いていたり、それぞれに個性があつてとても素敵だったのが印象に残っています。聞かれたことといえば、もうベジマイト（独特な風味をもつペースト）は食べたか、日本のどこから来たのか、ボーイフレンドはいるのか、など…。容赦のないネイティブの話す速度とオージー独特の発音に、聞き取るのが精一杯でした。私はこくこく頷くか、たまに短く答えを返す程度で、お世辞にも上手くコミュニケーションがとれたとは言えず、自分の英語力のなさを痛感しました。

ホームステイはお友達とペアで受け入れて頂きました。私たちを受け入れて下さったホストファミリーはとても優しく明るいご夫婦でした。普段は筆談も交えつつゆっくりと、家族のこと、ご近所さんのこと、その他にも様々なことをお話しして下さったし、学校から帰ればオーストラリアならではののおやつも出して下さいました。また、休日にはチョコレート工場やワイナリーに一緒にさせて頂くなど、本当に様々な体験をさせて頂きました。現地で生活する上で最もお世話になったホストファミリーの方々、感謝してもしきれない思いです。語学研修を通して、異文化と人々の温かさに触れ、改めて自分はまだまだ経験が浅く、勉強不足だなと感じることができました。学生であるこの時期に海外へ渡るとい

うのは本当に貴重な体験であり、人生の宝と言っても過言ではありません。先生方や保護者の方々にはもちろん、向こうでお世話になった方々にもまた改めてお礼できたらと思います。

②24年度カナダ・バンクーバー語学研修

日 時：平成24年9月11日から9月20日

研修先：ノートルダム・リージョナルセカンダリースクール

参加者：本科2年生7名、3年生1名 計8名

引率者：拝田国際交流委員、鞍掛一般科教授

(学生レポート)

Memory of the Trip

都市環境デザイン工学科 3 年 村上 光樹

Last summer vacation, we went to Vancouver, Canada, to study English, to know Canadian culture and to make friends.

At the first day, we went to many places, busy streets, a beach and China Town for sightseeing. After that, we met our own host family. The people of our host family are so kind to us that we could spend good days. They took us to many places, shopping, an amusement park, and so on.

The second day, we went to the school, and there we met our own buddies. My buddy was Vanessa. I took some classes with her. She talked with her friends in the class. I wanted to talk with them but I could hardly understand what they meant so I couldn't talk with them.

After the days, my buddy spoke so slowly that I could understand what she was speaking about. So I could talk with her, and some of her friends.

The last day of the school, we were invited to the dance party. I had a very fun time with them, and we became good friends.

If I were good at English more, I could talk about more things with them. I thought I need to study English harder and harder. Next time I go there, I will be able to speak English better and make more and more friends.



[2]国際学生交流

①香港IVE/VTCとの学生交流

日 時：平成24年8月19日から8月26日

派遣先：香港專業教育學院 (Hong Kong Institute of Vocational Education)、チャイワン校

参加者：本科4年生3名、5年生2名 計5名
(うち女子学生1名)

引率者：椎

他高専：熊本高専7名、北九州高専3名

(概要)

Technical Challenge Camp 2012 in Hong Kong
(技術課題のPBL型問題解決を通じた国際交流プログラム)

本プログラムは、日本人学生および香港人学生が、共通のテーマについて独自に解決策を模索していくPBL型問題解決プログラムである。今回の課題は「ソーラーパネルの太陽光追跡制御」で、香港の学生と高専の学生で混成チームをつくり、装置製作からプログラミング、検証までの一連のものづくりに取り組んだ。なお、今回は鹿児島高専、熊本高専、北九州高専の3高専合同のプログラムである。

以下の表はスケジュールを示す。

19th Aug (Sun)		Arrival HK Check-in to Y Loft
20th Aug (Mon)	am	Ice-Breaking, Grouping (8groups) Briefing of the Program Campus Tour
	pm	Introduction to Project Works
21st Aug (Tue)		Technical Visit 1 HK Electric - Lamma Island Lamma Fisherfolk's Village
22nd Aug (Wed)	am	Project works
	pm	Project works
23rd Aug (Thur)		Technical Visit 2 Ngong Ping 360 Lantau Island

24th Aug (Fri)	am	Project works
	pm	Group Presentation
	evening	Farewell Party
25th Aug (Sat)		Check-out, departure HK

(1) 工場見学

1回目：8月21日にHK Electric社のLamma Power Stationを見学させて頂いた。この発電所はラム島にあり、香港で最も大きな発電所である。発電形式は火力発電で石炭を主燃料としている。また、最近では環境保護を考慮し、ソーラーパネル発電や風力発電にも力を入れているとのことであった。発電所の担当職員の方から丁寧な説明を頂き、また、タービン建屋内の見学もさせて頂くなど普段ではなかなかできない貴重な体験をすることができた。



2回目：8月23日にLantau IslandにあるケーブルカーNgong Ping 360を訪問した。ここは、ランタオ島にあるNgong Ping Villageまで麓のターミナルから5.7kmの距離を繋ぐケーブルカーである。ここでは、麓のメインステーションにおいて通常は入ることのできないケーブル固定建屋やケーブルカーの掃射設備などを見学させて頂いた。ケーブルカーの滑車装置や切替え装置など機構的に大変興味深いものも多く、機械系の見学施設としてはもってこいの場所であった。

(2) プロジェクト活動

今回のプロジェクトでは、参加学生を4人1グループ（香港2名、高専2名）に分け、計8グループを編成し活動を行なった。技術課題は「ソーラーパネル太陽光追跡制御装置」の製作である。



具体的には、まず、プロジェクト1日目に班分けおよびアイスブレイキングを行い、課題の内容について担当講師より説明を受けた。今回のプロジェクトは、前図に示すように、模型用のソーラーパネル、モーターおよび電子回路を使ってソーラーパネルの姿勢をコントロールする装置を製作することである。ソーラーパネルの姿勢はモーターの回転によって制御されるが、モーターの駆動は太陽光を模擬した光源の位置をフォトレジスタでセンシングし、C言語で記述されたプログラムによって制御するというものである。

プロジェクト2日目は、グループ内でハードウェア製作班とプログラミング班に別れ、それぞれ専門の職員の指導を受けながら作業を行なった。光源の移動をどのようにセンシングするかが一番の課題であり、各々のグループで試行錯誤をしながら、それぞれがユニークな方法を考案していた。

プロジェクト3日目は、装置の最終調整および評価実験を行った後、得られた結果について各グループでパワーポイントにまとめ、それぞれ成果報告を行った。成果報告は英語で行われたが、高専学生にとっては英語力、香港学生にとっては専門知識の面でそれぞれ勉強不足の点が見られたが、概ね交流プログラムの主目的である技術的なコミュニケーションは良く取れていたと感じた。

まとめとして、今回のプログラムは香港IVEのチャイワン校を中心として、熊本高専、北九州高専および鹿児島高専が合同で実施したプログラムである。熊本高専および北九州高専は、海外教育機関との交流を数年前から実施されてきており、数多くの実績がある。特に工学・技術分野での学生交流に主眼を置かれており、他のモデ

ルとなっている。鹿児島高専でも海外教育機関との交流は行っているが、英語研修、異文化交流が主であり、このような工学分野の専門的な交流は今回が初めてである。プログラムに参加した学生に話を聞いても、「とても良い体験ができた」、「機会があればまた参加したい」、「英語の必要性を再認識した」とのコメントが返ってくるなど、非常に内容の充実した有意義なプログラムであった。今後もこうしたプログラムを継続し、発展させられるよう高専間および海外教育機関との連携を深めていければと思う。



②第5回テマセクポリテクニクとの学生交流

日時：平成24年9月9日から9月16日

派遣先：テマセクポリテクニク（シンガポール）

参加者：本科3年生15名

引率者：濱川国際交流委員、椎

（学生レポート）

語学研修を終えて

電子制御工学科3年 川原 和也

私は今回の語学研修で生の英語に触れることが出来た。その中で実感したことは、私達が学習している英語とシンガポールでの日常の英語が思っていたよりも異



なっていたことです。私は、英語演習の授業や今回の語学研修に参加した人は受けなければならなかった英会話レッスンなどで、外部講師のダニエル先生を通して本物の英語というものを聞いています。ダニエル先生はアメリカ出身の方で、先生方が授業で使用している教材のCDから流されている音声もおそらくアメリカ人だと思います。アメリカの英語とイギリスの英語の発音は違うと聞いていたことがあったので、シンガポールで使われている英語もまた違っているのではないかと考えていました。実際にシンガポールに行って、向こうの方々と話してみると、ほとんど違っていました。日常で使われている英語は教科書のようにSVOCでしっかりと構成された文ではなく、かなり省略されていました。また、一単語一単語が短く発音されていたため、聞き取りながら理解するのがとても難しかったです。一年生のときにオーストラリアに行った友人も参加しており、オーストラリアの英語ともまた違った発音だと言っていました。シンガポールは様々な国の人々がおり、使われている英語がsinglishといわれているほどなので、他の国々と比べても結構違っているのではないかと考えていました。地域で発音は異なるものなのだと身をもって知ることが出来ました。また、私はシンガポールに行ったことで人との出会

いについて考えさせられました。最初のほうではうまく打ち解けることできるか心配でした。しかし、向こうの方々が積極的に接してくれたおかげで、私の中では打ち解け、仲良くなることができたと思っています。出会ってたった数日で向こうの方々が私の中でとても大切な存在になっていました。日を重ねる毎に仲良くなっていく一方で、数日後には日本に帰国しなければならないのかということを考えてしまうほどでした。二度と会えなくなるわけではないのですが、シンガポールから日本に帰国するときは本当に辛かったです。普段の生活ではあまり気にすることがなかった人との出会いについて考えさせられ、身近なことで成長できたのではないかと思います。

〔3〕外国人留学生支援関連事業

現在、本校には5名の外国人留学生在籍している。出身国別でみると、モンゴルが2名、インドネシア、ウガンダ、ベトナムがそれぞれ1名となっている。外国人留学生の生活および学業面をサポートするために本校ではチューター制をとっており、また、県内外で開催される各種国際交流イベントなどへの積極的な参加を勧めている。

①霧島市隼人浜下り

日 時：平成24年10月21日（日）

場 所：鹿児島神宮～浜ノ市

参加者：機械工学科5年 アリ君

電気電子工学科3年 ビジ君 計2名

②平成24年度九州沖縄地区留学生交流研修会

日 時：平成24年10月27日（土）、28日（日）

場 所：大牟田・島原・雲仙方面

参加者：留学生5名（全員）

引率者：椎

（概要）

九州沖縄地区の高専に在籍する外国人留学生を対象として、九州沖縄地区の自然や生活文化および日本の工業技術に触れてもらい、学校の枠を超えて留学生同士が勉学や学生生活についての相談や意見交換を行うことによって、日本での留学生生活を充実するための機会を提供するものである。本年度の担当校は有明高専で、大牟田市にあるエコサンクセンターの見学や島原市の雲仙普賢岳噴火に関する資料館などを訪問した。



③霧島ふるさと祭り

日 時：平成24年11月10日（土）、11日（日）

場 所：国分シビックセンター前広場

参加者：機械工学科5年 アリ君

電子制御工学科5年 クー君

電気電子工学科3年 ビジ君

（概要）

本事業は霧島市が主催するイベントであり、霧島市の様々な産業、特産品および文化を紹介するもので、本校の留学生も霧島市国際交流協会の出典ブースにてそれぞれの出身国を紹介するパネル展示や模擬店のボランティアを行った。

〔4〕特別記事

1st International Joint Seminar on Engineering Education in Asiaに参加して

機械工学科教授 塚本 公秀

平成24年3月19日に韓国海洋大学（プサン市）で開催されました大学生の研究発表会を主たる目的としたセミナーに参加しました。日本は鹿児島高専6件、熊本大学4件、中国から青島大学1件、大理大学1件、韓国から東明大学2件、東亜大学1件、海洋大学4件の合計19件の講演がありました。

学生講演に先だって6大学・高専の教員によるパネルディスカッションが開催されました。学生を参加させた6校の教員がパネラーとなり集まった韓国の3大学の教員や学生達といくつかのテーマで討論がなされました。現在アジアの学生達はグローバル化の波にさらされて就職難に立たされています。この背景と原因について多くのことが明らかにされました。ただ日本では高専の卒業生が企業から評価されていることを報告すると他の国の先生方から羨望の讃辞をもらいました。また参加教員の研究紹介が行われ本校からは機械工学科の岩本才次先生と私の講演を含め11編の講演がなされました。

午後からは2室に別れて各学生の研究が紹介され最も参加の多い本校の発表は先の卒業生が評価されていることもあり注目を受けておりました。日本の大学の先生方からも高専生は英語が下手だと思っていたが上手な学生もいるのですねと賛辞を受けました。本セミナーは韓国海洋大学の三大学・高専が発起人となり今後も続けより多くの大学の参加を促して行くことで学生間の交流の推

進と各大学の学生のプレゼンテーション能力のトレーニングの場として供して行くことが話されました。

夕方から学生達だけの懇親会を企画して頂き日韓の学生達で交流が持たれました。

以下2名の本科生へのアンケートより感想をもらいました。彼らの熱い気持ちが伝わってきます。

機械工学科 久保祐太郎

(H24年3月卒業 メタウォーター(株)勤務)

①参加した動機

高専生は大学生と比較してプレゼンテーションを行う機会が非常に少ない。また、高専における英語教育は普通高校と比較すると、非常に授業時間が少ない。これは、より専門性を高めるために専門科目に重点を置いているからだと考えられる。しかし、現在の工業系の日本企業は国内では新しいマーケットを開拓することは難しく、今後は国外への進出がより一層激しくなると考えられる。高専生は社会に出ると若さが大きな武器となる。企業側も海外への配属がしやすい。そこで、多くの日本人が苦手とするプレゼンテーション能力及び英語文章(技術英語、工業英語等)作成能力の向上を望んだ。

②発表に向けての準備

英語での前刷り及びプレゼン資料の作成を行った。原稿を全て暗記することは難しいため、話す内容や順番を覚えて練習した。

③発表直前発表中発表直後の自分の心境

発表直前は緊張していたが、発表中はプレゼンテーションに集中でき、緊張はすぐに収まった。卒業式の数日後に講演が開催されたため、発表直後に初めて卒業を実感できた。

④今回参加しての感想。

[1]問題点

- ・開催日時が卒業式の数日後であること。
- ・資料作成期間が卒業研究発表の時期と重なるため、スケジュール的に非常に厳しいこと。
- ・英語での論文や前刷り作成は英語力があっても経験値が必要なこと。
- ・韓国人の英語レベルが低いこと(相手に内容が伝わらない)。

[2]英語(英会話)はどのレベルまで必要と感じたか

- ・TOEICでreadingが350、listeningが250程度は必要。(今回は資料の作成が難しかったため、reading能力に重点を置いた)
- ・正しい発音で英語を喋れること。

[3]世界に目を向けようと意識が高まったか

もともと意識していたため、変化なし。

[4]将来に向けてどういったきっかけにしたいか

国際的に活躍できるエンジニアとしての第一歩。

[5]全体を通した感想

正直、スケジュール的にきつかった。しかし、会社に入社してからは、いい経験が出来たと思います。

⑤後輩へのエール

入社して周りをみると、26歳や27歳の大学院卒の方々がたくさんいます。しかし、海外でプレゼンテーションを行った人はほんの一握りです。また、このような機会を頂けるのも一握りの人間です。”なにごとにも経験”という言葉はすごくいい言葉です。20歳でこのような経験が出来たのは幸せなことだと思います。英語に対して苦手意識を持っている方が多いと思いますが、少しだけ頑張ってみてください。正直、結果はすぐには現れません。しかし、継続したら成果は必ず現れます。また、”ジンザイ”という言葉には3つの漢字が存在します。1つめは人任。やる気も実力もなく、ただいるだけの人です。2つめは人材。やる気はあるけどまだ実力のない人です。最後は人財です。やる気も実力もあり、会社にとっては貴重な存在です。みなさんは今後、社会に出ていきます。社会に出たてはもちろん人材です。人財になれるように頑張ってください。

機械・電子システム工学専攻 吉留 友哉

(H24年3月卒業 (株)JMS勤務)

①参加した動機

就職を間近に控え海外での論文発表の経験を積むことと共に自分の英語力がどこまで通じるのか挑戦したいと思い参加した。今まではTOEICや英検など試験勉強としての英語を学んできたが就職すれば外国人を相手にすることもあるだろうし、実際に海外で勤務することにもなるだろう。実際その時になってから学会のレベルを知るのでは遅いので少しでも社会人になるということに対しての意識付けがしたかった。

就職前でまだ学生ということもあり失敗しても大丈夫むしろプラスにしかならないという考えがあったことも参加動機として挙げられる。また就職が控えているにもかかわらず英語に手を付けていなかったため学会に参加することで英語に触れる機会を作ろうと考えた。

②発表に向けての準備

英語と日本語では文法などの表現が異なったり専門用語が見当たらないまたは言い回しが独特なものが多数あったため表現方法を学ぶとともに語彙力を上げる目的で英語の論文を読んだ。

また、専門用語以外は難しい表現を避け他人が聞いていて分かりやすい単語を使用することで自分にとっても覚えやすい言い回しになるよう工夫した。

③発表直前発表中発表直後の自分の心境

自分の発表の順番を待つ間、他人の発表を聞いて英語力の違いに愕然とした。文章の構成が聞き取りやすく、スライドを併用して何を伝えたいのかがしっかりと分かり、自分の英語や学会に対する意識の低さを痛感した。いざ演台に上がると頭が真っ白になってしまったが、それがかえってよかったのかもしれない。自分の語彙に合ったレベルの英語でひたすら喋った。発表の間、もっと発表練習や原稿を練り上げてくれば良かったとずっと後悔していた。

発表が終わった後は、ほっとすると同時に不完全燃焼感が胸に蟠った。それと同時に、今度こういった機会を得られたときに同じような思いをしないよう、英語の語彙力やスピーキングの力を身に付けていこうと強く感じた。

④今回参加しての感想。

今回学会に参加して最も感じた問題点は、自分の英語力が低いことを問題だと思っていなかったことだと思う。海外進出を狙う企業が増えている現代社会で英語は出来て当たり前となっている。同年代の方々が高いレベルで英語を駆使しているのを見て自分がいかに危機感を持つべきか思い知った。

英会話の力は、簡単な単語でも意思を伝えられるレベルが必要だと感じた。学校で習うような例文通りの文章でも他人に自分の言いたいことを伝えられるようになれば、そのあとで発音などを身につければいいと思う。

講演の合間などに韓国の方々と英語を使って意思疎通をはかれたので、もっと世界中の人々と意思疎通をはかれたら面白いだろうと感じ、海外での勤務などに目を向けるいい機会となった。

英語は海外勤務に関わらず、国内や仕事以外でも役に立ってくるだろう。将来は英語を使った商談などだけでなく、外人の友人をつくって英語を使った交流を行えるようにしたい。

今回の学会は、外国に対する意識を大きく変えるいい機会となった。今までは外国人と会話するなんて無理だと一方的に決めつけていたが、実際に国外にわたり、自分の意思が相手に伝わったとき非常に嬉しく感じた。またそれと同時に、自分の意思をうまく伝えられてないもどかしさも同時に感じたので、今後はTOEICのような勉強だけでなく、喋ったりなど実践向けの英語の勉強をしていきたい。

⑤後輩へのエール

就職したときに同期の方々の話を聞くと、意外と多くの方が就職前に何かしらの形で海外に関わっているようです。もしかしたら海外で経験を積むことはもう基礎経験になりつつあるのかもしれませんが。しかし英語を使って論文を発表したという人はその中でもごく一握りでした。就職に際しても国際学会参加というのは大きなアドバンテージになります。もしこのような機会があれば積極的に参加して、自分の価値を向上させてみるのはいかがでしょうか。



平成24年度の広報委員会の 活動について

広報委員会委員長 大竹 孝明

広報委員会の委員長を担当して5年目となりましたが、委員会の担当事項も広報誌、ホームページ、「鹿児島高専の日」、「高専ロボットと音楽会」のイベントや本校紹介用のプロモーションビデオ（DVD）の作製等、非常に幅広くなってきております。各科及び技術室の広報委員会委員の皆様にはご協力を頂き、感謝申し上げます。

広報（PR）につきましましては、学内の全ての部門に関係し、皆様方のご協力が不可欠ですので、本校及び地域の活性化のため今後ともよろしくお願い致します。

今年度の主な活動内容と、代表例として第4回目の「鹿児島高専の日：小中学生のためのものづくり・科学教室「鹿児島高専の日2012」」についてご報告致します。

1. 平成24年度の主な活動内容

- ① 「鹿児島高専紹介パンフレット（学校案内 2012）」、「平成24年度 学校要覧」、「2012 学校案内 中学生のみなさんへ」の発行
- ② 「第5回高専ロボットと音楽会」の開催：4月22日（日）、かごしま県民交流センター（鹿児島市）
- ③ 「かごしま県民交流センター（鹿児島市）2階展示コーナー」での本校PR、6月22日より7月12日まで
- ④ 「第4回小中学生のためのものづくり・科学教室「鹿児島高専の日2012」」：鹿児島市立科学館との共催、8月19日（日）、独立行政法人科学技術振興機構（JST）「平成24年度科学技術コミュニケーション推進事業活動実施支援」事業
- ⑤ 九州沖縄地区高専「科学技術教育支援WG」による「高専サイエンス支援ネット in 九州沖縄（高専機構特別教育研究経費）」の連携校としての実施
- ⑥ 鹿児島高専だより第67号の発行
- ⑦ 入学者募集ポスターの作成・配布
- ⑧ かごしま県民大学連携講座による公開講座等の実施
- ⑨ 南日本新聞のキャンパスウェブ等による本校PR
- ⑩ 「本校紹介用のプロモーションビデオ（DVD）」の作製
- ⑪ 「第22回九州沖縄地区高専フォーラム」への出席及び発表：12月8日（土）、都城市 都城高専
- ⑫ 「第18回高専シンポジウム in 仙台」への出席及び発表：1月26日、名取市、仙台高専名取キャンパス

2. 「小中学生のためのものづくり・科学教室

「鹿児島高専の日2012」について

鹿児島高専では、鹿児島市立科学館との連携（共催）により、これまでに科学実験工作教室やロボットの動作説明等の各種イベントを通じて科学に対する興味や関心を高め、夢や創造性を育む機会を設ける事業を実施してきました。本事業は、独立行政法人科学技術振興機構（JST）の「平成24年度科学技術コミュニケーション推進事業 活動実施支援」に“小中学生のためのものづくり・科学教室「鹿児島高専の日2012」”のテーマで申請し、4年連続で採択されました。本企画を、鹿児島高専を地域へ広くPRし、科学技術者育成を行う本校への志願者増に向けた広報活動の一環とも位置づけ、科学実験工作教室や展示等を企画し、平成24年8月19日（日）に鹿児島市立科学館にて実施しました。

今年度の活動内容については、表1に示す通りですが、学内の6学科の他、都城高専の一般化学による一般来館者の小中学生向けの科学実験工作教室を行い、学校説明会や進学相談等の企画も実施しました。

表1 「鹿児島高専の日2012」の活動内容

I 小学校5,6年生及び中学生対象の科学実験工作教室(事前応募)	
①紙トンボを作ろう	
②光、音、電波を出そう！-作って体験、エレクトロニクスの世界-	
③あなたもUFO キャッチャーの名人	
④ライントレーサロボットを作ろう	
⑤安心・安全・美味しい水	⑥4足歩行ロボットを作ろう
II ロボットによる演奏・紹介や各科の展示・科学実験(工作)教室、学校紹介等（鹿児島市立科学館の一般来館者）	
1. 演奏ロボットによる音楽会	
2. 学生が製作した高専ロボコン全国大会出場ロボットの紹介	
3. 鹿児島高専学校紹介(学校説明会、進学相談)	
4. 一般理系、機械、電気電子、電子制御、情報、都市環境デザイン工学科、都城高専一般化学による実験教室	
①ポンポン船を作って走らせよう！	
②体験！超簡単エレクトロニクス工作	
③坂道を下るトコトロロボットを作ろう	④折り紙建築
⑤アルコールロケットで宇宙へ！	
⑥サッカーボーレンを作ろう！	
⑦立体シャボン玉、使い捨てカイロ	
5. 機械、電気電子、電子制御、情報、都市環境デザイン工学科による展示及び科学実験	
①コンピュータでレゴロボットを動かそう！、スターリングエンジンの世界！	
②体験！エネルギーとエレクトロニクスショー	
③体験しよう！電子制御の世界	
④体験、情報工学	
⑤目に見えない世界を観察してみよう	



在校生のみなさんへ

機械工学科卒業 柿迫健太郎

はじめまして。私は4年前に鹿児島高専機械工学科を卒業した柿迫健太郎と申します。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、私は現在霧島市で仕事をしています。

今回はみなさんに卒業生としてアドバイスできたらと思い、少しだけ私の話を含めながら『夢』についてお話をします。

突然ですが、みなさん自分の夢を持っていますか？…小学校、中学校のときには何かしら夢を持っていたはずですが。しかし今はどうですか？最近の高専生はこの『夢』を持っていないことが問題である気がします。（私自身もそうですが…）夢と言うと大きい言い方でパッとしないかもしれませんが、とにかく今自分がしたいことを見つけて欲しいんです。私はずっとパイロットになりたいという夢を持って学生時代を過ごしました。そして、パイロットの夢は諸事情により諦めざるを得なくなり、それでも飛行機の仕事をしなく、航空機整備の仕事に就きました。しかし、その仕事も自分が思っていたものとは少し違ったためずっとモヤモヤしたまま続けましたが、やはり続きませんでした…

自分が何を重点に仕事を考えるのか。金銭、時間、家庭、自分がやりたいこと。仕事はやらされ感では絶対に続きません。その仕事の中にどれだけ自分のやりがいを見つけられるかがとても重要です。

次にその仕事に就くためのコツみたいなものを2つ教えます。というより、これは私が2つの企業を受けた結果、感じたことですので伝えます！！

1つ目は『経験すること』です。なんでもいいんです！経験したほうが良いと思います。人がやりたがらないこと、他の人がなかなか経験できないことを自分が経験するのは。そうするだけで自分には他の人よりも1つスキルを持つことになるんです！そして企業から見ても少し違う人材になれているのです。

2つ目は『話すこと』です。単に話をするのではなく、いろんな人と色々な話をしたほうが良いです。仕事の話、お金の話、好きな人の話、趣味の話etc. 自分が思っている以上に自分の周りの人は色々な考えを持っています。そして色々な情報をもっています。この点に関しては、高専はとても良い環境にあります。学生はホントに多種多様ではあるし、先生たちもすごい人から変わった人まで…そしてなにより、大人の意見を聞きや

すい環境です。相談してみてください。自分の周りには話を聞いてくれる大人がいっぱいいます。その人たちに助けを求めながら、自分の道を切り開いていってください。

いま皆さんのいる鹿児島高専はこれからの未来を担う人材をつくる学校です。いつか、この学校で良かった、鹿児島高専を卒業したことを誇りに思える日がやってきます。その日を迎えるためにも今から自分の『夢』を持ち『スキル』を磨いていってはいかがでしょうか？後悔しない人生を歩んでください。応援しています。

在校生の皆さんへ

電気工学科31期生 南郷 隆裕

私は、平成10年3月に鹿児島高専の電気工学科を卒業し、九州工業大学に編入後、大学院まで進学し、現在は、株式会社東芝に勤務しております。仕事は、入社以来一貫してシステムLSIの開発・設計の仕事に携わっています。現在は、SSD (Solid State Drive) に搭載されるLSIの開発を行っています。

今回、私のような若輩者が執筆の機会を与えて頂いたのは、昨今の電機業界の状況を肌で感じているからだと思いますので、私から一言、会社で感じていることを少し述べさせていただきます。

ニュース等で見聞きしていると思いますが、昨今の国内電機業界の業績は惨憺たる状況です。東芝はインフラ部門を持っているので、業績は安定しているのだろうとお考えの方もいらっしゃると思いますが、はっきり言って内情は全く余裕がありません。

そのような状況の中、開発すべき製品の条件として、「低コスト、高性能、高品質、早期出荷」が挙げられます。これら全ての項目が、世界No.1でなければなりません。一つも妥協は許されないのが実情です。世界No.1の製品を生み出すためには、ベンチマークをしっかりと、お客様のニーズをとらえつつ、イノベティブ（革新的）な製品を生み出し、商品企画、部品調達、販売部門等と、全員のベクトルを合わせることが大切です。日本企業にはまだまだ優秀な技術者は、各部門にたくさんいます。海外メーカーに負けてはいられません。

私は、入社してすぐの頃、「ハングリー精神をもって頑張ります」と言っていたことがありました。しかし日

本で育った私が、強い気持ちを維持できるかという、少し自信がありませんでした。そこで出会った言葉が、「危機意識を持つ」という言葉です。広い視野を持ち、予期せぬ事態に陥ったとしても第2、第3の矢を放てる準備をするのです。技術者は、危機意識を持ちながら、かつ、革新的なアイデアを生み出す必要があります。そのために、分野に縛られないアイデアの創出を日々行うことが大切だと考えます。アイデアをその都度書き残す癖をつけて、ブラッシュアップさせながら、自分の財産とするのです。会社生活の中では、時として議論が行き詰ってしまうことがあります。その時に、自分の考えやアイデアを積極的に話せるような人材が求められています。

在校生の皆さん、今興味があることはぜひ積極的に体験してみてください。そして、妥協せずに必死になって勉強し、研究に取り組んでください。社会に出てから、学生時代の方が辛かったと思えて、乗り越えられる事は少なくないです。これからも鹿児島高専同窓生として共に頑張ってください。

最後になりましたが、鹿児島高専の益々のご発展を心より祈念しております。

在校生の皆さんへ

電子制御工学科 7 期生 山口 貴史

在校生の皆さんこんにちは。私は電子制御工学科 7 期生として卒業し、機械・電子システム工学専攻 2 期生で修了した山口といいます。現在私は本田技研工業株式会社の栃木製作所というところにいます。社会人になって 10 年目です。

栃木製作所では、自動車のエンジンや駆動系の部品などを製作し、世界の事業所に出荷しています。その中で私が勤めている職場では 4500 t プレス・5000 t プレスなどを使い、エンジンクランクや CVT プーリー、4WD の部品のハイボイドギヤなどといった部品の熱間鍛造を行っています。私は、ラインの品質責任者として仕損率・仕損費の管理や削減計画の作成、品質トラブルの対応と再発防止、ISO 帳票の管理などを行っています。

私から言うのもおこがましいですが、今まで私が経験したことから在校生の皆さんに二つほどアドバイスをしたいと思います。

まず一つ目は、将来役に立つ勉強は学生時代のときは

わからないと言う事です。学生時代、電子制御工学科にいた私は、就職したら制御系の仕事をがんばろうと、機械系や役に立たないだろうと自分で勝手に決めた一部の苦手な一般教科はあまり力を入れないで勉強していました。ところが、配属された職場は苦手な材料力学などの機械系や物理学が必要な環境で、品質担当になってからは統計学の重要さに驚かされ、学生時代に身を入れて勉強しなかったことを後悔しました。高専の良さは、将来どのような仕事についても基礎知識を持っている状態で仕事につけることだと思います。在校生の皆さんはこの教科は自分には必要としないと決め付けず、幅広く知識をつけていただきたいと思います。ただ、誰にでも苦手な教科はあると思います。将来振り返れるだけでも全く違うので教科書等は絶対捨てないでいつでも見られるようにしておくで安心です。

二つ目は、自分のイメージしていなかった仕事についてもとりあえず頑張ってみる事です。私がホンダを目指したのは当時参戦していた F1 に関連する仕事でした。工場の現場に配属されることは全く考えていませんでした。職場もキツイ、汚い、危険と 3K 職場で何年続くのか自信がありませんでした。ですが、どのような仕事も特有の面白さがあると思います。私は 5 年くらいたってから面白さがわかってきました。今はこの職場で良かったとさえ思っています。皆さんも自分の想像した以外の仕事をする事になるかもしれませんが、とりあえず頑張ってみて面白さを探してください。

以上大したことは言っておりませんが、参考にしてくださいと嬉しいです。遊びも勉強も頑張って充実した学生生活を送ってください。

大学というところ

平成 22 年度 情報工学科卒 黒瀬 修吾

在校生、及び保護者の皆様、こんにちは。平成 22 年度に情報工学科を卒業し、現在は熊本大学情報電気電子工学科 4 年に在籍しております、黒瀬修吾と申します。この度は、4、5 年生時に担任としてお世話になった加治佐先生より、お話を頂き、高専だよりに寄稿する運びとなりました。私は東大の様に特別優秀な大学に進学した訳でも、社会人としてバリバリ働いているという訳でもありませんので、そういったところは他の方にお任せし

て、在校生の皆さんに、大学編入がどういったものか、お伝えできればと思います。

私が、大学に入ってまず驚いたのは人の多さ。毎年高専の全校生徒の倍以上の人間が入学して来るので、当然と言えば当然ですが。片田舎の一学年30人程の中学校を卒業した私が、高専に入学したときに感じた「井の中の蛙」感に再び打ちひしがれました。

そして次に、先生方との距離が違います。遠いです。高専での先生との距離が、高専から徳田ラーメンなら、大学では、加治木の豚トロラーメンぐらい違います。大学の教室は、全部階段教室ぐらいの広さなので、先生には質問しにくく、また顔を覚えて貰えないので、授業外ですれ違っても挨拶もしづらいし、またそれが質問のしづらさを加速させます。高専の時は、距離の近さ故の煩わしさを感じていましたが、恵まれた環境だったんだと今では感じています。

また大学は、サークル活動が盛んです。高専には一部しかありませんが、大学には体育会（高専の学生会のような組織）公認の部活と、非公式のサークルが多数存在しています。大学編入するつもりの方の在校生の皆さん、サークルには是非入ってください。サークルに入れば、友達ができ、その友達と遊んだり旅行したりと、とても大学生っぽい生活を送ることができます。私もご多分に漏れず、ダイビング部に所属し活動しています。名前のチャラさとは正反対の体育会系の部活ですが、天草や枕崎、さらには沖縄で、ダイビングを満喫しています。

そもそも、私が専攻科でなく大学編入を選んだのは、研究内容もちろんです。1度大学生というものを経験したかったからというのが大きなウェイトを占めています。少し話は変わりますが、熊大は文系の北キャンパス（通称北キャン）と理系の南キャンパスに分かれています。正直、南キャンパスの空気は高専と変わりません。男の世界です。ところが一歩北キャンに足を踏み入れるとそこは別世界。木陰のベンチで本を読む人、ガラスの前でダンスの練習をする人、銀杏並木を歩く女子大生・・・そう、そこは正にリア充の巣窟。The大学生と呼ぶべき人々がたくさん住み着いています。私たち理系がこの北キャンに入るための近道、それがサークルに入る事なのです。ということで大学に編入するならサークルに入るという事を肝に銘じておいて下さい。

なんだか支離滅裂な話になってしまいましたが、とにかく一番大事にして欲しいのは、主体性です。大学では自分から動かない限り、何も始まりません。サークル活動でも勉強でも、自分から行動しないと楽しい大学生活を満喫することはできません。ただそれさえできれば、

バラ色の大学生活が待っています。在校生の皆さん、大学に編入してみてもいいかもしれません。

p. s. 大学生活には興味がないけど大学院に進学したいという人には専攻科をオススメします。

在校生の皆様

平成20年度土木工学科卒業

平成22年度土木工学専攻修了 黒田 恭平

私が鹿児島高専本科を卒業して4年、専攻科を修了して2年が経過しました。私の恩師である山内正仁教授から依頼を受け、今回の執筆を担当させて頂けることになりました。私が専攻科から大学院に進学したこともあり、今回は私の大学院進学のかきかけと高専専攻科から大学院進学の利点についてお伝えしたいと思っております。

私が専攻科・大学院へ進学した理由は山内正仁先生・山田真義先生の研究室に配属されたことがきっかけでした。両先生は菌類、微生物の力を利用して廃棄物の有効利用や廃水の浄化を行うといった今話題の環境バイオ技術を研究している研究室でした。両先生のご指導の下、無事長岡技術科学大学大学院に進学することができました。大学院に進学後は、茨城県つくば市にある産業技術総合研究所（以下、産総研）での研究を志願し、現在は産総研で研究に励んでおります。博士課程後期進学も決まっており、将来山内先生・山田先生のような高専の先生になるために毎日研究と英語の勉強の日々を送っております。

では、高専専攻科から大学院進学の利点について私の感じたことをお話致します。高専専攻科から大学院進学の利点として、大学院への進学が比較的容易であることが挙げられます。例えば、長岡技術科学大学や豊橋技術科学大学は専攻科生対象の推薦試験があり、他の大学生と競合すること無く入試を行うことができます。因みに私もこの制度を使用して長岡技術科学大学大学院に入学致しました。また、高専生は他の大学生が研究を始める2年前から研究生生活を開始することができます。これは研究業績・知識の面で非常に有利となり、高専本科・専攻科でしっかりと経験を積むことができれば、大学院の先生はあなたの方のことを優秀な人材としてきっと欲しいと思います。

以上が私の感じた利点です。もちろん、就職が悪いと

言っているわけではなく、私がたまたま専攻科から大学院へ進学したのでそのことについて執筆させて頂きました。

次に、大学院進学を考えている方（特に本科5年生、専攻科生）へ僭越ながら2点ほど助言をさせて頂きます。1つ目は、自身の研究に関連のある論文をたくさん読むことです。論文は英語力の向上だけでなく、研究を行うための知識・視野の広さ・考察力などを身につけることが出来ます。2つ目は、指導教員から与えられた研究に真剣に励むことです。真剣に研究に取り組んだ経験は大学院進学後に大きな糧となると思います。

長々と偉そうに語ってしまいましたが私も実践できているかは非常に怪しいところがあります。専攻科・大学院進学に興味のある方は是非指導教員の方に相談してみて下さい。鹿児島高専および学生の皆様のご活躍を期待しております。

鹿児島高専から海外へ

平成23年度機械・電子システム工学専攻修了 満園 友宏

私は2012年3月、7年間通った鹿児島高専本科・専攻科を修了し、4月からは九州大学大学院へ進学しました。そして現在は、中国上海交通大学で交換留学生として半年間、中国でのキャンパスライフを満喫しています。また、就職活動に取り組む今日、高専時代の海外経験から得た将来の目標について述べたいと思います。

私は高専在学中に2回の海外経験をしました。

1回目は、カナダのバンクーバーで1週間のホームステイをしながら現地の学校での語学研修に参加しました。そこで現地の学生やホストファミリーと過ごした時間はとても有意義なものでした。帰国前日の夜、ホストファミリーがお別れ会を開いてくれました。ホストファミリーはとても親切で常に優しく接してくれましたが、私はその当時、英語は苦手とする教科で会話など全くできませんでした。その場で、感謝の気持ちを言葉で伝えられなかった悔しさを今でも覚えています。この経験をきっかけに語学を学ぶ必要性を改めて認識するようになりました。

2回目は、専攻科進学時にフィリピンにある日系の造船会社で約3週間の海外インターンシップに参加しました。ここでの経験は私の価値観や考え方を大きく変えるものでした。造船所は都市部から離れた場所にあり、周

囲の民家には、ガス・水道も十分に整備されていませんでした。日本人からみるとフィリピン人は時間に寛容です。待ち合わせ時間に30分遅刻しても怒るようなことはありません。その理由をフィリピン人に聞いてみると、「時計の時間がバラバラで、時計を持っていない人もいます。日本みたいに正確な時計じゃない。」と言われました。この時に「日本の常識は世界の非常識」という言葉を実感しました。フィリピンでの経験は、日本では経験できない貴重なものでした。

（詳しい内容は2010年、高専だより63号、18ページに紹介
<http://www.kagoshima-ct.ac.jp/pdf/kousendayori/2010/vol63.pdf>）

私は高専時代の2つの海外経験をきっかけに海外へ興味を持つようになり、韓国や中国への留学にも挑戦しました。現在も海外でも仕事ができる会社を探して就職活動に取り組んでいます。海外での経験は、自分自身の価値観や視野を大きく広げてくれます。そして、そのチャンスは皆さんの身近に沢山あります。今は飛行機でアジアなら1時間～数時間、約一日で地球の裏側までいける時代です。皆さんも機会をみつけて海外にいつてみてください。日本では見つけられない何かをきっと見つけることができると思います。

大学院に進学し感じた事

第10回電気情報システム工学専攻修了 吉元 宏幸

平成22年度に電気情報システム工学専攻を修了した吉元宏幸と申します。現在は九州工業大学大学院 生命体工学研究科 脳情報専攻に所属し、日々研究に励んでいます。ここでは、自身が所属する研究科の紹介、そこで自身が感じた大学院における重要事項、高専の良さについて述べさせて頂きます。

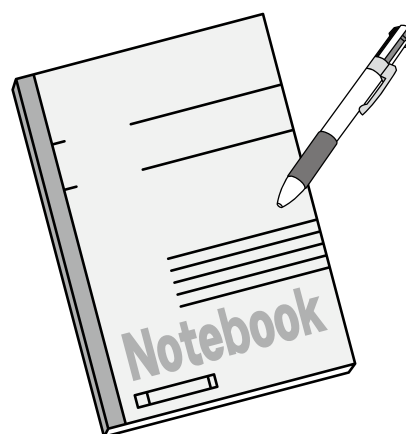
生命体工学研究科は、北九州市若松区に位置する研究科であり、学生ほぼ全員が大学院生です。本研究科には、高専の専攻科から進学する学生も多く在籍しています。私が本研究科を選んだ理由は、生き物の持つセンサシステムと脳の関わりに興味を持ったためです。現在、電気に反応する器官、電気受容器を持つ魚を対象にした実験・解析を行い、充実した研究生生活を送っています。

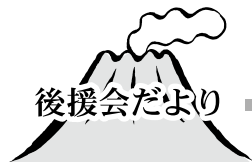
次に、私が大学院に進むことで感じた、大学院に進む上で重要なことについて述べます。第一に、自主性が求

められます。研究室を選択した時点で、どのような研究を行いたいかは大まかに決まっていると思います。ここから、自身で課題設定を行い、無理のない計画を立て、更なる課題を見つける事が必要です。他人から指示を待つだけでは研究を進めることができません。受け身にならず、自ら積極的に考え、動くことが重要です。

第二に、英語力が求められます。英語ができなければ、論文を読む事、すなわち調査ができず、研究活動に支障をきたします。私は高専在籍時に英語を非常に苦手としていましたが、先生や研究仲間の協力を得ながら勉強を続け、苦手意識を取り除くことができました。初めは苦勞しますが、ふとした時に自身の英語力の向上を感じ取ることができます。私も論文等を読みながら、更なる英語力の向上を図っています。英語の学習を地道に続けると、研究活動に限らず、自身の活動範囲の拡大に繋がります。進学を目指すかどうかに関わらず、高専在籍中から英語の勉強に取り組むべきだと感じています。

最後に、大学院に進むことで感じた高専の良さについて述べます。先生と学生の距離が近く、研究・勉強に限らず、進路・悩み相談ができる事は、高専ならではの良い環境だと感じます。また、5年間（専攻科に進めば7年間）苦楽を共にする友人達は、かけがえのない財産になります。そして、高専で得られる知識・経験は他大学に引けを取らない物です。悔いの残らないよう、また自信を持って、日々の活動に取り組んでください。





ご挨拶

後援会会長 菊谷 祐次

日頃より、後援会活動にご理解とご協力を賜りまして心より感謝申し上げます。4年間の長期に渡り会長を務められました、前花田会長の後任としてH24年度より会長をさせて頂く事になりました、菊谷と申します。息子は電気科4年に在籍しております。残す1年を息子と同時に卒業が出来ましたら幸いです。

後援会活動は、学生の為に学校事業を側面から助成するという大きな役割の元に様々な活動がされています。活動内容等は、毎年の総会でご承認頂いておりますが、ロボコンを始め体育・文化活動への助成や、英語検定試験TOEICの検定料など学校と連帯を取りながら、学生の皆さんが学校内外の活動に積極的に参加出来るように後援会費を活用しております。ここ数年は、厳しい経済雇用情勢の中にありますが、鹿児島高専卒業生は、就職・進学共に技術者として、また研究者として様々な分野で活躍してくれています。これもひとえに、卒業生や学生の皆さんの努力と各先生方のご指導の賜物として深く感謝致します。専門技術を通して日本の未来を守り続けられる、人材であってほしいと願っています。

H25年度に鹿児島高専は50周年を迎え様々な記念事業が企画されています。構内には、都市環境デザイン3年生の佐藤君がデザインされたモニュメントが設置されますのでぜひご覧ください。

最後になりますが、息子の入学以来「高専祭」は、4年間連続の雨で現在記録更新中です…。見学の方々からはまた雨の嘆き声を耳にします。鹿児島高専の櫓絵応援団は例年通りの見事なもので全国一だと思います。

毎年元気と感動を与えてくれる、学生の皆さんの輝かし未来の為に微力ではありますが、後援会はバックアップして行きたいと思っております。

今後共、後援会活動に温かいご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

自立心をもってこそ

電気電子工学科1年理事 吉留 祥代

新一年生の皆さん、保護者の方々鹿児島高専への入学を心からお喜び申し上げます。又、本年度創立50周年おめでとうございます。

執筆前に世間の親として私なりに考えるのですが…今の子供達は、少子化のせいか自分本位で周りへの思いやりや感謝の気持ちを意識できない子供が近頃多い様に感じています。

そういうことから、成長期の子供達が本校の1年間の全寮共同生活で得る経験は、将来の為に大変有意義な事だと思います。

我が家は、高専からも程近い場所にあり、朝の挨拶、運動の掛け声などがよく聞こえてきます。

息子とは初めて離れて暮らす事になった訳ですが、約1年経過するにあたり、入学当初は自宅迄聞こえてくる子供達の大きな声で、自分の息子は「大丈夫かな、周りと協調できるのかな？」と多少心配しましたが、週末帰宅する度に中学時代と違い少しずつではありますが自立の気持ちが芽生えてきているように思えます。

学生生活は、自分の目指すエンジニアとしての知識の把握も大事ですが、基本的には、「人を思いやり感謝の気持ちを身につける自立心」を養うことが必要であると思っています。成長期の5年間色々な人に出会える高専の環境で身につけてくれたらと切に願っています。

高専学生生活は始まったばかりです。勉強、部活（ソフトテニス部）で頑張っているようですが、まだまだそこまで考える余裕などないはずです。山あり谷ありで自然に身につけてくれればと思っています。

1996年アトランタオリンピック開催の年に生まれシドニー、アテネ、北京、ロンドン、を経て本科卒業予定のリオデジャネイロでは20歳…！心身ともに健全に育ってほしいものです。

親としても、後方から見守り、無事社会人として巣立つ時、競争社会に入っても自分本位でない自立心をもって頑張ってくれたらと思っています。

最後になりますが、先生方や職員の皆様、また部活でお世話になっているコーチや先輩の方々、これからどうぞよろしくお願い致します。

5年間の思い出

電子制御工学科 5年理事 松山 律子

高専のことを初めて意識したのは、息子が中学校に入学して間もなく、進学は高専と言い始めてからになります。中学校3年間、目標にしていた高専に入学が決まったときは本人共々大喜びしました。

入学が決まり、ホッとしているところに担任の先生より、お電話で理事の依頼がありましたが、適任者は他にいらっしゃるのではないかと一旦は断りました。しかし後日、入学式のクラス懇談会の席で、引き受けることになりました。まさか5年間するとは思っていませんでした。皆さんにご迷惑をかけたこともあったと思いますが、なんとか5年間、頑張ることができました。理事会に出席することで学校の内容や様子など良く知ることが出来ました。また各支部会で卒業生のお話を聞くことが出来、将来の参考になりました。

そして息子は、入学と同時に寮に入りました。自宅から1時間もかからないのですが、サッカーをしていたこともあり、夏休みまで一回も自宅へ帰ることはなく、久しぶりに帰って来たときには、すっかり高専生らしくなっていました。寮では先輩方からの指導や挨拶運動、行事等があり、人間的に成長したと感じました。また高専には外では通じない半世紀の伝統の中で生まれた高専用語があるらしく、これも使いこなせるようになっていました。その後、2年生の途中で寮を出ることになりましたが、本人のためにはもう少しいても良かったと思っています。

月日が経ち、クラス全員と一緒に勉学や行事に取り組み、家族以上に仲がよく、お互い理解し合えるようになっていました。そんな仲間で行う体育祭での応援団は本当に感動しました。一年前からの準備、練習、ひとつの目標に向かって全員が一致団結し、一回の演技のために全力を尽くします。練習のピーク時には体中痛いそうです。前日、髪を染めるため寝る時間もなくて当日を迎えましたが、やり終えた達成感というのは本当に素晴らしいものであると思います。社会人になれば、こういう機会はなかなかなく、他の学校でも少ないのではないかと思います。これは一生の宝になったのではないのでしょうか。

5年間楽しく、親子とも過ごすことが出来たのは、息子が入学することができたことであり、また理事をさせていただいたことで、さらにいろんなことを経験でき、皆さんに感謝しております。

また保護者懇親会も皆様にご協力いただき楽しい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

長いようで短い5年間

情報工学科 5年理事 新西真由美

中学校3年の家庭訪問時、担任の先生と娘と私との3人での進路の話の時、それまで進路については、家でもあまり会話は無かったのに、「鹿児島高専の情報工学科に行きたい」と言い出しました。担任の先生も私もビックリしました。

しかも、学校推薦で行くといい、担任の先生もポカーンと私の顔を見ていらっしやったのを、今でも忘れません。

一生懸命に頑張り、合格することができましたが、入学してからは波乱万丈。

2年生の夏休みの頃、他の高校へ行った同級生たちが進路を決める頃になり、同級生から夢や希望を聞いているうちに、自分も高専をやめて、専門学校へ行きたいと言い始めました。せっかく入れたんだから卒業まで頑張れないのか…と説得をしましたが、工学は自分には向かない、勉強にもついていけない…と、しまいには、高専志望の時、私が反対しなかったと訳の分からない理由を言い出しました。

話し合いの結果、3年生まで頑張って、3年修了の資格だけは取ってもらうということで、納得しました。いつ、辞めたい…というかと、爆弾を抱えているような状況でした。

3年が終わる頃になって何も言わなくなったので、私のほうからもそのことには触れずにいました。3年が終わり4年、5年…「やった〜」これで安心！

就職も決まり、一安心でした。今になっては「辞めなくてよかった」と実感しているようです。よく頑張ってくれた、と卒業の時には抱きしめてあげたいです。

あっという間の5年間でした。本当に、長いようで短い年月です。

未来をきりひらく技術者へ

都市環境デザイン工学科1年理事 瀬戸口浩一

昨年の夏、私が仕事から帰ってくると、当時中3の娘が高専での体験入学の話を始めました。

私も高校、大学と土木を専攻していた為、昔を思い出し娘との会話が弾みました。特に液状化現象の実験については、東日本大震災でも取り上げられていた為とても興味深かったようです。

学生時代に教授が「まちづくり」について話していたことを思い出しました。初めて聞く言葉であり、今でも鮮明に思い出します。教授が、技術者として設計をした土留め壁が大雨で壊れてしまい、尊い命を守ることが出来なかった話でした。私も建設業として平成5年の豪雨災害の時に道路、山が崩れ河川が溢れる状況を見て今まで自分たちが豊かな生活を送る為に作り上げてきたものが、壊れている状況を見て大変悲しい思いをしました。しかし、教授の話は、過去において人は、壊れた物と同じ物を作ることをしない。新しい基準を作り更なる良い物を作り上げ現在がある。土木は、特に「まちづくり」において、公共性の高い分野であり、結果として、個人にも町にも恩恵をもたらす、不特定多数の人に、結果として広く利益をもたらす物を作る仕事である。ただし、一つ間違えると、利益を追求してしまい無駄な物を作っているのも事実である。第一に人の命を守ることを考えて作ってほしい。次に人に必ず利益をもたらす物を作る。そして、自然と共存できるものでなければいけないということを教えていただきました。

しかし、最近では、公共工事の無駄について議論されることも多くなり、将来の展望が暗いイメージがあり、従事者が減少しています。阪神淡路大震災に比べ東日本大震災の復興の遅れについてもこのことが言えるのではないのでしょうか。現在建設業者として働く中で若年層の技術者が少ないのが現状です。土木から都市環境デザインと名前は変わっても、学ぶことは同じだと思います。今学んでいることは、人の命をまもり、みんなに利益をもたらすことのできる物を作る技術者になる為に学んでいると考えてほしい。

最後に、明るく豊かな社会を造る技術者として未来をきりひらいてほしい。



[illegible]

平成25(2013)年8月										平成25(2013)年9月										平成25(2013)年10月										平成25(2013)年11月									
曜 日	曜 日	回 数	本 科	専 攻 科	曜 日	曜 日	回 数	本 科	専 攻 科	曜 日	曜 日	回 数	本 科	専 攻 科	曜 日	曜 日	回 数	本 科	専 攻 科	曜 日	曜 日	回 数	本 科	専 攻 科															
1	木	9	3	82	1	日	66	66	1	火	後学期授業開始/全体集会	後学期授業開始/学位授与申請書送付(当日まで)/後学期授業開始/学位授与受付/前半期科目試験/書類受付	1	89	1	金	創立50周年記念式典及び祝賀会(休講)	8	6	111																			
2	金	10	4	83	2	月	66	67	2	水			1	90	2	土																							
3	土	41	42		3	火	67	68	3	木			1	91	3	日																							
4	日	42	43	4	水	編入学判定会議	68	69	4	金	留学生バーチャ/運営会議	後学期選択科目受講品届切/前半期科目試験書類届切	1	92	4	月																							
5	月	15	5	84	5	木	69	70	5	土			96	96	5	火	4年生工場見学旅行/運営会議	5	6	112																			
6	火	16	6	85	6	金	70	71	6	日	ロビン九州沖縄地区大会(熊本・八代)	後学期選択科目受講品届切	96	97	6	水	4年生工場見学旅行	5	5	113																			
7	水	15	7	86	7	土	71	72	7	月	再試験結果入力開始(3時)		1	93	7	木	4年生工場見学旅行	5	5	114																			
8	木	8	8	87	8	日	72	73	8	火			2	94	8	金	4年生工場見学旅行	4	4	115																			
9	金	15	5	88	9	月	73	74	9	水	編入学合格発表		2	95	9	土	4年生工場見学旅行	107	109																				
10	土	43	44	10	火		74	75	10	木			2	96	10	日																							
11	日	45	45	11	水	鹿児島県高専の日	75	76	11	金	校務運営		2	97	11	月																							
12	月	44	46	12	木	夏休み開始/一斉休業日/毎日の代休	76	77	12	土			97	98	12	火																							
13	火	46	47	13	金	運営会議	77	78	13	日	プロコン本戦(地川)		98	99	13	水																							
14	水	47	48	14	土		78	79	14	月	プロコン本戦(地川)/体育の日		99	100	14	木																							
15	木	48	49	15	日		79	80	15	火	再試験結果入力締切(17時)	後学期選択科目受講品届切/月曜日の授業	2	99	16	土	後学期中間試験時間開始/校務運営	5	5	120																			
16	金	49	50	16	月	敬老の日	80	81	16	水			2	99	16	土																							
17	土	50	51	17	火		81	82	17	木			3	3	100	17	日																						
18	日	51	52	18	水		82	83	18	金			3	3	101	18	月																						
19	月	52	53	19	木	後学期時間割配付/受講力アップ/成/成/履入力開始(17時)	83	84	19	土			100	101	19	火	欠席時参加力開始(13時)																						
20	火	53	54	20	金	校務運営	84	85	20	日			101	102	20	水																							
21	水	54	55	21	土		85	86	21	月			3	3	102	21	木	後学期学力・社会人選抜審査(受付24日まで)	7	7	123																		
22	木	55	56	22	日		86	87	22	火	高専祭開催		4	4	103	22	金	IST2013(香港)	7	7	124																		
23	金	56	57	23	月	秋分の日	87	88	23	水	高専祭開催/校内一斉清掃		3	3	104	23	土	IST2013(香港)	6	6	125																		
24	土	57	58	24	火		88	89	24	木	高専祭開催/校内一斉清掃(準備日)		4	4	105	24	日	IST2013(香港)	111	113																			
25	日	58	59	25	水		89	90	25	金	高専祭開催リハーサル(休講)/月曜日の授業		6	3	106	25	月	後学期学力・社会人選抜審査	7	8	126																		
26	月	59	60	26	木		90	91	26	土	高専祭(文化祭)		6	103	107	26	火	金曜日の授業	7	7	127																		
27	火	60	61	27	金		91	92	27	日	高専祭(体育祭)		7	104	108	27	水	後学期中間試験/受講力アップ開始(13時)/後学期欠席時参加力開始(15時)	11	8	128																		
28	水	61	62	28	土		92	93	28	月	高専祭学生代休	休講	102	105	28	木	木曜日の授業	12	8	129																			
29	木						93	94	29	火	高専祭学生代休		103	5	29	金	後学期中間試験	13	8	130																			
30	金	63	64	30	月	閉寮(10時)	94	95	30	水			4	4	109	30	土	後学期中間試験	14	115	131																		
31	土	64	65						31	木		月曜日の授業	4	4	110																								
全国高等学校フオーラム()										教員集会(/ :放課後)・後援会文部総会										4年TOEICP																			
全国高等学校フオーラム(開場場所:豊後技術科学大学・主幹校:香川高専)										学習・教員目標達成の誓約(4年生及び5年生の専攻科入学予定者、10:1:14R時)										授業参観(1~3年生)																			
授業評価アンケート										中学生及び保護者のための学校説明会()										授業参観・相互参観																			
										3・4・5年生交流(テーマセリクテリク)										JAEE技術者教育プログラムの説明(3年生の特別活動)																			
										学校・職域連携										九州沖縄地区高専冬季体育大会(八代高専)																			

編 集 後 記

「高専だより」第67号をお届けいたします。

今回より年1回の発行へ変更することになりました。同時に、過去の「高専だより」や、皆様へ早く御案内したい記事に関しては、本校ホームページから閲覧できるようにしました。

今回の特集は「インターンシップ」についてです。本科4年生や専攻科1年生の希望者を対象に、本校の夏季休業を活用し、実際の職場で研修する機会が得られるものです。働くことや、専門性を高める為の進学、実社会と専門分野の繋がり等、より具体的なイメージを持てる機会です。学生の経験談も含め、お届け致します。

今年度を振り返ると、春にはスカイツリーがお披露目され、夏にはロンドンオリンピックが開催された年でした。学生にとっても歳があまり変わらない選手達の活躍は、より響くものがあったのではないかと思います。秋には山中教授のノーベル賞受賞もありました。様々な分野の進歩が見え、上を向く機会に恵まれた年だったのかもしれません。

最後になりますが、高専だよりの発行にあたり、ご多忙の中、原稿執筆を快くお引き受けいただきました執筆者各位に対して、委員一同厚く御礼申し上げます。

都市環境デザイン工学科 毛利 洋子

「高専だより」専門委員会委員

委員長	毛利 洋子（都市環境デザイン工学科）
委 員	鞍掛 哲治（一般教育科文系）
	嶋根 紀仁（一般教育科理系）
	岩本 才次（機械工学科）
	井手 輝二（電気電子工学科）
	新田 敦司（電子制御工学科）
	幸田 晃（情報工学科）

担当事務 脇園 好光（総務課企画係長）

「鹿児島高専だより」第67号

編 集 鹿児島工業高等専門学校 広報委員会

発 行 鹿児島工業高等専門学校

〒899-5193

鹿児島県霧島市隼人町真孝1460-1